五輪書

鎌田茂雄

一切の甘えを切り捨て、ひたすら剣の道に生きた絶対不敗の武芸者宮本武蔵。武蔵は、「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を錬とす」る何十年にも亙る烈しい朝鍛夕錬の稽古と自らの生命懸けの体験を通して「万理一空」の兵法の極意を究め、その真髄を『五輪書』に遺した。本書は、二天一流の達人宮本武蔵の兵法の奥儀や人生観を知りたいと思う人々のために、『五輪書』の原文に現代語訳と解説、さらに「兵法三十五箇条」「独行道」を付した。

定価760円(本体738円)

ISBN4-06-158735-8 C0110 P760E (2)

鎌田茂雄（かまた しげお）
1927年神奈川県生まれ。東京陸軍幼年学校，陸軍予科士官学校を経て，駒沢大学仏教学部卒業。東京大学大学院博士課程修了。東京大学教授を経て，現在東京大学名誉教授，愛知学院大学教授。文学博士。専攻は中国仏教史・華厳教学。学士院賞受賞。天道流合気道五段。著書に『中国仏教史』『仏陀の観たもの』『禅とはなにか』『八宗綱要』『天台思想入門』『華厳の思想』『般若心経講話』『中国の禅』などがある。

定価はカバーに表示してあります。

五　輪　書
宮本武蔵著／鎌田茂雄全訳注
1986年5月10日　第1刷発行
1991年12月20日　第12刷発行
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-01
電話　編集部（03）5395-3512
販売部（03）5395-3626
製作部（03）5395-3615
装　幀　蟹江征治
印　刷　株式会社廣済堂
製　本　株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えします。
なお，この本についてのお問い合わせは学術文庫編集部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-158735-8　（庫術）

五　輪　書

宮本武蔵

全訳注　鎌田茂雄

講談社学術文庫

はしがき

激動の現代に生きるわれわれは、常に心の安まるときがない。秒単位で動くと言っても決して過言ではないわれわれは、心のよりどころをどこに置くべきなのであろうか。

ここに絶対不敗の武芸者がいた。それは一切の甘えを切り捨て、ひたすら剣に生きた宮本武蔵であった。武蔵は敵を「斬る」ことに必要のないものはすべて捨て去り、徹底した実利主義と合理主義に生きた。彼の言葉は不安な時代を生きるわれわれに、人生の壁に立ち向かう生き方を教えてくれる。

どんな仕事も学問も芸術も、少しずつ不断に継続することによって大いなる力となる。宮本武蔵の『五輪書』は朝鍛夕錬(ちょうたんせきれん)の稽古(けいこ)を説く。「千日の稽古(けいこ)を鍛(たん)とし、万日の稽古を錬(れん)とす」（水之巻）という。しかも稽古は「千里の道もひと足づつはこぶなり」でなければならない。一気にすることは邪道(じゃどう)であり、一歩一歩、稽古を積むことによって次第に道の深奥を体得することができるのである。

私は日本の武道の一つである合気道の稽古を少しずつ続けているが、一気に覚えることは

絶対にできないものであることが分った。形だけをまねることは勘がよい人であれば、すぐに覚えられるが、絶対に一気にできないものがある。それは気の動きを体得することである。気は自分の身体から発するものではあるが、それは相手の気と一つになるだけでなく、宇宙の気の流れと一体にならなければならない。宮本武蔵が兵法の至極として悟った「万理一空」は、巌流島の決闘後、三十年の歳月をへて悟得されたものであった。

本書は、宮本武蔵の兵法の奥義や人生観を知りたいと思う人々のために、『五輪書』の原文と、現代語訳を付したものである。なお「参考」とあるのは、『五輪書』のその条文に相当する「兵法三十五箇条」の条文をかかげたものであり、「付記」は、『五輪書』の条文についての、私の理解なり、関連のことがらを記したものである。武蔵の兵法の大要を知りたい方は、「解説」か「訳文」だけでも読んで頂ければ幸いである。

『五輪書』は昔から私の愛読書の一つであったが、このような形で本書を学術文庫の一隅に加えてくださったのは、講談社学術局の池永陽一氏の切なる御慫慂のおかげである。ここに厚く御礼を申しあげたいと思う。

昭和六十一年四月一日

世田谷・梅岑洞にて　　鎌田茂雄

目次

はしがき……3
「五輪書」を読むにあたって……9
地之巻……39
水之巻……89
火之巻……155
風之巻……211
空之巻……241
兵法三十五箇条……247
独行道……262

五輪書

『五輪書』を読むにあたって

孤絶の風光――独行道とは

熊本市の西郊、金峰山の山ふところにある雲巌寺に、一つの洞窟がある。寛永二十年十月十日、午前四時、一人の武芸者が、自分の余命の残り少ないことを悟って、その洞窟にこもり、『五輪書』と言われる兵法の指南書を書きはじめた。これは武芸者のおよそ五十年にわたる命がけの修行の総決算とも言うべき、兵法の極意書であった。

まよひの雲の晴れたる所こそ、
実の空としるべき也。
空を道とし、道を空と見る所也。（空之巻）

この言葉は『五輪書』のエッセンスであり、剣の求道者、宮本武蔵が到り得た究極の境地であった。

宮本武蔵は、『五輪書』の完成に二年を費やし、完成後、一ヵ月ほどして死んだといわれる。六十二歳という。

慶長十七年(一六一二)四月十三日、宮本武蔵と佐々木小次郎は、関門海峡に浮かぶ一つの小島、巌流島で対決した。武蔵は舟のカイで作った木刀をもって、一瞬の間に、小次郎を打ち倒したと伝えられている。

宮本武蔵は決闘のあと、なぜか杳としてその姿を消してしまった。細川五十四万石の城下町、熊本へ姿を現わしたのは、巌流島の決闘から二十八年たってからのことであった。

空無の世界に生きるようになった武蔵は、闘鶏図や蘆雁図など多くの芸術作品を残した。

武蔵は『五輪書』の冒頭の部分でつぎのようなことを言っている。「二十八、九歳まで、六十回以上勝負したけれど一度も、負けなかった。しかし、これは、兵法の道を極めたから勝ったのではなく、たまたま、理にかなっていたか、相手が弱かったにすぎない。その後、なんとか道理を得ようと朝に夕に鍛錬して五十歳のころ、はじめて兵法の道にかなうようになった。そうしたら、それが諸芸にも通ずる道で、わたしには師匠というものはない」と。

武蔵の芸術活動にも剣法にも、師匠はなかった。かくして到達した独自の境地を『五輪書』として表現した。『五輪書』は兵法の奥義を説いたものであったが、箇条書きに簡潔に自らの人生観を説いたのが「独行道」であった。

「独行道」を書いたのは、死ぬ七日前であった。武蔵は最後の力をふりしぼって自戒の書である「独行道」を書いたのであった。それは武蔵の遺言ともいうべきもので、彼の生き方のほんとうの姿をあらわすものでもあった。以下、『五輪書』と「独行道」のなかのいくつかの言葉を選びながら、そのあまりにも厳しい武蔵の生き方を述べてみよう。

役に立たぬことをしない

『五輪書』の「地之巻」の終わりの方に、武蔵の人生観をあらわす言葉が書き列ねられているが、そのなかに注目すべき言葉がある。それは、

第五に、物毎の損徳をわきまゆる事
第九に、役にたゝぬ事をせざる事

である。武蔵は理にかなったことしかしなかった。合理的に利害と損得をわきまえたのであっ

た。そしてそれは一見、実利主義そのものに見えるが、しかしこの実利主義は実は「斬る」ことに徹する実利なのであった。それはつぎの『五輪書』（水之巻）の言葉に明らかである。

先づ太刀をとつては、いづれにしてなりとも、敵をきるといふ心也。若し敵のきる太刀を受くる、はる、あたる、ねばる、さはるなどといふ事あれども、みな敵をきる縁なりと心得べし。

これを見れば武蔵の合理主義、実利主義が何であるかがはっきりするではないか。兵法は敵を斬ることのみが目的であり、斬ることができないような剣は無用な剣となる。

これは宮本武蔵の半生の経験からきた言葉なのである。剣は道であることを体得したのは、武蔵の晩年のことであり、若い時には相手を倒す、斬り殺すということに一切をかけたのであった。一つの目的、価値に一切を集中する武蔵の生き方が、ここに見事に凝集しているではないか。

この武蔵の実利主義は、命がけの実利主義であった。普通の現代のわれわれがいう実利主義ではなくて、生きるか死ぬかの実利主義であった。

「独行道」のなかに、

道においては死をいとはずおもふ。

という言葉があるが、兵法の修行においては死ぬことをまったくいとわぬのである。何時、死ぬのかまったく分からぬ兵法者の覚悟である。

このように死をいとわぬ境地になりきるためには、どんな修行をしたらなれるのであろうか。『五輪書』の「水之巻」につぎのような言葉がある。

千里の道もひと足宛はこぶなり。……

千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。

鍛錬という言葉があるが、鍛とは千日の稽古であり、錬とは万日の稽古なのである。それを武蔵は「朝鍛夕錬」という言葉であらわすこともある。朝、夕の不断の鍛錬によって死をいとわぬ境地がつくられてゆく。

別れを悲しまず

つぎに「独行道」の言葉をみよう。

いづれの道にもわかれをかなしまず。

人生とは別れの連続である。現代においては単身赴任のサラリーマンは赴任するとき、妻や子と別れなければならない。しかし一週間たてば、あるいは一月たてば、また会えると思うから、悲しまなくても別れることができる。だからそれほど別れを悲しまなくともよいのであるが、兵法者はそうはゆかない。人と別れた後に立ち合いをすれば、何時、死ぬるか分からないのである。明日、死ぬかも知れないのである。だから人と別れるときは、もはやふたたび会うことができない、と覚悟しなければならないのである。

友人と別れるときは淡々と別れることができるかも知れないが、愛する妻や子と別れるときは思いが残るものである。海外出張するとき、妻や子と別れて赴任するのはやはり別れがつらいものである。しかし人生というものは別れなのである。死ぬときは永遠の別れとなる。ふたたび会うことができない別れとなる。遺体が火葬場で焼かれて骨となって目の前に現われたときを見よ。もはや愛する人の姿を永遠に見ることができないのである。

別れを悲しまなかった武蔵は、愛する女性もそばによせつけなかった。伝説によると、武蔵を恋慕った女性がいたようである。しかしその恋はみのることがなかった。剣の道に生命

をかけた武蔵は女性を遠ざけた。女性は兵法の修行にとって邪魔でこそあれ、何の役にもたたぬものであった。強烈な実利主義に生きた武蔵は、恋とか愛を無用なものとみなしたのであった。「独行道」に、

恋慕の道、思ひよるこころなし。

と記したのはそのためであった。女性を愛したり、恋慕ったりする気持は一切ないというのである。女性を愛することによって思いがたかまる。思いというのは仏教の言葉でいえば執着となる。一切の執着を絶つことを目指した武蔵は、女性を恋する心も絶ったのである。お通さんがどんなに武蔵を愛し恋慕って追いかけても、武蔵はその恋を受けいれなかったのである。たしかに一事を成さんと男子が志をたてたならば、女性は邪魔でこそあれ、何の役にもたたぬものである。女性と会話をしたり愛しあったりする時間があれば、その時間は無駄なことなのである。無用なことなのである。その時間を兵法の鍛練にあてることが必要なのである。

人間はひとりで生まれて、ひとりで死んでいくだけである。生まれ、生き、死んでいくのに、自分に伴侶となるものはまったくない。たとえ夫婦であってもそうである。夫婦も心中

でもしない限りは、死する時はひとりで死するしかないのである。夫婦は一つであり、愛によって結ばれているというのは、世間の表面的な道徳をもとにした通念にすぎない。

どんなに愛しあった二人が会う時もひとりであり、別れてもひとりなのである。人間はいつ、いかなる時でもひとりなのである。相会う時も、別れてもひとりということは、真の孤絶の風光を見た者のみが自覚することができることなのである。

宮本武蔵は「独行道」のなかで「別れを悲しまず」といったが、武蔵が歩んだのはまさに孤絶の世界であった。武蔵がどんな人との別離に際しても、別れを悲しむことがなかったのは、いつもひとりであることを深く強く自覚していたからであった。

武士と求道者は死ぬことをまわりの人に知らせないのが建て前なのであった。兵法者に徹した武蔵は、霊巌洞の中で死の直前、観音菩薩を拝しながら、死出の行を積んだが、臨終に際しては、細川家の人びとや弟子にみとられながらその生涯を終えた。それは独行道を歩んだ兵法者にふさわしいあまりにも寂しい旅立ちであった。

一切、後悔しない

「独行道」のなかでもっとも有名な言葉は、

我、事において後悔をせず。

である。われわれ凡人は、毎日が後悔の連続である。昨夜、酒をのみすぎたのはまずかった、と二日酔のときには痛切に思うものである。そのほか自分の行動を後悔することが何と多いことか。しかるに武蔵は、自分はどんな事があっても後悔することはないと言うのである。
　武蔵は役に立たないことを一切しない、という徹底した実利主義の道を歩んだ。そのため後悔するのは無駄であると深く思いきわめていたのであった。武蔵は非情な合理主義者であった。
　人生は後悔しても何にもならない。生命懸けで生きている者にとって後悔は不必要なのである。
　永禄三年（一五六〇）織田信長は桶狭間出陣に当たって、清洲城で幸若舞の敦盛の一節を舞った。

　人間五十年
下天のうちをくらぶれば
夢幻のごとくなり

一度生を得て
滅せぬもののあるべきか

奇襲の成功で、今川義元を討ちとり、歴史的逆転劇を演じた信長は、それから二十二年後、天正十年（一五八二）本能寺において、まさしく謡の如くに人生五十年（四十八歳）で滅んだのであった。

人生五十年、変転すること夢幻のごとくである。生者必滅の道理は、仏教の説くところである。信長はこの謡を熱愛した。信長はその時その時に生命をかけていた。生命をかけた者は生ずるのも滅するのも、どうでもよいことなのである。死ぬ時は死ぬ。ただそれだけであった。信長は人生を夢幻と観じ、生命をかけて生きたのであった。

一皮めくれば人間はただ死のうは一定、それだけのことである。母親の胎内から生まれた人間は、ただ死ぬ目標に向かって生きているだけなのである。信長にとっては死のうは一定、それが彼の全部であり、天下のごときは何物でもなかった。彼はいつ死んでもよかったし、いつまで生きていてもよかったのである。武蔵もまた生命をかけた兵法者であった。いつ、敵に殺されてもよかった。

武蔵が一切、後悔をしないというのは兵法に生命をかけていたからであった。徹底した合理主義者の行動は、かえって非合理的な行動に見える。また徹底した無神論者の行動は、かえって真に宗教的でさえあり得る。

仏神を頼まず

徹底した合理主義者であった武蔵は、徹底した無神論者でもあった。「独行道」のつぎの言葉を見よ。

仏神は貴し、仏神をたのまず。

武蔵は仏神を尊敬したが仏神に頼ることをしなかった。『五輪書』・「地之巻」の初めにこう書かれている。

今此書を作るといへども、仏法・儒道の古語をもからず、軍記・軍法の古きことをももちひず、此一流の見たて、実の心を顕はす事、天道と観世音を鏡として、十月十日の夜寅の一てんに、筆をとつて書初むるもの也。

武蔵は『五輪書』を書くとき、仏教や儒教や軍記もの、兵法書などに出てくる既成の観念や言葉を用いなかった。二天一流の考え方をあらわすことに一切を集中した。執筆にあたっては、天道と観音を鏡として書いたというのである。

武蔵は観音像を彫ったことであろう。仏神を鏡としたということは、仏神を敬っていたということになる。仏神を敬いはしたが、けっして仏神を頼りとすることはなかった。徹底した合理主義者であり、冷徹な兵法者であった武蔵は、仏神に頼ることをしなかった。頼ることができるのは自分自身だけであった。もちろん知友、その他の人間に頼ることもなかった。神にも仏にも頼ることがなかった。生命がけで生きる人にとって神や仏は必要がなかった。

中国の唐の時代に生きた禅僧である臨済は、

「仏にあったら仏を殺し、祖にあったら祖を殺し、羅漢にあったら羅漢を殺し、父母にあったら父母を殺し、親族にあったら親族を殺し、そこで始めて解脱することができる」(『臨済録』)と言っている。普通の仏教徒がこんなことを言ったならば、それこそ仏罰があたるようなことを平気で言っているのである。それは仏のような絶対者をたてて、それに頼るのでなく、何ものにもとらわれない自在な境地を切り開かなければならない、というのである。

われわれ凡人は困った時に神仏に頼りたがる。しかしそれはほんとうの宗教ではない。宗

教の極まるところは武蔵の境地でなければならない。神仏は貴ぶけれども、けっしてそれに頼らないということである。それでは晩年に武蔵の到達した世界は一体、何であったか。

武蔵は『五輪書』の最後（空之巻）においてつぎのように言っている。

武士は兵法の道を慥に覚え、其外武芸を能くつとめ、武士のおこなふ道、少しもくらからず、心のまよふ所なく、朝々時々におこたらず、心意二つの心をみがき、観見二つの眼をとぎ、少しもくもりなく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空としるべき也。

武士は兵法の道に通じることが一番大切であり、そのために朝鍛夕錬することは当然なことであるが、さらに「心意二つの心をみがき、観見二つの目をとぐ」ことが必要となる。観の目と見の目とを分けている。目で見るのが見であり、心で見るのが観なのである。心とは臍下丹田（臍の下の下腹部にあたるところ。力を入れると健康と勇気を得るという）である。この丹田で相手の気の動きを見るのである。観の目がはたらくようになるには、一朝一夕でできるものではない。長い間の朝鍛夕錬の結果、臍下丹田で見えるようになるのである。

心で見ることができるようになると「少しもくもりなく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空としるべき也」となる。武蔵が究極に目指したのは、まよいの雲が晴れた万理一空の

境地であった。そこにはまったく迷いがなかった。殺されても死んでも迷いはなかった。

武蔵は晩年、霊巌洞に行き、坐禅をした。坐禅をしていたとき、雲の間から光りが見えた。それは仏の光明のようであった。武蔵は剣を抜いてその光を斬った。そのとき、仏を殺したのであった。仏を殺したとき、武蔵は何を見たか。武蔵は万理一空を見た。まよいの雲の晴れたところを見た。それが武蔵の悟りであった。かくして「仏神は貴し、仏神をたのまず」という「独行道」の言葉が生まれたのである。

現代に生きるわれわれは、背後から突然に人に斬られることはないが、サラリーマンの世界では刀で斬られることはなくとも、同僚や他人に地位や心を切り殺されることはあるものである。武蔵が生きた道とは、神仏を頼まず、自分自身だけを信じて己れの力の全力を出しきって切り開いた境地であった。それは一切の甘えを捨てることであった。それは自らが自らに勝負する世界であった。

この武蔵の生き方は、現代でもなお形をかえて生かされなければならない。「独行道」のなかに「身ひとつに美食をこのまず」とあるが、別に美食をしたり、よい道具を持ったりする必要はまったくないというのである。それは兵法の道を完成するために、一切を切り捨てなければならないからである。武蔵は兵法の修行に役にたたないことを一切しなかった。まさ

しくそれは普通の人にはできないことではあるが、やはり武蔵の歩いた道を、現代に生きるわれわれも学ぶ必要がありはしないか。それによって人生の困難に打ち勝つ道を見出すことができると思う。

武蔵の生涯

宮本武蔵の生涯ははっきり分からない。武蔵の確実な伝記資料は、武蔵の自筆本である『五輪書』の序文と、承応三年（一六五四）、泰勝寺（たいしょうじ）の春山和尚が撰し、宮本伊織（いおり）が建てた墓碑銘だけである。豊田正剛の覚書を子の正脩、および孫の景英が補訂して編纂した『二天記』や、『兵法大祖武州玄信公伝』、『兵法二天一流相伝記』などは、武蔵没後、八十年から百二、三十年後に編集されたもので、さまざまな伝説が混入し、歴史資料として信用することはできない。『五輪書』の序文のみでは武蔵の生涯を書くことができないので、ここでは宮本武蔵遺蹟顕彰会編の『宮本武蔵』（金港堂書籍、明治四十二年四月）によりながら、その生涯を簡単に述べておく。

武蔵は美作国吉野郡宮本村で新免無二斎の子として生まれた。ただし『五輪書』の序文では生国（しょうこく）、播州（ばんしゅう）の武士と記している。その生年月は不明であるが、『五輪書』の「地之巻」の

序文にしたがえば、武蔵の生年は天正十二年（一五八四）となる。十三歳のとき、播州において新当流の名人、有馬喜兵衛と試合して勝ったといわれる（『二天記』）。十六歳のとき、但馬国の兵法者、秋山某と試合して勝利を得た。関ケ原の役に従軍したといわれるが確証はない。二十一歳のとき京都の将軍家兵法師範役、吉岡清十郎を一撃の下に倒し、さらに弟、伝七郎を倒した。そのため吉岡門下と一乗寺の下り松のそばで決闘を行ったことは有名な話である。

その後、南都の槍術で有名な宝蔵院胤栄の弟子、奥蔵院と立ち合いこれを下した。また江戸に出た武蔵は夢想権之助と戦い、さらに柳生流の剣士とも立ち合って勝利を得たという。

武蔵が闘った相手は、槍や太刀だけではなかった。伊賀国では宍戸某という鎖鎌の名人と立ち合った。『五輪書』の序文は、勝負を争うこと六十余回と自ら記しているとおり、武蔵は数多くの兵法者と闘ったことは事実であろう。しかもその間、一度も敗れたことがなかったのである。

慶長十七年（一六一二）四月、武蔵は京都より豊前小倉に来た。武蔵の父、新免無二斎の門人であった小倉藩（藩主、細川忠興）の家老、長岡佐渡興長の縁を求めたのであった。その目的は、細川家に抱えられた剣名高い巌流佐々木小次郎と勝負を争うためであった。試合

は小倉の孤島、船島で行われることになった。これが有名な巌流島の試合であり、小説や映画で有名な場面である。

大坂の陣のとき、武蔵は大坂城に馳せ参じたというが不明である。その後武蔵は常陸国、出羽国を廻り、出羽国の正法寺ヵ原で童子を得たが、この童子こそ、後年武蔵の養子となった宮本伊織であるというが、その真疑は未詳である。武蔵はその後、出雲国、尾張名古屋など諸国を巡り、多くの兵法者と立ち合ったようであるが、その真相ははっきりしない。

寛永九年(一六三二)、細川忠利が熊本城主となり、小倉には小笠原忠真が封ぜられた。寛永十一年(一六三四)、武蔵は小倉に来て、滞在すること数年、寛永十四年(一六三七)、島原の乱に際しては、伊織とともに従軍した。寛永十七年(一六四〇)、武蔵は細川忠利の招きに応じて熊本へ入り、客分として遇され、居宅を賜った。寛永十八年(一六四一)二月、細川公の命によって、武蔵は「兵法三十五箇条」の覚書を書き、これを細川公に奉じた。これが二天一流の武蔵の兵法を筆に記した最初のものである。また武蔵の高弟、寺尾氏にも自筆の「兵法序論」一巻を伝えた。

この「兵法三十五箇条」を奉呈してまもなく、忠利公は五十四歳にして没した。武蔵は己れの兵法を弘めるために忠利公を頼りにしていたので、その後の武蔵は兵法指南の外は、世

を捨てて、詩歌、茶、書、彫刻などに没頭した。武蔵の二天一流は、寺尾求馬助（藤兵衛）信行、およびその四子（五男ともいう）、弁助信盛（信森）に伝えられたのであった。

武蔵は熊本に来てから、泰勝寺（細川家菩提寺）の僧、春山和尚と親交を結び禅を学んだ。武蔵は時おり、岩殿山の霊巌洞に籠って坐禅修道に励んだ。

正保二年（一六四五）の春頃より、武蔵の病いは次第に重くなり、四月になり、自から再起不能を悟るや、家老衆に一書をおくった。その後、岩殿山の霊巌洞に行き、静かに死期を迎えようとしたが、城下の居宅に連れ帰られて病いの介抱を受けた。病いが重くなった五月十二日、武蔵は長岡寄之、および沢村友好に遺品として腰刀、鞍を贈り、寺尾勝信に『五輪書』を、寺尾信行に「兵法三十五箇条」を贈った。最後に自戒の書として「独行道」を書き、これを辞世の書としたのであった。五月十九日、居宅にて病没した。ときに六十二歳とも、六十四歳ともいわれるが、六十二歳ではなかったか。遺言により甲冑を帯び武具で固めて入棺し、これを葬った。春山和尚が引導をわたしたが、このとき一天にわかに曇って雷鳴がとどろきわたった。武蔵の死は長岡監物より小倉の宮本伊織のもとに知らされた。承応三年（一六五四）、伊織は春山和尚に依託して碑文を撰し、これを小倉の城下にたてたのである。

五輪書とは

『五輪書』は二天一流の兵法を書き記したものであり、この書をあらわすにいたった因縁は「地之巻」の冒頭に書き記されている。それによると、寛永二十年（一六四三）十月十日の夜、武蔵は岩戸山（熊本市の西方の金峰山麓）に上り、天を拝し、観音を礼して書いたのが、この『五輪書』であり、そのとき武蔵は六十歳であった。

武蔵が自らの兵法書を始めて書いたのは、六十歳になってからであった。その前後、数年間の兵法の鍛錬のなかで、自らあみだした二天一流の兵法の型を書き記す気持になったのであろう。しかも神仏を崇ぶが、神仏に頼らなかった武蔵が、天と観音を礼拝し、仏前にむかって『五輪書』をしたためたのである。

巌殿山（岩戸山）の洞窟の中に端然と坐った武蔵は、自らの生涯の回顧にふけった。十三歳のときから強力な兵法者と勝負をしながら、佐々木小次郎と決闘した二十九歳の頃まで、六十余度の勝負をしたが、一度も負けたことはなかったという。

巌流島での決闘を終った武蔵は、その後、朝鍛夕錬の修行をつづけ、五十歳頃になって兵法の真髄を会得したのであった。実に二十年の悪戦苦闘の鍛錬が実を結んだのであった。か

くしてその真髄を書物としたのが、この『五輪書』なのである。

『五輪書』の序文の最後にこの『五輪書』を執筆する心掛を書いているが、その中で、

仏法・儒道の古語をもからず、軍記・軍法の古きことをももちひず

と述べているが、このこともまた重要である。普通は書物を書く時、その用いる言葉は自分が過去に修得した既成の概念によって書くものである。たとえば柳生流の剣法の極意を書いた『殺人刀』にしても、沢庵禅師から禅を学んだ柳生宗矩の思想にはどうしても禅の言葉が多く入ってくる。下手をすると、それは借り物の言葉となる。言葉だけで飾ったことになる。試みに沢庵の『不動智神妙録』と、『殺人刀』とを比較してみよ。思想面について書く時、いかに多くの影響を『不動智神妙録』より得ているかは一目瞭然ではないか。

しかるに武蔵は仏教や儒道の言葉、兵法書である軍記や軍法の言葉をまったく用いることがなかった。当時の思想を表現するものといえば、仏教の経典、禅の語録や、儒家や道家の『論語』『中庸』『老子』『荘子』などしかなかった。これらの言葉で武道の至道を語るならば、それは当然、仏家や儒家の書物のようになってしまう。もちろん武蔵の「空之巻」においては仏教の「空」とか「無」とかの用語は用いているが、その意味するところはまったく別な

ところにある。「神仏を頼まず」と言った武蔵にとって仏陀は問題でなかった。仏陀や観音菩薩を尊敬はしていたがまったく彼らに頼んだり、願ったりする意志のない武蔵にとって、仏陀や観音菩薩は視界に入らなかった。「万里一条鉄」という禅語があるが、ただ真直ぐにどこまでも一本につづく道には仏や神は必要としなかった。否、武蔵が目ざしたのは仏や神を超えることであった。慈悲だの愛だの、幸福だの、現世利益など説く仏や神は人間をたぶらかすものにすぎなかった。それは真に死にもの狂いの修行をする者の障害にすぎなかった。修道の障げにすぎなかった。存在すること自体が邪魔ものにすぎなかった。

このような武蔵が仏語や儒家や、老荘の言葉を借りずにこの『五輪書』を書くということは武蔵の決意を見事に示している。それは自己の経験によって実証された言葉によって書くことを意味する。経験によって裏打ちされていない空疎な概念をどこまでも排除して、自らが体験によって確信した真実のみを彼は書きたかったのである。

それ故、武蔵が『五輪書』で用いる儒家や禅や老荘の言葉は武蔵の体験を通してつづられた言葉であり、本来の儒家や仏家や老荘の言葉とはまったく無縁なのである。どうしても上手く表現できないのでその言葉を用いただけであって、禅や老荘の教えを『五輪書』は説いているのではない。ただ武蔵が体験によってのみ得た人生と世界の真実を説いただけなので

ある。その自信が、「今、此書を作るといへども、仏法・儒道の古語をもからず、軍記・軍法の古きことをももちひず」というまことに確固とした信念の奔流となったのである。そこで『五輪書』のなかの仏教語や禅語だけをひろいだして武蔵の禅などをあげつらう学者は、『五輪書』の真の性格を知らざることあまりにはなはだしいものがあるといわねばならない。

人の言葉を借りたものは迫力が乏しい。この『五輪書』の全巻は、武蔵自身の言葉、しかも強烈な体験に裏打ちされた言葉によって書かれているものである。自己の体験のみを真実として書かれたこの『五輪書』こそ、日本思想史の上においても稀有なるものである。また兵法書のなかで、言葉のあやや、儒仏の言葉を借りて書かれたものと比べてみると、この『五輪書』こそもっとも素朴な兵法の基本書であるといっても過言ではない。

『五輪書』は仏教の「地・水・火・風・空」という言葉をかりた五巻から成っている。「地之巻」では兵法二天一流の綱要を述べ、二天一流の兵法の理論的根拠を明らかにする。「水之巻」では二天一流と名付ける理由や、二天一流の太刀筋の大略を記している。「火之巻」では、兵法の実際の技法を述べたもので、敵に打ち勝つための技法を二十七条にわたって論じたもので、兵法の実際が明らかにされている。「風之巻」では、諸流の兵法の特徴を明らかにしたものであって、二天一流と他の諸流との技法と心法上の相違を九条にわたって論じたもので、

二天一流の兵法の特色をはっきりとつかむことができる。最後の「空之巻」は二天一流の兵法の究極である「万理一空」について述べたものである。

武蔵の禅――万理一空とは

武蔵は晩年、霊巌洞にこもって坐禅に没頭した。それは春山和尚との親交を通じ、兵法の道と、禅の道の究極を求めるためであった。『五輪書』のなかで「まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空と知るべき也。空を道とし、道を空と見る所也」と述べ、「万理一空」という武蔵の禅の悟道があらわれている。

伝えられるところによると、武蔵は「山水三千世界を万理一空に入れ、満天地とも挈る」という心を題として、

乾坤を其侭庭に見る時は、
　我は天地の外にこそ住め

と詠じたという。宇宙乾坤の広大無辺を、そのまま自分の庭と見よ、というのである。そうなれば自分は天地の外に住んだことになるという。仏者や禅者であれば、天地、万物と同様

であることを悟るのであるが、武蔵は、自分は天地の外に住み、無限の宇宙と天地を見きわめるのだ、庭と見るのだ、と言っているのである。この歌にあらわれた武蔵の境地は、禅の境地とは別の境地と言わねばならない。

武蔵は春山和尚の暗示で、ひたすら坐禅をした。このとき歌った歌に、

坐禅して工夫もなさず床の上に
只徒らに夜を明すかな

というのがある。おそらく病いが重く死期を悟った武蔵が、霊巌洞で寂然として坐禅を組んだのであったが、もはや工夫をなすこともなく、ただ坐床に坐っていたのではなかったか。しかも「夜を明すかな」と言っていることによって分かるように、徹夜の坐禅が行われていた。この歌は、あるいは身体がまだ元気なときの歌であったかも知れない。武蔵ははげしい気力を充実させて徹夜の坐禅に挑戦したのであった。その坐禅のかたわらには太刀を置いていたにちがいない。

つぎの歌を見よ。

振りかざす太刀の下こそ地獄なれ
　一と足進め先は極楽

武蔵は岩の上で徹宵の坐禅に入った。彼は仏になることにその全精力を傾注した。夜空には満天の星が輝やいていた。武蔵は半眼を開いて星を見た。この天地乾坤の大宇宙が庭に見えた。自分は天地の外に超然としていることを悟った。しかしまだ仏の姿は見えなかった。

突然、暗黒の一点から光りが発して武蔵をおそった。武蔵は瞬間、太刀を払った。その太刀風は光りを斬った、と見るや、ふたたび暗黒の夜にもどった。武蔵は仏を斬ろうとした。仏があると、真の空に到達できないと思った。「独行道」のなかで「神仏を頼まず」と言いきった武蔵は、神仏に頼ることはなかった。神仏の姿を見ることもなかった。そんなものが存在するとも思わなかった。

武蔵が振りかざした太刀の下には地獄があるだけであった。武蔵に敵対する兵法者は、武蔵の太刀の下に一瞬にして命を失った。まさしく地獄に堕ちなければならなかった。仏もまた武蔵の太刀の下に地獄におちなければならなかった。

「一と足進め先は極楽」というのは、どういう意味かはっきりしないが、兵法の技法でいう

ならば、一歩踏みこむことによって相手の死命を制することができるのが兵法の定道である。腰をひき後退するよりは、敵の中に一と足進み入れて強く猛く斬り下げるとき、敵を瞬時にして倒すことができるのである。このような兵法の技法でこの歌が書かれたと解釈してもよいが、その真意はそのようなことを言っているのではない。

禅の言葉に「百尺竿頭に一歩を進め、十方刹土に全身を現ず」というのがあるが、武蔵が「一と足進め」と言っているのは、まさしく百尺竿頭に立って、さらに一歩を進めることである。生死の関頭にたちながら、それをさらに超出するのである。敵の太刀の下にあっても生死を超脱しているならば、そこには地獄はない。否、極楽もないのである。さらに仏もないのである。

唐の臨済義玄の語録『臨済録』のなかには、

山僧が見処に約せば、嫌う底の法無し。儞若し聖を愛せば、聖といふは聖の名なり。一般の学人有つて、五台山裏に向つて文殊を求む。早く錯り了れり。五台山に文殊無し。儞、文殊を識らんと欲すや。祇儞が目前の用処、始終不異、処処不疑なる、此箇是れ活文殊。儞が一念心の無差別光、処処総に是れ真の普賢。儞が一念心自ら能く縛を解いて

随処に解脱す、此是観音三昧の法なり。

という言葉が見える。その意味は、臨済の見解では、すべてのものごとに、これは嫌いだというべきものは無いというのである。お前たちが、もし仏を愛したとしても、仏とは仏という名にすぎない。一般の修行者たちは五台山に文殊がいると考えるが、とんだ間違いだ。五台山に文殊はいないと断言する。お前たち、文殊を識りたいと思うか。お前たちが朝から晩までの日常生活において、行住坐臥、いつも自己一枚であればそれが活きた文殊である。お前たちの一念のあらゆる差別の底に平等を見るはたらきこそ真の普賢である。お前たちの一念が、自らよく環境の束縛を受けず、いたる処で自由であり得たならば、それが観音菩薩の三昧だ、というのが臨済の仏や文殊、普賢、観音についての考え方なのである。

五台山は中国の唐の中頃から文殊菩薩の霊場として深い信仰を集めていた。文殊菩薩のお姿を見ようとした巡礼者は、全中国ばかりでなく、インドや西域、朝鮮や日本からも遠く五台山の巡拝の旅に出たのであった。それは五台山に文殊が出ると、かたく信じていたからであった。また四川省の峨眉山には普賢菩薩が、さらに浙江省の舟山列島の補陀落山には観音菩薩が示現すると、中国の仏教徒には信じられていたのであった。

しかも臨済が住していた臨済院は河北省正定県の滹沱(こだ)河のほとりにある寺であった。滹沱河は五台山から源を発する河であり、日本の円仁(えんにん)も、この流に沿って五台山に入山したのである。臨済は五台山に入る巡礼僧をこの目で見ながら、あえて五台山には文殊はいないと断言したのであった。仏でも文殊でも外にいるはずはなく、自己の心の奥底にこそ仏も文殊もいるというのである。

この臨済の見解は、そのまま宮本武蔵にも通じるものなのである。

武蔵が最後に見たのは空無であった。自ら筆にした「寒流帯レ月、澄如レ鏡」の風光であった。澄々として澄みきった天空に、鏡のような半月が皎々(こうこう)と輝やいている光景であった。そこには仏もなく文殊もなかった。武蔵が一生求めきわめた兵法もなかった。そこに彼は「万理一空」を悟ったのである。

テキストと参考書

武蔵の自筆の『五輪書』は現存しないが、寛文七年（一六六七）二月、武蔵の高弟、寺尾孫之丞勝延（信正）が山本源介に与えた細川家蔵本がある。本書はこの細川家蔵本を底本とした渡辺一郎校注『五輪書』（日本思想体系『近世芸道論』所収、岩波書店、一九七二年一月）

によった。

なお、『五輪書』の校注には、このほか、

渡辺一郎校注『五輪書』（岩波文庫、一九八五年二月）

があり、さらに現代語訳には、

神子　侃『五輪書』（徳間書店、一九六三年八月）

がある。本書を撰するにあたって、渡辺一郎氏の校注、ならびに神子侃氏の『五輪書』を参考とした。とくに訳文にあたっては、神子氏の名訳に負うところが多い。記して感謝の意を表したいと思う。

そのほか『五輪書』理解のための参考書として容易に入手できるものに、

奈良本辰也『五輪書入門』（徳間書店、一九七二年）

奈良本辰也『武蔵と五輪書』（廣済堂、一九八一年）

桑田忠親『宮本武蔵　五輪書入門』（日本文芸社、一九八五年）

谷沢永一『五輪書の読み方』（ごま書房、一九八三年）

大森曹玄監修・寺山旦中『五輪書――宮本武蔵のわざと道――』（講談社、一九八四年）

などがある。

地之巻

地之巻

兵法の道、二天一流と号し、数年鍛練の事、初而書物に顕はさんと思ひ、時に寛永二十年十月上旬の比、九州肥後の地岩戸山に上り、天を拝し、観音を礼し、仏前にむかひ、生国播磨の武士新免武蔵守藤原の玄信、年つもつて六十。

我、若年のむかしより兵法の道に心をかけ、十三歳にして初而勝負をす。其あひて、新当流有馬喜兵衛といふ兵法者に打勝ち、十六歳にして但馬国秋山といふ強力の兵法者に打勝つ。廿一歳にして都へ上り、天下の兵法者にあひ、数度の勝負をけつすといへども、勝利を得ざるといふ事なし。其後国々所々に至り、諸流の兵法者に行合ひ、六十余度迄勝負すといへども、一度も其利をうしなはず。其程、年十三より廿八、九迄の事也。

我、三十を越えて跡をおもひみるに、兵法至極してかつにはあらず。おのづから道の器用有りて、天理をはなれざる故か。又は他流の兵法、不足なる所にや。其後なほもふかき道理を得んと、朝鍛夕練してみれば、おのづから兵法の道にあふ事、

我五十歳の比也。其より以来は、尋ね入るべき道なくして、光陰を送る。兵法の利にまかせて、諸芸・諸能の道となせば、万事において、我に師匠なし。今此書を作るといへども、仏法・儒道の古語をもからず、軍記・軍法の古きことをももちひず、此一流の見たて、実の心を顕はす事、天道と観世音を鏡として、十月十日の夜寅の一てんに、筆をとつて書初むるもの也。

〔訳文〕

わが兵法の道を二天一流と号し、数年鍛錬してきたことを、初めて書物に書きあらわそうと思い、時に寛永二十年十月上旬の頃、九州肥後の岩戸山に登り、天を拝し、観音を礼拝し、仏前に向った。播磨生まれの武士である新免武蔵守、藤原の玄信は年を重ねること六十歳になった。

自分は若い時から兵法の道に心がけて、十三歳の時に初めて勝負をした。その時、新当流の有馬喜兵衛という兵法者に打ち勝った。十六歳の時に但馬国の秋山という手強い武芸者に打ち勝った。二十一歳の時に京都へ上り、天下に有名な武芸者と数度の勝負を行ったが、勝利を得ないことはなかった。その後、諸国の至る所をまわり、諸流の武芸者と行き会い、六

十余度にわたって勝負をしたが、一度も勝利を失ったことはなかった。それは十三歳から二十八、九歳までのことであった。

自分は三十歳をこえて自分の足跡をふりかえってみると、自分が勝ったのは兵法を極めたからではない。生まれつき武芸の才能に恵まれ、天の理にかなっていたためであろうか。または他流の武芸が不十分であったためであろうか。

その後、一層深く兵法の道理を得ようと朝鍛夕錬してみると、おのずと兵法の道にかなうことができるようになった。自分が五十歳の頃であった。

それより以後は究めつくす道もなくなり月日を送っている。自分は兵法の道で得たものにしたがってもろもろの芸道の道としているのであるから、あらゆることについて自分には師はない。

今、この『五輪書』を書くにあたっても、仏法、儒教、道教の言葉を借りず、軍記や軍法の故事を用いず、自分の二天一流の考え方と、本当の意味を、天道と観世音を鏡として、十月十日の夜、午前四時三十分、筆をとって書き初めたものである。

〔付記〕

神仏を頼まず

「天を拝し、観音を礼し、仏前にむかひ」――当時は天道という考え方が思想界にあり、天、神、仏はある意味では同義語として用いられていた。観音は観世音菩薩であり、武蔵が晩年、仏像を彫刻したことが知られているから、観音像もまた自分で彫ったのであろう。天、観音、仏というのはいわば武蔵にとっての絶対者であるが、これを拝してこの『五輪書』を書くというのは、天や神仏の前にぬかずいて、それに帰依して書くという意味ではない。武蔵の「独行道」の教えの中には、「仏神は貴し、仏神をたのまず」という言葉が見えるように、武蔵の全生涯は仏神に頼ったことはなかった。全力を出しきった自己にのみ頼ったのであって、絶対者にお願いすることも頼ったこともなかった。この三界で頼むのは自己だけであった。しかもその自己は表面の自己、作られた自己、粉飾された自己ではなかった。それは真実人体の自己であった。それなのに『五輪書』の地之巻の冒頭においてあえて天を拝し、観音を礼し、仏前にむかって、この『五輪書』を書こうとしたのは何故か。それは天や観音の前でということは、自らの真実を語るということなのである。天や観音を拝むことは、自らが無心になることである。自らの真実のあかしとして自分の通った兵法の道理をここに書きとめようとしたのである。

朝鍛夕錬(ちょうたんせきれん)

武蔵の『五輪書』には朝鍛夕錬という言葉が随処(ずいしょ)に見えるが、この『五輪書』の序文の中にも「其後なほもふかき道理を得んと、朝鍛夕錬してみれば、おのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比也(ころ)」と見える。武蔵が佐々木小次郎と決闘したのは武蔵二十九歳の時であったと伝えるが、三十歳以後、五十歳に至るまで、武蔵が兵法者と決闘したことはまったく伝えられていない。「其後なほもふかき道理を得んと」というのは恐らく佐々木小次郎との死闘によって自己の不十分なことを悟り、剣の術を越えた剣の道を得ようと志したことを意味する。柳生流の言葉でいえば殺人刀(せつにんとう)から活人刀(かつにんとう)にかえるべく、剣の道を求めたのではないか。

そのため武蔵は諸国を流浪しながら剣の深い道理を得ようとして「朝鍛夕錬」の修行に入ったとみるべきである。他流の武芸者とも立ちあったこともあろうし、人跡を絶した深山幽谷(しんざんゆうこく)の中で剣の心をとぎすましたこともあったろう。

しかもその三十歳から五十歳に至るまでの修行は「朝鍛夕錬」の修行であった。朝鍛夕錬とは毎日、不断に継続する修行のことなのである。

我に師匠なし

この『五輪書』の中には、

　兵法の利にまかせて、諸芸・諸能の道となせば、万事において、我に師匠なし。

という言葉が見える。武蔵が目ざしたのはどこまでも兵法であった。剣の道を究めることだけが武蔵にとって道であった。武蔵は画をよくし、彫刻をほり、書にも通じたが、これは剣の道に達した者が自然と画をかき、書をたしなんだものであって、画をやり書に通ずることを志したのではなかった。剣の道の究極を極めた者が到達できた至境において画を書き、書をたしなんだにすぎない。

　しかし結論的にいえばその通りであったろうが、そこに到達する境地までには、たいへんな苦悩があったにちがいない。あるいは一点の剣の道についての疑難が書や画に向わせたのかも知れない。書道や絵画や彫刻によって心の乱れ、剣の乱れをおさえることができるかも知れないと考えたのであろう。そしてひたむきに書道や絵画をやったところ、これは自らの生命をかけるに価する道とは思わなかったのだ。武蔵は剣の道を極めることによって天の理

を知り、それによって芸術や処世の一切を切ることであると気がついたのが、この五十歳ではなかったか。その境地が、「兵法の利にまかせて、諸芸・諸能の道となせば、万事において、我に師匠なし」という言葉を書かせたのではないか。

とくに重要なのは「万事において、我に師匠なし」という言葉である。孤絶の生涯を他との闘い、他の一切との闘い、自己との闘いを通して生きた武蔵に師匠は必要としなかった。荒野の中から生まれた武道の行者は自らの体験だけから自らの武道の至道を極めつくしたのであった。

人は師匠があると、師匠にあまえる。師匠の権威を自らの権威にする。それは弱い人間の仕方のない生き方であった。師もまた弟子を持とうとする。武蔵のように師もなく自分一人で生きた鉄のごとき意志の人であっても、晩年になると伊織を養子に迎え弟子とし、自己の剣法の相続を願ったのである。しかし武蔵はそのあやまりに気づき、伊織は後に細川家に仕えて家老にまでなったのである。人は年をとると年をとるなりに迷うものである。武蔵ですら一時的には自己の剣法の後継者を強く望んだのであった。それは自我と欲心の延長を求めたにすぎない。

「我に師匠なし」と言いきった武蔵の態度は、けっして傲岸不遜な態度ではない。それは徹

底的に自己のみを信じて生きた男の声なのであった。

実の心とは

武蔵は序文の最後に、

此一流の見たて、実の心を顕す事、天道と観世音を鏡として、十月十日の夜、寅の一てんに、筆をとつて書初むるものなり。

と結んでいるが、天道と観世音を拝すると初めに言ったことと、ここで天道と観世音とを鏡としてと言っていることはまったく同一の内容なのである。神仏を頼まずと言った武蔵が簡単に神仏を拝したり、鏡としたりするはずがない。神仏を拝したり、鏡とするということは、神仏のような境地でこの『五輪書』を書くということなのである。

しからば神仏のような境地とは何か。それは私のないことである。公正無私なことである。鏡のように明徴にして清浄なのである。武蔵はけっして嘘は書かない、自らが体得した境地のみによって、ひたすら剣の道によって切り開かれた道をここに書き記すというだけなのである。このことから考えても、宮本武蔵について信頼できるのは『五輪書』のみであり、武

蔵の没後三十三年後に生まれた豊田正剛が三代にわたって武蔵の弟子の談話を記録し整理し、武蔵の生涯の伝記の体裁をとっている『二天記』なども信用できる史実を正確には伝えていない。『五輪書』の中で武蔵が自ら自分のことを語っているところだけが、武蔵の伝記を理解する場合に第一資料となるものにすぎない。

かくして武蔵はこの自己の全生涯の死闘をかけた修行で獲得した二天一流の考え方を実の心で書きあらわそうとしたのであった。『兵法三十五箇条』を書き、それを細川忠利に献上し、二天一流の奥義を書き残したが、『兵法三十五箇条』は二天一流の剣の奥義をただ箇条書きにしただけのものであった。さらにそれを武蔵の人生や世界に対する考え方にたって敷衍したのが『五輪書』なのである。

夫兵法といふ事、武家の法なり。将たるものは、とりわき此法をおこなひ、卒たるものも、此道を知るべき事也。今世の中に、兵法の道慥にわきまへたるといふ武士なし。先づ、道を顕はして有るは、仏法として人をたすくる道、又儒道として文の道を糺し、医者といひて諸病を治する道、或は歌道者とて和歌の道をしへ、或は数寄者・弓法者、其外諸芸・諸能までも、思ひ〳〵に稽古し、心〳〵にすくもの

也。兵法の道にはすく人まれ也。武士は文武二道といひて、二つの道を嗜む事、是道也。縦ひ此道ぶきようなりとも、武士たるものは、おのれ〳〵が分際程は、兵の法をばつとむべき事なり。大形武士の思ふ心をはかるに、武士は只死ぬといふ道を嗜む事と覚ゆるほどの儀也。死する道においては、武士斗にかぎらず、出家にても、女にても、百性已下に至る迄、義理をしり、恥をおもひ、死する所を思ひきる事は、其差別なきもの也。武士の兵法をおこなふ道は、何事においても人にすぐるゝ所を本とし、或は一身の切合にかち、或は数人の戦に勝ち、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ。是、兵法の徳をもつてなり。又世の中に、兵法の道をならひても、実の時の役にはたつまじきとおもふ心あるべし。其儀においては、何時にても、役にたつやうに稽古し、万事に至り、役にたつやうにをしゆる事、是兵法の実の道也。

〔訳文〕

兵法というものは武家のおきてである。将たるものはとくにこの兵法をおこない、兵卒もまたこの兵法の道を知る必要がある。今の世の中で兵法の道を確実に体験しているという武

士はほとんどない。

まず道があらわれているのは、仏法では人を救う道があり、また儒道には文の道を正すものがあり、医者には諸病をなおす道がある。あるいは歌人は和歌の道を教え、あるいは茶人や弓道者、そのほかのさまざまな芸能者などがあり、それぞれ思い思いに稽古し、心にまかせてたしなんでいる。ところが、兵法の道をたしなむ人は稀にしかいないのである。

まず武士は文武二道といって、文と武の二つの道をたしなむことが大切である。たといこの道に才能がなくとも、武士たるものは自分の能力に応じて兵法を修行することに努めるべきである。だいたい武士の信念を考えてみると、武士は平常からいかに立派に死ぬかというふうに思われている。死を覚悟することにおいては武士ばかりではなく、出家であっても、女であっても、百姓以下に至るまで、義理を知り、恥を思い、死ぬところを決心することは少しもかわりがないのである。

武士が兵法をおこなう道はどんなことにおいても人に勝つということが根本であり、あるいは一人の敵との斬合いに勝ち、あるいは数人との集団の戦に勝ち、主君のため、わが身のため名をあげ、身を立てようと思うことである。これは兵法の功徳なのである。

また世の中にたとい兵法の道を習っても、実戦には役にたたないという考えもあるであろ

う。その点については何時でも実際に役にたつように稽古を重ね、あらゆることについても役にたつように教えること、これこそが兵法の真の道である。

〔付記〕

人に勝つ

死を覚悟（かくご）することは武士だけではない。僧も百姓も女性ですら死を覚悟することはできる。武士たるものが他の一般の人々と異なるのは、一体何であるのか。

武士の兵法をおこなふ道は、何事においても人にすぐるゝ所を本とし、云云

と武蔵が言うように、武士が武芸をたしなむのはどんなこと、どんな場合においても人に勝つことを根本とするからである。武士の兵法においては敗けることは許されない。敗けることはそのまま死に直結する。死と生が紙一皮において対しているのが武士の闘いである。だからこそどんな場合においても絶対に勝たなければならない。理由の如何を問わず勝たなければならないのである。

武蔵はそれを具体的に、

或は一身の切合に勝ち、或は数人の戦に勝ち、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ。是、兵法の徳をもつてなり。

と言う。兵法者が勝つことにはさまざまな場合がある。一人対一人の斬合いの場合もある。あるいは数人との戦闘の場合もある。一人が数人に勝ることは武蔵が自らの死闘を通じて得た教訓なのであった。それは個が衆に勝つということなのである。個の力は無限に延ばすことができる。個の力を錬磨することによって個は個ではなくなる。個は無限の力を備えた個となってゆく。このような個は天地一杯に充満する個となる。哲学者が個即全とか、一即多などというのは頭で考えたざれごとにすぎない。個は身心の錬磨によって宇宙に遍満する個となる。それは宇宙の気と個の気が一つになるからである。この点をとらえて『五輪書』は「数人の戦に勝ち」というのである。

主君のため、我が身のために名声をあげ、身を立てるのが兵法の功徳であるというのは、武蔵が世間一般の武芸者に対して言うのである。この『五輪書』はわが兵法を世に伝える目的で書かれているために、世間一般の武芸者に共感を得る必要もあろう。武蔵自身もこのほとんどの人生が兵法によって名をあげ、禄を得ること、すなわち仕官して立身出世すること

に己れの全存在をかけたのである。この自分の情念をかくすことなく、ここに淡々と記したまでのことなのである。しかし晩年になると名声をあげ立身するという願いはまったくなかった。名声をあげる必要なしと悟った武蔵はおそらく武芸者からの真剣勝負を避けたこともあったにちがいない。勝負を避ける時、世間の人々は武蔵は臆病風に吹かれているというであろう。しかし武蔵の晩年は世評をまったく無視した。無視したということもなかった。どんなに悪口を言われてもまったく自らの心を動かすことはなかった。万理一空の自由無礙なる境地に達した武蔵にとっては悪口とか評判とかの世界をまったく超脱していた。しかし世間一般の通念からここでは名をあげ身を立てることができるのも兵法の功徳である、と言ったにすぎなかった。

　人に勝つことは己れに勝つことである。それに勝つことは己れの欲心を無にすることである。真に勝つことを極めるのは人生の至極の道理に挑戦することなのである。これに挑戦することを志した者は、まず一日の初めに端坐正念し、今日一日を勝ち抜くための精神の構えをしっかりと確立する必要がある。見えざる敵に対してはっしと打つ気魄をまず朝の精神の構えとする必要がある。

すべてに役立つとは

兵法は実戦に役に立たなければならない。武蔵は徹底的に合理性、実理性に徹した。そのため、

> 又世の中に、兵法の道をならひても、実の時の役にはたつまじきとおもふ心あるべし。其儀においては、何時にても、役にたつやうに稽古し、万事に至り、役にたつやうにをしゆる事、是兵法の実の道也。

と説く。兵法はどこまでも実戦第一でなければならない。いざという勝負の時にまったく役に立たないような兵法はそれ自体無意味なものなのである。そのため稽古もまた実際に役に立つように真剣に稽古を行わなければならない。「何時にても、役にたつやうに稽古し、万事に至り、役にたつやうにをしゆる事、是兵法の実の道也」と説かれる所以である。

まず何時でも役に立つように稽古することが大切である。稽古は実戦に即して練磨されなければならない。「何時にても」ということはどんな時でもということである。たとえば刀を帯びていない時、寝ている時、食事をしている時、どんな時にも一瞬の間に相手と戦える稽

古をつむということは容易なことではない。普通は刀がなければ相手に斬られてしまう。しかしどんな時にも、無刀であっても相手と闘えることが必要なのである。

柳生流で説く無刀の教えもそれを意味する。いざという時、自分のそばにある扇子であろうと何であろうと、それが直ちに武器に変じなければならない。それが何時でも役に立つように稽古することなのである。

また兵法を教える方も役にたつように教える必要がある。役にたたないような兵法を教える理由はない。どこまでも役にたつように教えなければならない。しかし兵法が実際に役立つように教えるとなると、教える方も真剣にならざるを得ない。いい加減な教え方では実際に役立つことはできないからである。学ぶ者も教える者も実際に役だつように稽古することがもっとも大切であることを武蔵は説く。

一　兵法の道といふ事

漢土・和朝までも、此道をおこなふ者を、兵法の達者といひ伝へたり。武士として此法を学ばずといふ事あるべからず。近代、兵法者といひて世を渡るもの、是は剣術一通の事也。常陸国鹿島・香取の社人共、明神の伝へとして流々をたて丶、国々

を廻り、人につたゆる事、ちかき比の義也。古しへより、十能・七芸と有るうちに、利方といひて、芸にわたるといへども、利方と云出すより、剣術一通にかぎるべからず。剣術一ぺんの利までにては、剣術もしりがたし。勿論、兵の法には叶ふべからず。

世の中をみるに、諸芸をうり物にしたて、我身をうり物のやうに、諸道具につけても、うり物にこしらゆる心、花実の二つにして、花よりもみのすくなき所なり。とりわき此兵法の道に、色をかざり、花をさかせて、術とてらひ、或は一道場、或は二道場などいひて、此道をしへ、此道を習ひて、利を得んとおもふ事、誰かいふ、「なま兵法大疵のもと」、まことなるべし。

凡そ人の世を渡る事、士農工商とて四つの道也。一つには農の道。農人は色々の農具をまうけ、四季転変の心得いとまなくして、春秋を送る事、是農の道也。二つにはあきなひの道。酒を作るものは、それ〳〵の道具をもとめ、其善悪の利を得て、とせいをおくる。いづれもあきなひの道、其身〳〵のかせぎ、其利をもつて世をわたる也。是商の道。三つには士の道。武士においては、道さま〳〵の兵具をこしらへ、兵具しな〳〵の徳をわきまへたらんこそ、武士の道なるべけれ。兵具をもたし

なまず、其具々々の利を覚えざる事、武家は少々たしなみのあさき物か。四つには工の道。大工の道においては、種々様々の道具をたくみこしらへ、其具々を能くつかひ覚え、すみがねをもつてそのさしづをたゞし、いとまもなくそのわざをして世を渡る。是士農工商、四つの道也。兵法を大工の道にたとへていひあらはす也。大工にたとゆる事、家といふ事につけての儀也。公家・武家・四家、其家のやぶれ、家のつゞくといふ事、其流・其風・其家などといへば、家といふより、大工の道にたとへたり。大工は大きにたくむと書くなれば、兵法の道、大きなるたくみによつて、大工にいひなぞらへて書顕はす也。兵の法をまなばんとおもはゞ、此書を思案して、師は針、弟子は糸となつて、たえず稽古有るべき事也。

〔訳文〕

中国でも、わが国でも、この道をおこなう者を、兵法の達人といい伝えてきた。武士としてこの兵法を学ばないということがあってはならない。

近ごろ、兵法者といって世間を渡るものがあるが、かれらは一通り剣術ができるだけのことである。常陸国、鹿島・香取神社の神主たちが、明神から伝えられたものとして流派をた

て、諸国をまわり、人々に伝えたのは、近頃のことである。昔から、十能とか、七芸とかあるもののうちに、兵法は「利方」(利益をもたらす方法)といわれ、たしかに武芸にあたるが、「利方」というには、剣術だけにかぎるべきではない。剣術だけに役立つのでは、剣術そのものも知ることもできない。もちろん戦争のおきてにかなうはずがない。

世間をみると、諸芸を売り物にしたてて、自分自身を売り物のように考え、いろいろな道具にしても、売りものにしたてあげる気持がある。それは花と実の二つのうちで、実がなくて、内容がないのである。とくに、この兵法の道において、表面をかざりたて、花を咲かせて、術を見せびらかし、あるいは何々道場などといって、教えたり習ったりして、利を得ようとしているのは、俗にいう「生兵法は大けがのもと」ということで、本当のことなのである。

およそ、人が世渡りするのに、士・農・工・商という四つの道がある。

第一には農の道である。農民はいろいろな農具をそなえ、四季の移り変りに気をとられて歳月をおくっている。これが農の道である。

第二には商売の道である。酒屋は、それぞれの手段を求め、その善悪の利益を得て世をわたる。どんな商売の道でも、その身に応じたかせぎ、その利益をもって世を渡るのである。

これが商の道である。
第三には、武士にあっては、手段に適したさまざまの武器をこしらえ、その武器の用法をわきまえることそが武士の道でなければならぬ。武器を用意もできず、それぞれの武器の特性も理解できないでは、武士としていささかたしなみがないではないか。
第四には、工の道である。大工の道にあっては、種々さまざまの道具を上手にこしらえ、それぞれの道具に習熟し、ものさしで図面どおりに正しくくし、ひまもなく仕事をして世を渡るのである。
これが、士・農・工・商の四つの道である。
兵法を大工の道にたとえてみよう。大工にたとえるのは、家ということに関連させたわけである。公家、武家、四家（藤原氏の四家、南家・北家・式家・京家のこと）などの家が滅びるとか、家が存続するとか、何流、何風、何家などというその家で大工の道にたとえたのである。大工は「大きに工む」と書くのであり、兵法の道は「大きなるたくみ」であるから、大工になぞらえて書きあらわすのである。戦いのおきてを学ぼうと思えば、この書をよく考え、師は針、弟子は糸となって、たえず稽古をしなければならない。

一　兵法の道、大工にたとへたる事

大将は大工の統領として、天下のかねをわきまへ、其国のかねを糺し、其家のかねを知る事、統領の道也。大工の統領は堂塔伽藍のすみがねを覚え、宮殿楼閣のさしづを知り、人々をつかひ、家〳〵を取立つる事、大工の統領も武家の統領も同じ事也。家を立つるに木くばりをする事、直にして節もなく、見つきのよきをおもての柱とし、少しふしありとも、直につよきをうらの柱とし、たとひ少しよわくとも、ふしなき木のみざまよきをば、敷居・鴨居・戸障子と、それ〴〵につかひ、ふしありとも、ゆがみたりとも、つよき木をば、其家のつよみ〳〵を見わけて、よく吟味してつかふにおいては、其家久敷くづれがたし。又材木のうちにしても、ふしおほく、ゆがみてよわきをば、あししろともなし、後には薪ともなすべき也。統領において大工をつかふ事、其上中下を知り、或はとこまはり、或は戸障子、或は敷居・鴨居・天井已下、それ〴〵につかひて、あしきにはねだをはらせ、猶悪しきにはくさびをけづらせ、人をみわけてつかへば、其はか行きて、手際よきもの也。果敢の行き、手ぎはよきといふ所、物毎をゆるさゞる事、たいゆう知る事、気の上中下を知る事、いさみを付くるといふ事、むたいを知るといふ事、かやうの事ども、統領

の心持に有る事也。兵法の利かくのごとし。

〔訳文〕

大将は大工の統領として、天下の尺度をわきまえ、国家の尺度を正し、わが家の尺度を知るのが、統領の道である。大工の統領は堂塔伽藍の尺度をおぼえ、宮殿楼閣の図面を知り、人々を使って家をたてる。それは大工の統領も武家の統領もおなじことである。

家をたてるには、「木くばり」をする。まっすぐで節もなく、見かけもよい材木は、表の柱とし、少しは節があっても、まっすぐで強いのは裏の柱とし、多少は弱くても、節がなく美しいのを敷居、鴨居、戸、障子などにそれぞれ使い、節があってもゆがんでいても強い木は、その家の各強度を見分け、よく吟味して使用するならば、その家は長持ちするであろう。また、材木の中でも、節が多く、ゆがんで、弱いのは、足場にでも使い、あとで薪にでも使うのがよいのである。

統領が大工を使うにあたっては、腕前の上中下を知り、あるいは床廻り、あるいは戸障子、あるいは敷居、鴨居、天井というように、それぞれに応じて使う。腕の悪い者には根太を張らせ、もっと悪い者には、くさびを削らせるなど、よく人を見分けて使えば、仕事の能率が

あがって手際よくいくものである。

仕事の能率がよく、手際がよいということ、何事も気をゆるめないこと、大切なところを知ること、気力の上中下を見きわめること、勢いをつけるということ、無理を心得るということ。このようなことが、統領の心がけるべきことである。

兵法の道理もまた、このようなものである。

一　兵法の道

士卒たるものは大工にして、手づから其道具をとぎ、色々のせめ道具をこしらへ、大工の箱に入れて持ち、統領云付くる所をうけ、柱がやうりやうをもてうのにてけづり、とこ・たなをもかんなにてけづり、すかし物・ほり物をもして、よくかねを糺し、すみ〴〵めんどう迄も手ぎは能くしたつる所、大工の法也。大工のわざ、手にかけて能くしおぼえ、すみがねをよくしれば、後は統領となる物也。大工のたしなみ、よくきるゝ道具を持ち、透々にとぐ事肝要也。其道具をとつて、みづし・書棚・机卓、又はあんどん・まないた・鍋のふた迄も達者にする所、大工の専也。士卒たるもの、このごとく也。能々吟味有るべし。大工のたしなみ、ひづまざる事、

とめをあはする事、かんなにて能くけづる事、すりみがかざる事、後にひすかざる事、肝要なり。此道をまなばんとおもはゞ、書顕はす所のことぐに心を入れて、よく吟味有るべきもの也。

〔訳文〕

士卒たるものは、大工である。みずから道具をとぎ、いろいろな金具のたがをこしらえ、大工箱に入れて持ち、統領のいいつけをきいて、柱、梁を手斧で削り、床、棚をかんなで削り、透かしもの、彫りものなどをし、寸法を正しくし、手のかかるすみずみまで、りっぱに仕上げるのが大工のやり方である。自からの手にかけてその仕事をおぼえ、尺度をよくわきまえれば、やがては統領になることができる。

大工の心得は、よく切れる道具を持ち、ひまをみてこれをとぐことが肝要である。その道具を使って、厨子、書棚、卓や行燈、まないた、鍋のふたまでもうまく作りあげるのは、大工だからこそである。士卒たるものも、こうであるようによく吟味しなければならぬ。

大工の心得は、仕事がゆがまないこと、留を合わせること、かんなでよく削ること、すり磨かないこと、あとでゆがまないこと、これが肝要である。兵法の道を学ぼうと思うならば、

書き記したことの一つ一つに念をいれ、よく吟味しなければならぬ。

一　此兵法の書、五巻に仕立つる事

五つの道をわかち、一まき〳〵にして其利をしらしめんが為に、地水火風空として五巻に書顕はすなり。地の巻においては、兵法の道の大躰、我一流の見立、剣術一通にしては、まことの道を得がたし。大きなる所よりちひさき所を知り、浅きより深きに至る。直なる道の地形を引きならすによつて、初を地の巻と名付くる也。第二、水の巻。水を本として、心を水になる也。水は方円のうつはものに随ひ、一てきとなり、さうかいとなる。水に碧潭の色あり、きよき所をもちひて、一流のことを此巻に書顕はす也。剣術一通の理、さだかに見わけ、一人の敵に自由に勝つ時は、世界の人に皆勝つ所也。人に勝つといふ心は千万の敵にも同意なり。将たるものの兵法、ちひさきを大きになす事、尺のかたをもつて大仏をたつるに同じ。か様の義、こまやかには書分けがたし。一をもつて万と知る事、兵法の利也。一流の事、此水の巻に書きしるす也。第三、火の巻。此まきに戦ひの事を書記す也。火は大小となり、けやけき心なるによつて、合戦の事を書く也。合戦の道、一人と一人との

戦ひも、万と万とのたゝかひも同じ道なり。心を大きなる事になし、心をちひさくなして、よく吟味して見るべし。大きなる所は見えやすし、ちひさき所は見えがたし。其子細、大人数の事は即座にもとをりがたし。一人の事は心一つにてかはる事はやきによつて、ちひさき所しる事得がたし。能く吟味有るべし。此火の巻の事、はやき間の事なるによつて、日々に手馴れ、常のごとくおもひ、心のかはらぬ所、兵法の肝要也。然るによつて、戦勝負の所を火の巻に書顕はす也。

第四、風の巻。此巻を風の巻としるす事、我一流の事にはあらず、世中の兵法、其流々の事を書きのする所也。風といふにおいては、むかしの風、今の風、その家々の風などとあれば、世間の兵法、其流々のしわざを、さだかに書顕はす、是風也。他の事をよく知らずしては、自らのわきまへ成りがたし。道々事々をおこなふに、外道といふ心あり。日々に其道を勤むるといふとも、心のそむけば、其身はよき道とおもふとも、直なる所より見れば、実の道にはあらず。実の道を極めざれば、少し心のゆがみに付けて、後には大きにゆがむもの也。吟味すべし。他の兵法、剣術ばかりと世に思ふ事、尤也。我兵法の利わざにおいても、各別の義也。世間の兵法をしらしめんために、風の巻として、他流の事を書顕はす也。第五、空の巻。此巻

空と書顕はす事、空と云出すよりしては、何をか奥といひ、何をか口といはん。道理を得ては道理をはなれ、兵法の道に、おのれと自由ありて、おのれと奇特を得、時にあひてはひやうしを知り、おのづから打ち、おのづからあたる、是みな空の道也。おのれと実の道に入る事を、空の巻にして書きとゞむるもの也。

〔訳文〕

兵法を五つの道に分け、巻ごとにその効用を知らせるため、地・水・火・風・空の五巻として書きあらわすものである。

まず地の巻においては、兵法の道のあらまし、わが流派の見方を説いている。剣術だけをやっていては、本当の剣の道を得ることができない。大きいところから小さいところを知り、浅いところから深いところに至る。まっすぐな道を地面に描くことになぞらえて、最初の巻を地の巻と名づけるのである。

第二は水の巻である。水を手本とし、心を水のようにするのである。水というものは、四角な容器にも円い容器にも従って形を変えたり、一滴となったり、大海ともなる。水には青々とすんだ色がある。その清らかさを用いて、わが一流のことをこの巻に書きあらわすもので

ある。

剣術の道理をはっきりと見分ければ、一人の敵に自由に勝つときは、世の人すべてに勝つこともできる。人に勝つということでは、一人の敵であろうと千万人の敵であろうと同じことである。

将たるものの兵法では、小さいことを大きくすることは、一尺の型によって大仏を建立するのと同じである。このようなことは、こまかく表現できるものではない。一をもって万を知ることが兵法の道理なのである。わが一流のことを、この水の巻に記すのである。

第三は火の巻である。この巻では、戦いのことを書く。火は大きくなったり小さくなったり、きわだった勢いをもっているので、それになぞらえて戦いのことを書くのである。戦いの道は、個人と個人との戦いも、集団の戦いも同じである。心を大きくしたり、細心にしたりしてよく研究してみなければならない。

ただし、大きなところは見えやすく、小さいところは見えにくい。というのは、大人数でやることはただちに戦術を転換できない。個人のことはその人の心一つですぐ変わるから小さいところが分かりにくい。こうしたことも、よく研究することである。

この火の巻のことは、瞬間的にきまることであるから、日日に習熟して、平常心で当れる

ように心がかわらないことが、兵法の急所である。こうしたことから、戦闘、勝負のことを火の巻として書きあらわすのである。

第四は風の巻である。この巻では、わが一流のことでなく、世上の兵法について各流派のことを記すのである。風というのは、むかし風とか、いま風とか、それぞれの家風などがあるから、世間の兵法について各流派の内容をはっきりと書き記すのである。これが風である。

他をよく知らなければ、自己をはっきり知ることはできない。何ごとを行うにも、外道というものがある。毎日、その道に励んでも、その本心が道に外れているならば、自分ではよい道だと思っても、ほんとうは、真実の道ではない。真実の道をきわめないと、はじめ、すこし心のゆがんだことが、後には大きなゆがみとなるのである。念入りに調べるべきことである。

他の流派では、兵法といえば剣術のことだけと思っているが、もっともだが、それは誤りである。わが兵法の理と業においても特別の意義があると考える。世間の兵法というものを知らせるために、風の巻として、他流のことを記すものである。

第五は空の巻である。この巻を空ということは、空というから奥もなく入口もない。道理を体得しては、それにこだわることなく、兵法の道は、本来、自由であって、自然と人並み

すぐれた力量がそなわり、時期到来してその拍子を知り、自然に敵を打ち、自然に相対する。これが空の道なのである。自然に真実の道に入ることを、空の巻として書きとめるものである。

〔付記〕

空の道とは

このなかで空の巻について述べているところは重要である。空というから奥も入口も初めも終りもないという。空といっても仏教の『般若心経』などで説く空とは異なり、どこまでも自在であり、執着がないことをいうのである。「道理を得ては、道理をはなれ」というのは道理にとらわれないことをいう。形にはまって形にとらわれないことである。沢庵の『不動智神妙録』に、

心を一所に置けば、偏に落ると云ふなり、偏とは一方に片付きたる事を云ふなり。正とは何処へも行き渡つたる事なり。

とあるが、心を一所に置くことは自由でなくなる。武蔵が「兵法の道に、おのれと自由あり

て」というのはまさしくこのことなのである。沢庵も、

　唯一所に止めぬ工夫、是れ皆修業なり。

と云うように一所に心を止めぬことが自由ということなのである。

　心が一ヵ所に止まらないとき、人は無限の力量を発揮できる。そのことを武蔵は「おのれと奇特を得、時にあひてはひやうしを知り、おのづから打ち、おのづからあたる、是みな空の道也」と言っているのである。

　自由自在の境地になりきったとき、すばらしい超人的な力や技を発揮することができるようになる。またどんな時にも、転瞬の間にも拍子をとることができる。拍子というのは沢庵の言葉でいえば石火の機であり、「間、髪を容れず」ということになる。

　間とは物が二つ重なり合った間に、髪一筋の入る隙もないということである。たとえば両手をハタと打ち合わせた瞬間に、ハッシと音が出る。打つ手と出る音の間には、髪一筋も入る隙がないのである。兵法でいえば、相手が打ってくる太刀にとらわれるならば、隙ができる。その隙にこちらの間が抜ける。相手の打ってくる太刀と、こちらの働きとの間に、髪一筋も入らぬようにするならば、相手の太刀は我が太刀となって斬りこむことができる。禅で

も物に心がとらわれることを強く戒めるが、兵法においてもそれは同様でなければならぬ。石火の機もまた同じことである。石をハタと打つと、瞬間、火が出るが、打った刹那に出る火だから、間もすきまもないことになる。たんに早いというのではない。心を物に止めないことが肝要なのである。

一　此一流、二刀と名付くる事

二刀と云出す所、武士は将卒ともにぢきに二刀を腰に付くる役也。昔は太刀・刀といひ、今は刀・脇指といふ。武士たるものの此両腰を持つ事、こまかに書顕はすに及ばず。我朝において、しるもしらぬも腰におぶ事、武士の道也。此二つの利をしらしめんために、二刀一流といふなり。鑓・長刀よりしては、外の物といひて、武道具のうち也。一流の道、初心のものにおいて、太刀・刀両手に持ちて道を仕習ふ事、実の所也。一命を捨つる時は、道具を残さず役にたてたきもの也。道具を役にたてず、こしに納めて死する事、本意に有るべからず。然れども、両手に物を持つ事、左右共に自由には叶ひがたし。太刀を片手にてとりならはせんため也。鑓・長刀、大道具は是非に及ばず、刀・わき指においては、いづれも片手にて持つ道具

也。太刀を両手にて持ちて悪しき事、馬上にてあしゝ、かけ走る時あしゝ。沼・ふけ・石原、さかしき道、人ごみにあしゝ。左に弓・鑓を持ち、其外いづれの道具を持ちても、みな片手にて太刀をつかふものなれば、両手にて太刀をかまゆる事、実の道にあらず。若し片手にて打ちころしがたき時は、両手にても打ちとむべし。手間の入る事にてもあるべからず。先づ片手にて太刀をふりならはせん為に、二刀として、太刀を片手にて振覚ゆる道也。人毎に初而とる時は、太刀おもくて振廻しがたき物なれども、万初めてとり付くる時は、弓もひきがたし、長刀も振りがたし。いづれも其道具〳〵になれては、弓も力つよくなり、太刀もふりつけぬれば、道の力を得て振よくなる也。太刀の道といふ事、はやくふるにあらず、第二水の巻にてしるべし。太刀はひろき所にてふり、脇差はせばき所にてふる事、先づ道の本意也。此一流において、長きにても勝ち、短きにても勝つ。故によつて太刀の寸をさだめず、何にても勝つ事を得る心、一流の道也。太刀一つ持ちたるよりも、二つ持ちてよき所、大勢を一人してたゝかふ時、又とり籠りものなどの時によき事有り。かやうの儀、今委敷書顕はすに及ばず、一をもつて万を知るべし。兵法の道おこなひ得ては、一つも見えずといふ事なし。能々吟味あるべき也。

〔訳文〕

二刀流と称するのは、武士は将も卒も二刀を直接腰に帯びるのが役目だからである。昔は太刀・刀といい、今は刀・脇指という。武士たるものが、このように両刀を持つのは、詳かに言う必要はない。わが国において、知る知らずにかかわりなく、二刀を腰につけるのは、武士の道である。この二刀の長所を知らせるために二刀一流というのである。

槍・長刀以下、弓・馬・棒などの諸芸も闘いの道具のうちであるが、刀は身に帯びているものである。

この二刀一流の道は、初心の者でも太刀・刀を両手に持って修練するのがほんとうである。一命を捨てるときには、武器を残さず役に立てたいものである。武器を役に立てず腰におさめたままで死ぬのは、決して望むところではない。しかし、両手に物を持つとき、左右共に自由に使うことはむずかしい。太刀を片手でも使いこなせるようにするためである。

槍、長刀、大きな武器は仕方がないが、刀や脇差は、いずれも片手で持てる武器である。馬上でも、走るときでも、沼、泥の深い田、石原、険しい坂道、人ごみ等でも、太刀を両手で持つのは具合いの悪いものである。また、左手に弓、槍、その他の道具を持ったときも、

太刀は片手で使わなければならないので、両手で一本の太刀をかまえるのは、ほんとうのやり方ではないのである。もし、片手で打ち殺しにくいときは、両手で仕止めればよい。片手で刀を持つことに手間ひまはいらぬ。まず片手で太刀を使いこなすために、二刀として、太刀を片手でふることが大切である。

だれでも、はじめて片手で太刀を持つと、重くて振りまわしにくいものであるが、何事でも、はじめて手にしたときは、弓も引きにくいし、長刀（なぎなた）も振りにくい。どんな武器でも、慣れてくることによって、弓を引く力も強くなり、太刀も振ることに慣れれば、道力を得て、振りやすくなる。

太刀の道というのは、速く振ることではない。そのことは、第二・水之巻に記すであろう。太刀は広い場所で振り、脇差は狭い場所で振ることが、道の根本である。

この二刀一流においては、長いものでも勝ち、短いものでも勝つ。そのため、太刀の寸法を決めず、どんな武器でも勝ち得るという精神、これが二刀一流の道である。

太刀を一つだけ持つより二つ持ったほうがよいのは、大勢を相手に一人で戦うとき、また屋内などの狭い場所に立て籠ったときなど、とくに利点がある。

こうしたことは、ここにこまごまと書き示すこともない。一事をもって万事を知らねばな

らぬ。兵法の道を体得すれば、どんなことでも見えぬものはない。よくよく調べるべきである。

〔付記〕

武蔵の兵法はどこまでも勝つことを目的としているため、どこまでも合理性、利に強いことを特徴とする。一刀よりも二刀の方が有利であるから二刀流をあみだしたのである。片手で自由に太刀を振ることができるために二刀を用いるのである。それは左手も右手も同様に機能を果すための訓錬でもある。

武道の修錬をつむと右手と左手とが両方とも自由にあつかえるようになるものである。私も合気道を週四回、道場にかよって錬磨（れんま）しているが、左右ともに同じように機能することを目ざす合気道をやってから、だんだん左手も自由に書けるようになった。原稿用紙に書く場合には右手で書くが、授業や講演のときには自由に左手で書けるようになった。

両手、両足すべての機能を完全に発揮することが重要なのである。二刀を扱うこともそれをねらったものといえよう。

一　兵法二つの字の利を知る事

此道において、太刀を振得たるものを、兵法者と世に云伝へたり。武芸の道に至りて、弓を能く射れば射手といひ、鉄炮を得たるものは鉄炮うちといひ、鑓をつかひ得ては鑓つかひといひ、長刀をおぼえては長刀つかひといふ。然るにおいては、太刀の道を覚えたるものを太刀つかひ、脇差つかひといはん事也。弓・鉄炮・鑓・長刀、皆是武家の道具なれば、いづれも兵法の道也。然れども、太刀よりして兵法といふ事、道理也。太刀の徳よりして世を納め、身を納むる事なれば、太刀は兵法のおこる所也。太刀の徳を得ては、一人して十人に勝つ事也。一人にして十人に勝つなれば、百人して千人にかち、千人にして万人に勝つ。然るによつて、わが一流の兵法に、一人も万人もおなじ事にして、武士の法を残らず兵法といふ所也。道において、儒者・仏者・数寄者・しつけ者・乱舞者、此等の事は武士の道にはなし。其道にあらざるといふとも、道を広くしれば、物毎に出であふ事也。いづれも人間において、我道〳〵をよくみがく事肝要也。

〔訳文〕

この道においては、世間では、太刀を使いこなせる者を兵法者といっている。武芸の道にあって、弓をよく射れば射手といい、鉄砲をきわめた者を鉄砲うち、槍を使う者を槍使い、長刀に長じた者を長刀使いという。そうならば、太刀の道を覚えた者を太刀使いとか脇差使いとかいうはずである。弓、鉄砲、槍、長刀など、みな武家の道具なのであるから、いずれも兵法の道である。それなのに、太刀にかぎって兵法というには、理由がある。太刀の威徳によって世の中を治め、わが身を治めるのであるから、太刀は兵法の根本である。太刀の威徳を身につければ、一人で十人に勝つことができる。一人で十人に勝てば、百人で千人に勝ち、千人で万人に勝つ。そういうわけで、わが流派では、一人も万人も同じことと考え、武士の心得べき法をすべて兵法というのである。

道についていえば、儒者、仏者、風流人、礼法家、能役者、これらのことは武士の道にはない。その道ではなくても、道を広く知れば、どんなことにも通じないことはないのである。どれも人間として、それぞれの道をよくみがくことが重要なことである。

〔付記〕

先に『五輪書』の中の言葉に、

合戦の道、一人と一人との戦ひも、万と万とのたゝかひも同じ道なり。

とあったが、この段においても、一人で十人に勝つ道を説いている。このことは武蔵を理解する上にきわめて重要である。これについて沢庵の『不動智神妙録』ではつぎのようにいう。

譬(たと)へば十人して一太刀づゝ我へ太刀を入るゝも、一太刀を受流(うけなが)して、跡(あと)に心を止めず、跡を捨て跡を拾ひ候はゞ、十人ながらへ働を欠かさぬにて候。十人十度心は働けども、一人にも心を止めずば、次第(しだい)に取合ひて働は欠け申間敷候。若(も)し又一人の前に心が止り候はゞ、一人の打太刀をば受流すべけれども、二人めの時は、手前の働抜け可レ申候。

この意味は、たとえば、十人が一太刀ずつ斬り込んできても、その一太刀一太刀を受け流して、跡に心を止めず、次々と跡を捨て跡を拾うならば、十人すべてに働きを欠かぬことになる。十人に十度心が働いても、どの一人にも心を止めなければ、次々に応じても、働きは欠けない。もし、一人の前に心が止まるならば、その一人の太刀は受け流すことはできても、二人目の時は、こちらの働きが抜けるのである、ということである。このなかで沢庵が「跡を捨て跡を拾ひ」と言っていることは重要である。

合気道などにおいても二人かけ、三人かけの稽古を行う場合があるが、一人とやっているのとまったく同じようにし、けっして多人数を意識してはならないのである。何人いても現在、瞬間に相い対しているのは一人であり、このときのはたらきの跡を捨てて、つぎの人と闘うことになる。それが跡を拾いということになる。要するに十人と闘っても、瞬間、瞬間は一人であり、一人と闘う術そのままに徹してこそほんとうの持てる力を十二分に発揮することができるのである。

一　兵法に武具の利を知るといふ事

武道具の利をわきまゆるに、いづれの道具にても、をりにふれ、時にしたがひ、出合ふもの也。脇差は座のせばき所、敵の身ぎはへよりて其利おほし、太刀はいづれの所にても大形出合ひて利あり。長刀は戦場にては鑓におとる心あり。鑓は先手なり、長刀は後手也。同じ位のまなびにしては、鑓は少しつよし。鑓・長刀も、事により、つまりたる所にては其利すくなし。取籠り者などにもしかるべからず。只戦場の道具なるべし。合戦の場にしては肝要の道具也。され共、座敷にての利をおぼえ、こまやかに思ひ、実の道を忘るゝにおいては、出合ひがたかるべし。弓は合

戦の場にて、かけひきにも出合ひ、鑓わき、其外物きは〲にて、はやく取合はするものなれば、野相の合戦などにとりわきよき物也。城せめなど、又敵相二十間をこえては不足なる物也。当世においては、弓は申すに及ばず、諸芸花多くして実すくなし。さやうの芸能は、肝要の時、役に立ちがたし。其利多し。城郭の内にしては鉄炮にしく事なし。野相などにても、合戦のはじまらぬうちには、其利多し。戦はじまりては不足なるべし。弓の一つの徳は、放つ矢、人の目に見えてよし。鉄炮の玉は目に見えざる所、不足也。此義能々吟味有るべき事。馬の事、つよくこたへてくせなき事肝要也。惣而武道具につけ、馬も大形にありき、刀・脇差も大形にきれ、鑓・長刀も大かたにとほり、弓・鉄炮もつよく、そこねざるやうに有るべし。道具以下にも、かたわけてすく事あるべからず。あまりたる事はたらぬと同じ事也。人まねをせず共、我身に随ひ、武道具は手にあふやうにあるべし。将卒共に物にすき、物をきらふ事悪しし。工夫肝要也。

〔訳文〕

武器の効用を考えてみるに、どんな武器でも、その時に応じて利用すべきものである。

脇差は、せまい場所、敵の身に近づいたときに有利である。太刀は、どんな場合でもたいがい使える利がある。長刀は、戦場においては槍よりも劣るようである。槍は先手をとれるが、長刀は後手にまわる。同じ程度の修練だと、槍のほうがすこしばかり強い。槍も長刀も事がらによるのであって、狭い場所では利点が少ない。敵をとりかこむときなども適当ではない。ただ戦場の道具であろう。合戦の場合には必要な道具である。

けれども、屋内での稽古をおぼえ、小さなことに気をとられ、真の道を忘れるようでは、役に立ちがたいであろう。弓は合戦の場で、軍勢の進退にも役立ち、鑓隊、そのほか諸隊との連繫動作において、その時々に手早く射ることができるので、とくに野戦にはむいている。しかし、攻城や、敵とのまあいが二十間以上ある場合は不充分なものである。

昨今は、弓はもちろん、諸武芸とも華美にわたって内容が少ない。そのような武芸・技能は実戦のとき、役に立たず、その利点は少ない。

城郭（じょうかく）の中からは、鉄砲にまさる武器はない。野戦などでも、まだ合戦が始まらぬうちは、利点が多い。合戦になると不適当であろう。

弓の一つの長所は、放った矢が目に見えることである。鉄砲の弾は見えないのが欠点である。このことは、充分に検討を要する。

馬は力が強く耐久力があり、くせのないことが大切である。どんな武器もそうだが、馬も形が大きいものがよい。刀、脇差、槍、長刀も形が大きく切れるものがよく、弓、鉄砲も丈夫でこわれないのがよろしい。

武器をはじめとして区別して愛してはならぬ。必要以上に持ちすぎるのは、不足するのと同じことである。人のまねをせずに、その身に応じ、武器は自分の使いやすいものでなければならぬ。将でも卒でも、特定のものを好いたり嫌ったりするのはよくない。このへんのことを心掛ける必要がある。

一　兵法の拍子の事

物毎に付け、拍子は有る物なれども、とりわき兵法の拍子、鍛練なくては及びがたき所也。世の中の拍子あらはれてある事、乱舞の道、れい人管絃の拍子など、是皆よくあふ所のろくなる拍子也。武芸の道にわたつて、弓を射、鉄炮を放ち、馬にのる事迄も、拍子・調子はあり。諸芸・諸能に至りても、拍子をそむく事は有るべからず。又空なる事においても拍子はあり。武士の身の上にして奉公に、身をしあぐる拍子、筈のあふ拍子、筈のちがふ拍子あり。或は商の道、分限になる拍子、分

限にてもそのたゆる拍子、道〳〵につけて拍子の相違有る事也。物毎のさかゆる拍子、おとろふる拍子、能々分別すべし。兵法の拍子において様々有る事也。先づあふ拍子をしつて、ちがふ拍子をわきまへ、大小・遅速の拍子の中にも、あたる拍子をしり、間の拍子をしり、背く拍子をしる事、兵法の専也。此そむく拍子わきまへ得ずしては、兵法たしかならざる事也。兵法の戦に、其敵〳〵の拍子をしり、敵のおもひよらざる拍子をもつて、空の拍子を知恵の拍子より発して勝つ所也。いづれの巻にも、拍子の事を専ら書記す也。其書付の吟味をして、能々鍛練有るべき物也。

〔訳文〕

どんな物事についても、拍子があるものであるが、とくに兵法では拍子の鍛練なしには達し得ないものである。

世の中の拍子があらわれているのは、能の舞や楽人の音楽などである。これは拍子がよく合うことによって、正しい拍子となる。

武芸の道にわたって、弓を射、鉄砲をうち、馬に乗ることまでも、拍子・調子というものがある。いろいろな武芸や芸能でも、拍子を乱すことがあってはならない。

また、目に見えないものについても拍子がある。武士の身にとっても拍子というものがあり、立身出世のとき、おちぶれたとき、いきのあうとき、いきのあわないとき、みな拍子がある。あるいは、商売の道でも、財産家になるとき、財産を失うときというように、それぞれの道によって拍子のちがいがあるものである。

物ごとが栄える拍子と衰える拍子とを、よくよく見分けなければならない。

兵法の拍子にもいろいろある。まず、合う拍子を知り、つぎに合わない拍子を知りわきまえ、大小・遅速の拍子の中でも、合つた拍子、間の拍子、逆の拍子を知るのが、兵法の第一とすべきことである。とくに、このあいての拍子にさからうことを知らないでは、確かな兵法にならないのである。

戦闘においては、敵の拍子を知り、敵の思いもかけぬ拍子をもって空の拍子を智恵の拍子より発して勝ち得るのである。

どの巻にも、もっぱら拍子のことを書き記すのである。書かれていることをよくかみしめ、よくよく鍛錬しなければならない。

右一流の兵法の道、朝な〳〵夕な〳〵勤めおこなふによつて、おのづから広き心

になつて、多分一分の兵法として、世に伝ふる所、初而書顕はす事、地水火風空、是五巻也。我兵法を学ばんと思ふ人は、道をおこなふ法あり。

第一に、よこしまになき事をおもふ所

第二に、道の鍛練する所

第三に、諸芸にさはる所

第四に、諸職の道を知る事

第五に、物毎の損徳をわきまゆる事

第六に、諸事目利を仕覚ゆる事

第七に、目に見えぬ所をさとつてしる事

第八に、わづかなる事にも気を付くる事

第九に、役にたゝぬ事をせざる事

大形如レ此理を心にかけて、兵法の道鍛練すべき也。此道に限りて、直なる所を広く見たてざれば、兵法の達者とは成りがたし。此法を学び得ては、一身にして二十三十の敵にもまくべき道にあらず。先づ気に兵法をたえさず、直なる道を勤めては、手にて打勝ち、目に見る事も人にかち、又鍛練をもつて惣躰自由なれば、身にても

人にかち、又此道に馴れたる心なれば、心をもつても人に勝ち、此所に至りては、いかにとして人にまくる道あらんや。又大きなる兵法にしては、善人を持つ事にかち、人数をつかふ事にかち、身をたゞしくおこなふ道にかち、国を治むる事にかち、民をやしなふ事にかち、世の例法をおこなひかち、いづれの道においても、人にまけざる所をしりて、身をたすけ、名をたすくる所、是兵法の道也。

正保二歳五月十二日　　新免武蔵

寛文七年

二月五日　　寺尾夢世勝延（花押）

山本源介殿

〔訳文〕

以上述べた二天一流の道は、朝に夕に、つとめて実践することによって、自然と広い心となり、集団の、または個人の兵法として、世に伝えられるのである。それを、初めて書きあらわしたのが地・水・火・風・空の五巻である。

わが兵法を学ぼうとする人には、道を行なう法則がある。

第一に、実直な、正しい道を思うこと。
第二に、道は鍛錬すること。
第三に、広く多芸に触れること。
第四に、広く多くの職能の道を知ること。
第五に、物事(ものごと)の利害得失を知ること。
第六に、あらゆることについて直実を見分ける力を養うこと。
第七に、目に見えないところを悟(さと)ること。
第八に、わずかなことにも気をくばること。
第九に、役にたたないことはしないこと。

だいたい、このような原理を心にかけて、兵法の道を鍛錬しなければならない。広い視野に立って真実を見きわめるのでなくては、兵法の達人となることができない。この原則を学ぶことができれば、一人でも二十人、三十人の敵に負ける道ではない。何よりもまず、兵法を究めようとする気力を充実させて、ひたすらに励むならば、まず手で人にかち、見る目においても人に勝つことができる。また鍛錬によって全身を意のままに動かせるようになれば身体も人に勝り、さらに心を修練すれば、精神においても人に勝つことができるのである。

心技すべての面で、卓越した境地に到達したならば、どんなにしても人に負ける方法がないではないか。

また、集団の兵法としては、立派な人物を部下にもつことに成功し、多くの部下を上手に使い、わが身を正し、国を立派に治め、民をよく養い、世の秩序を保つことができる。どんな道であろうと、人に負けないところが分かり、身を助け、名をあげることが、そのまま、兵法の道なのである。

新免武蔵

正保二年（一六四五）五月十二日

寺尾孫丞殿

寺尾夢世勝延(花押)

寛文七年（一六六七）二月五日

山本源介殿

水之卷

水之巻

兵法二天一流の心、水を本として、利方の法をおこなふによつて水の巻として、一流の太刀筋、此書に書顕はすもの也。此道いづれもこまやかに心の儘にはかきわけがたし。縦ひことばはつゞかざるといふとも、利はおのづからきこゆべし。此書にかきつけたる所、一こと〳〵、一字々々にて思案すべし。大形におもひては、道のちがふ事多かるべし。兵法の利において、一人と一人との勝負のやうに書付けたる所なりとも、万人と万人との合戦の利に心得、大きに見たつる所肝要也。此道にかぎつて、少しなり共、道を見ちがへ、道のまよひありては、悪道へ落つるもの也。此書付ばかりを見て、兵法の道には及ぶ事にあらず。此書にかき付けたるを、我身にとつて書付くを、見るとおもはずならふとおもはず、にせ物にせずして、則ち我心より見出したる利にして、常に其身になつて、能々工夫すべし。

〔訳文〕

二天一流の中心は、水を手本として、利益のある方法を行うものであるから、この巻を水之巻として、二天一流の太刀すじをここに書き記すものである。この道を細かく心のままに書くことはできないが、たとえ言葉はつづかなくとも、その利は自然と分かるであろう。

この書物に記したことについては、一言一言、一字一字深く考えてほしい。いい加減に思って学んだのでは、道とちがうことが多いであろう。

兵法に勝つ道については、一人と一人の勝負として書き記してあっても、万人と万人の合戦の方法のことと考え、大きく見ることが大切である。

兵法にかぎって、少しでも道を見ちがえたり、迷ったりすることがあると、道をはずしてしまうものである。

この書物をただ見るだけでは、兵法の真髄をきわめることはできない。

この書物に書かれていることを、わが身にとっての書付けと心得て、ただ見るだけと思わず、親しむだけとも思わず物まねするのではなく、真に自分が見出した利とするように、常にその身になってよくよく工夫しなければならない。

一　兵法心持の事

兵法の道において、心の持ちやうは、常の心に替る事なかれ。常にも、兵法の時にも、少しもかはらずして、心を広く直にして、きつくひつぱらず、少しもたるまず、心のかたよらぬやうに、心をまん中におきて、心を静かにゆるがせて、其ゆるぎのせつなも、ゆるぎやまぬやうに、能々吟味すべし。静かなる時も心は静かならず、何とはやき時も心は少しもはやからず、心は躰につれず、躰は心につれず、心に用心して、身には用心をせず、心のたらぬ事なくして、心を少しもあまらせず、うへの心はよわくとも、そこの心をつよく、心を人に見わけられざるやうにして、少身なるものは心に大きなる事を残らずしり、大身なるものは心にちひさき事を能くしりて、大身も小身も、心を直にして、我身のひいきをせざるやうに心をもつ事肝要也。心の内にごらず、広くして、ひろき所へ智恵を置くべき也。智恵も心もひたとみがく事専也。智恵をとぎ、天下の利非をわきまへ、物毎の善悪をしり、よろづの芸能、其道〳〵をわたり、世間の人にすこしもだまされざるやうにして後、兵法の智恵となる心也。兵法の智恵において、とりわきちがふ事有るもの也。戦の場万事せはしき時なりとも、兵法の道理をきはめ、うごきなき心、能々吟味すべし。

〔訳文〕

兵法の道においては、心のもち方は平常の心とかわってはならない。平常も、戦いの際も、少しも変ることなく、心をひろく、まっすぐにし、緊張しすぎることなく少しもたるむことなく、心が偏らないように心をまん中に置き、心を流動自在な状態にたもち、その流れが、一瞬も止まらぬように、よくよく注意しなければならない。

動作が静かな時にも心は静止せず、動作がはげしく動くときにも心を平静に保ち、心が動作に引きずられることなく、動作が心にとらわれることなく、心のもち方にはよくよく気をくばり、動作に気をとらわれぬようにする。心は充実させ、また余計なところに心をとらわれぬようにする。外見は弱くとも、本心は強く、本心を他人に見ぬかれないようにする。

身体の小さい者は、大きい身体をもつ者の状態をよく知り、身体の大きいものは、小さい身体をもつ者の状態をよく知って、大身も小身も心をまっすぐにして、自分自身をひいき目に見ないように心をもつことが大切である。

心のうちがにごらず、ひろやかな心で、とらわれないところからものごとを考えねばならない。知恵も、心も、ひたすらみがくことが大切である。

知恵をみがき、天下の正、不正をわきまえ、物ごとの善悪を知り、ありとあらゆる芸能のそれぞれの道を体験し、世間の人から少しもだまされないようになって後、はじめて兵法の知恵となるのである。

とりわけ兵法の場合には特別の修練が必要である。たとえ戦場にあって万事せわしい時でも、兵法の理論をきわめ、不動な心を保つことができるように、よくよく工夫すべきである。

〔参考〕

⑧一　心持の事

心の持様は、めらず、からず、たくまず、おそれず、直(すぐ)に広くして、意のこゝろかろく、心のこゝろおもく、心を水にして、折にふれ、事に応ずる心也。水にへきたんの色あり。一滴もあり、滄海(そうかい)も在り。能々吟味あるべし。

一　兵法の身(み)なりの事

身のかゝり、顔をうつむかず、あふのかず、かたむかず、ひずまず、目をみださず、ひたひにしわをよせず、まゆあひにしわをよせて、目の玉うごかざるやうにし

て、またゝきをせぬやうにおもひて、目をすこしすくめるやうにして、うらやかに見ゆるかほ、鼻すぢ直にして、少しおとがひを出す心なり。くびはうしろのすぢを直に、うなじに力をいれて、肩より惣身はひとしく覚え、両のかたをさげ、脊すぢをろくに、尻を出さず、ひざより足先まで力を入れて、腰のかゞまざるやうに腹をはり、くさびをしむるといひて、脇差のさやに腹をもたせて、帯のくつろがるやうに、くさびをしむるといふをしへあり。惣而兵法の身において、常の身を兵法の身とし、兵法の身をつねの身とする事肝要也。能々吟味すべし。

〔訳文〕

体の姿勢は、顔はうつむかず、あおむかず、かたむかず、曲げず、目を動かさず、額にしわをよせず、眉の間にしわをよせ、目の玉を動かさないようにして、またたきをしないような気持で、目をやや細めるようにする。

おだやかに見える顔つきで、鼻すじはまっすぐにして、やや、おとがいを出す気持で、くびはうしろの筋をまっすぐにして、うなじに力を入れて、肩から全身は同じものと考える。両肩を下げ、背すじをまっすぐにして、尻を出さず、ひざから足先まで力を入れて、腰がか

がまぬように腹を出す。くさびをしめるといって、脇差のさやに腹をもたせて、帯がゆるまぬように、くさびをしめる教えがある。

すべて兵法にあっては、平常の身体のこなし方を戦いのときの身のこなし方とし、戦いのときの身のこなし方を平常と同じ身のこなし方とすることが大切である。よくよく研究しなければならぬ。

〔参考〕

④一　身のかゝりの事

身のなり、顔はうつむかず、余りあふのかず、肩はさゝず、ひづまず、胸を出さずして、腹を出し、こしをかゞめず、ひざをかためず、身を真向にして、はたばり広く見する物也。常住兵法の身、兵法常の身と云事、能々吟味在るべし。

⑥一　目付の事

目を付けると云所、昔は色々在ることなれ共、今伝る処の目付は、大体顔に付るなり。目のをさめ様は、常の目よりもすこし細き様にして、うらやかに見る也。目の玉を不ㇾ動、敵合近く共、いか程も、遠く見る目也。其目にて見れば、敵のわざは不ㇾ及ㇾ申、左右両脇迄

も見ゆる也。観見二ツの見様、観の目つよく、見の目よわく見るべし。若又敵に知らすると云ふ目在り。意は目に付、心は不レ付レ物也。能々吟味有べし。

〔付記〕
どんな武芸でも平常心ということが大切なのである。柳生宗矩は『活人剣』下の中で、「常の心」をつぎのように説く。

常の心と云は、胸に何事をも残さず置かず、あとははらりはらりとすてて、胸が空虚になれば、常の心なり。

胸に何事ものこさず、跡を少しものこさないこと、それが常の心であると説く。常の心こそ、無心なのである。人の前で揮毫をたのまれたような場合、常の心がなく緊張すれば手が震えてくることや、大勢の人の前で話をすれば声が震えることがあるように、常の心を失うならば、どんなことでもできなくなるものである。禅では「平常心是道」というが、平素の心を失わないことが肝要である。

この平常心をもって一切のことをする人を、柳生宗矩は「名人」と呼んでいる。どんなこ

とをしても、しようとする心を外にあらわすことなく、何事かをよくしようと思う心もないのが平常心なのである。修行が未熟なうちは、よい技をしよう、うまく動こうと思うからかえってできなくなる。稽古をかさねてゆけば、よくしよう、うまくやろう、というような心は遠のいて、どんなことをしても、思わずして無心に、無思に、これを行なうことができるようになる。心に意識したり、執着したりすることがなく、自然に身体も手も足も動いてゆくとき、その名人の心は無心であり、平常心というのである。

兵法において技がきまるのは、無心のときでなければならない。無心というと、一切、心がないのではない。平常心を保つことが無心なのである。

兵法の勝負をするのでも弓を射るのでも、常の心でする必要がある。心がたかぶったり、邪心が起こったり、一ヵ所にとどまったりしたならばこれを行なうことができない。常の心で弓を射ること、常の心で兵法を行なうこと、この常の心を無心というのである。

動転した心、怒った心、勝負を争う心でやれば、兵法は失敗する。常の心、無心の心でやってこそ、真の技を無限に発揮することができるのである。

道者の心を鏡のように保つことが無心になることである。鏡はきれいな花を映しても、鏡自体の価値が増すものではなく不動であり、きたない犬の糞を映しても、鏡自体の価値が減

ずるものでもない。どんなものを映しても、鏡はそれを映しながらも自らをかえることはない。鏡こそ真の不動智であり、無心である。
無心というと心がないのではない。あっても動揺しないことなのである。鏡のような心が無心であり、それはそのまま平常心なのである。
合気道の技を行なう場合も、この無心の境地が大切である。どこまでも動揺することなく、一つに固まることなく、流れるように動いて動かぬ心を持たなければならない。それはまた柳生新陰流の剣法の極意とも通ずるものなのである。
無心とは身体全体にひろがりわたった気であるが、無心を体得した人を道者という。道者とは胸に何ごともない人である。胸に何ごともなく無心になりきっているけれども、どんなことも成すことができる人のことである。無心の境地とは鏡が常に澄みわたって、何の形も映さず、しかも鏡の前に向ったものの形はどんな物でも明らかに映すことができるようなものである。道者の胸の内こそまさしく鏡の如きものでなければならない。この無心の相を別の言葉で平常心ともいう。
柳生宗矩は沢庵から禅の指導を受けていたため、平常心というものを禅の立場から説いたが、武蔵の『五輪書』の平常心は平常心ではなくて、平常身であることに注意しなければな

らない。

平常心が観念的であるのに対し、平常身は具体的である。「常の身を兵法の身とし、兵法の身をつねの身とする」ことが一番大切であると武蔵はいうのである。戦いの場において常の身を保つには、朝鍛夕錬の修行によって身を鍛えあげておかなければならないのである。身が感じ、身が思うようにならなければ武蔵のいうことは分からぬ。

一　兵法の目付といふ事

目の付けやうは、大きに広く付くる目也。観見二つの事、観の目つよく、見の目よわく、遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事、兵法の専也。敵の太刀をしり、聊かも敵の太刀を見ずといふ事、兵法の大事也。工夫有るべし。此目付、ちひさき兵法にも、大きなる兵法にも、同じ事也。目の玉うごかずして、両わきを見る事肝要也。かやうの事、いそがしき時、俄にはわきまへがたし。此書付を覚え、常住此目付になりて、何事にも目付のかはらざる所、能々吟味あるべきもの也。

〔訳文〕

戦いのときの目のくばり方は、大きく広くくばるのである。目には観の目と見の目とがあるが、観の目をつよくし、見の目は弱くする。離れたところの動きをはっきりとつかみ、また身近な動きにとらわれず、それをはなして見ることが兵法の上で最も大切である。敵の太刀の動きを知るが、少しも敵の太刀の動きにまどわされないことが兵法の大事なのである。工夫がなければならない。

これらの心得は個人の戦いにも、また多人数の戦いにも同じように必要である。目の玉を動かさないで、両わきを見ることが重要である。

こうしたことは、いそがしいときに、急に身につけることはできないものである。ここに書いてあることをよくおぼえ、いつもこの目つきとなって、どんなことがあっても目つきがかわらないように、十分に修錬すべきことである。

〔参考〕

⑥一　目付の事

目を付けると云所、昔は色々在ることなれ共、今伝る処の目付は、大体顔に付るなり。目のをさめ様は、常の目よりもすこし細き様にして、うらやかに見る也。目の玉を不レ動、敵

合近く共、いか程も、遠く見る目也。其目にて見れば、敵のわざは不(もうすに)レ及(およばず)レ申、左右両脇(りょうわき)迄(まで)も見ゆる也。観見(かんけん)二ツの見様(みよう)、観(かん)の目つよく、見(けん)の目よわく見るべし。若(もし)又敵に知らすると云ふ目在り。意は目に付、心は不レ付レ物也。能々吟味有べし。

〔付記〕

観は「観(み)る」であり、見も「見る」であるが、同じみるでもそのみ方がことなる。「観」と「見」ということを、もっとも的確に把握したのは宮本武蔵であったろうと思われる。「観の目」と「見の目」を分けているのはどういうことかというと、「見」というのは目もとで見ることだというのであり、「観」というのは心で観(み)ることで、仏教の言葉でいえば観智のことであるというのである。

われわれが普通見るのは、「見」の目で見る。聞くこともそうであるが、われわれの目や耳というのは自分の好きなことはよく見えるし、またよく聞こえるというだけで、それは全部おれがおれがという我見にすぎない。エゴで見聞きしているわけである。だからわれわれは、目も耳も確実に客観をとらえていると思っているが、それはとんでもないことである。どんなに見えても聞こえても、関心がないことは目に入らず、耳に入らない。そうなると、見る

とか聞くとかいうことも、けっして正しく行なわれているとはいえないわけである。

柳生流においても、この観と見とを問題とする。『活人剣』下では、

目に見るるを見と言ひ、心に見るを観と言ふ。

と端的に定義する。「観」についてはきわめて重要であり、古来から武道では、「観は心で聞く」という。昔の人が「観は心で聞く」というのがおもしろい。普通は聞くというと耳で聞くのであるが、心で聞くのが観なのである。心は臍下丹田にある。この丹田で相手の気の動きを聞くのである。聞くのであるから目で見る必要はない。だから当然目はふさいで見ることになる。内なる丹田で見るのである。内なる心で相手の動きを感じて見るのが観なのである。観は「志」で見るのであり、「本心」で見るのである。

観は相手の動作を見るのではない、相手の気の動きを見るのである。相手の動作を見るのは「見」にほかならない。

合気道においても、観の目と見の目をはたらかさなければならない。臍下丹田にあつまった心（本心）で相手の気の動きの全体を見るのである。強いていえば「へそ」で見るのである。目で一ヵ所を見るのではなく、観で全体をそのまま把握するのである。呼吸力が発する

もとも臍下丹田であり、観の目も臍下丹田についているのである。

観の目がはたらくようになるのは一朝一夕ではできない。長い間の朝鍛夕錬の結果、臍下丹田で見えるようになるのである。心で見るのが根本であり、目で見るのは心の見た後でなければならない。心で見るのは目で見るためであり、心で見る鍛錬をする必要がある。

さらに重要なことは、「遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事」である。遠い離れたところもはっきりと見る習錬をしなければならない。近いところの敵の動きにだけ気がとらわれていると遠いところは見えなくなる。敵の動きの全体をつかむことが肝要なのである。「ちかき所を遠く見よ」というのは、すぐ前の動きにどうしても心がとらわれることを防ぐ意味でこのようにいう。相手の太刀が上段から下段にかわると、その変化にすべてが奪われてしまうようになる。すると心がそこに固縛されてその外の全体の動きが見えなくなる。見の目ではだめで、観の目が必要な所以となる。

つぎの「敵の太刀をしり、聊かも敵の太刀を見ず」ということが兵法の大事であると武蔵はいうが、敵の太刀の動きや太刀すじを知ることは大切であるが、敵の太刀の動きに心がとらわれてはならない。太刀の動きだけを見の目でおい求めてゆくとき、全体が見えなくなる。そのことを注意したのである。

これは何も兵法に限らない。どんなことをする場合にも、このことは重要なのである。見の目だけで見ていては目先しか見えなくなる。観の目をとぎすましてこそ、遠いところが見えてくる。全体が見えてくる。未来が見えてくるのである。

一　太刀の持ちやうの事

太刀のとりやうは、大指ひとさしを浮ける心にもち、たけ高指しめずゆるまず、くすしゆび・小指をしむる心にして持つ也。手の内にはくつろぎのある事悪しし。敵をきるものなりとおもひて、太刀をとるべし。敵をきる時も、手のうちにかはりなく、手のすくまざるやうに持つべし。もし敵の太刀をはる事、うくる事、あたる事、おさゆる事ありとも、大ゆび・ひとさしゆびばかりを、少し替る心にして、とにも角にも、きるとおもひて、太刀をとるべし。ためしものなどきる時の手の内も、兵法にしてきる時の手のうちも、人をきるといふ手の内に替る事なし。惣而、太刀にても、手にても、ゐつくといふ事をきらふ。ゐつくは、しぬる手也。ゐつかざるは、いきる手也。能々心得べきもの也。

〔訳文〕

太刀のもち方は、親指と人差指を浮かすような心持ちで持ち、中指はしめず、ゆるめず、薬指と小指をしめる気持で持つのである。手の締め方にゆるみがあるのはよくない。敵を斬ることを念頭(ねんとう)において太刀を持たねばならない。

敵を斬る時にも、手の具合は変ることなく、手が委縮して動きのとれないことがないように持つべきである。もし敵の太刀を打ったり、受けたり、あたったり、おさえたりすることがあっても、親指と人差指の調子を少しかえるくらいの気持で、とにかく相手を斬るのだという気持で太刀をとらねばならぬ。

試し斬りにする時も、また真剣で斬りあう場合にも、人を斬るということでは手の持ち方に変りはない。

すべて太刀のうごきにせよ、手のもち方にせよ、固着して動きがなくなってはならない。固着することは死の手であり、固着しないことが生の手である。このことを十分に心得る必要がある。

〔参考〕

③一　太刀取様の事

太刀の取様は、大指人さし指を浮て、たけたか中くすしゆびと小指をしめて持候也。太刀にも手にも、生死と云事有り。構る時、受る時、留る時などに、切る心をわすれて居付く手、是れ死ぬると云也。生ると云は、いつとなく、太刀も手も出合やすく、かたまらずして、切り能き様にやすらかなるを、是れ生る手と云也。手くびはからむ事なく、ひぢはのびすぎず、かゞみすぎず、うでの上筋弱く、下すぢ強く持也。能々吟味あるべし。

〔付記〕

この項で重要なのは、とにかく斬ると思って太刀をとることである。武蔵の徹底した実利主義の立場からいえば、太刀は相手を斬るためにあるのであってそれ以外の何ものでもない。

また太刀の持ち方でも手の持ち方でも、固定し固着してはならぬという。固着するときそれは死の手となり、流動しているとき、それは生の手となるというのは、まことに至言である。沢庵の『不動智神妙録』では、心が一つに固着することを強く戒めているが、武蔵の場合は、たんに心でなく、太刀も手も一ヵ所に停滞することは死の道に通ずるというのである。

このような流水の状態に太刀と手さばきをおくためには、朝鍛夕錬の修行がなければ到底で

きるものではないのである。

一　足づかひの事

足のはこびやうの事、つまさきを少しうけて、きびすをつよく踏むべし。足づかひは、ことによりて大小・遅速はありとも、常にあゆむがごとし。足に飛足、浮足、ふみすゆる足とて、是三つ、きらふ足也。此道の大事にいはく、陰陽の足といふ、是肝心也。陰陽の足とは、片足ばかりうごかさぬもの也。きる時、引く時、うくる時迄も、陰陽とて、右ひだり〱と踏む足也。返々、片足ふむ事有るべからず。能々吟味すべきもの也。

〔訳文〕

足の運びは、爪先を少し浮かせて、踵をつよく踏め。足のつかい方はその時によって大小遅速の相違はあるが、ふつうに歩むように使うこと。飛ぶような足、浮きあがった足、固着するような足の三つはよくない足である。

足のつかい方では、陰陽ということが肝心とされている。陰陽の足とは、片足だけを動か

すのではなく、斬る時も、退く時も、受ける時も、右左、右左と足を運ぶのである。くれぐれも、片足だけを動かすことがないよう、十分に注意しなければならぬ。

〔参考〕

⑤一　足ぶみの事

足づかひ、時々により、大小遅速は有れ共、常にあゆむがごとし。足に嫌ふ事、飛足、うき足、ふみすゆる足、ぬく足、おくれ先立つ足、是皆嫌ふ足也。足場いか成る難所なりとも、構ひなき様に慥にふむべし。猶奥の書付にて能くしるべき也。

一　五方の構の事

五方のかまへは、上段、中段、下段、右のわきにかまゆる事、左のわきにかまゆる事、是五方也。構五つにわかつといへども、皆人をきらん為也。構五つより外はなし。いづれのかまへなりとも、かまゆるとおもはず、きる事なりとおもふべし。構の大小はことにより利にしたがふべし。上中下は躰の構也。両わきはゆふの構也。右ひだりの構、うへのつまりて、わき一方つまりたる所などにての構也。右ひだり

は所によりて分別あり。此道の大事にいはく、構のきはまりに中段と心得べし。中段、構の本意也。兵法大きにして見よ。中段は大将の座也、大将につぎ、あと四段の構也。能々吟味すべし。

〔訳文〕

五つの構えとは、上段、中段、下段、右のわき、左のわきにかまえることをいう。

かまえは五つに分けるけれども、すべて人を斬るためのものである。かまえには五つよりほかにはないが、どのかまえにせよ、かまえにとらわれず、何より敵を斬ることであると考えよ。

かまえの大小は場合により、有利な方をとればよい。上、中、下段のかまえは本かまえ、両わきにかまえるのは、応用のかまえである。右左にかまえるのは、上がつかえて、わきの一方がつかえた所などでのかまえである。右左は、場所によって判断すればよい。

兵法の極意にいう、最善のかまえは中段にあると心得よ。中段こそかまえの本すじである。これを大きな用兵の場合にあてはめて見よ。中段は大将の座であり、この大将の座にあとの四つのかまえが従うのである。これをよくよく研究せよ。

〔参考〕

⑨一　兵法上中下の位を知る事

兵法に身構有り。太刀にも色々構を見せ、強く見え、はやく見ゆる兵法、是下段と知るべし。又兵法こまかに見え、術をてらひ、拍子能様に見え、其品きら在て、見事に見ゆる兵法、是中段の位也。上段の位の兵法は、不レ強不レ弱、角らしからず、はやからず、見事にもなく、悪敷も見えず、大に直にして、静に見ゆる兵法、是上段也。能々吟味有べし。

一　太刀の道といふ事

太刀の道を知るといふは、常に我さす刀をゆび二つにてふる時も、道すぢ能くしりては自由にふるもの也。太刀をはやく振らんとするによつて、太刀の道さかひてふりがたし。太刀はふりよき程に静かにふる心也。或は扇、或は小刀などつかふやうに、はやくふらんとおもふによつて、太刀の道ちがひてふりがたし。それは小刀きざみといひて、太刀にては人のきれざるもの也。太刀を打ちさげては、あげよき道へあげ、横にふりては、よこにもどりよき道へもどし、いかにも大きにひぢをの

べて、つよくふる事、是太刀の道也。我兵法の五つのおもてをつかひ覚ゆれば、太刀の道定まりて、ふりよき所也。能々鍛練すべし。

〔訳文〕

太刀の道すじを知るというのは、ふだん自分がさす太刀を、二本の指でふっても、太刀をどのように振るべきかということをよく知っていれば、自由にふれるものである。

太刀を早くふろうとするから、太刀の道すじに逆って、自由にふれなくなるのである。太刀は、ふりよいように、静かにふる気持が大切である。扇とか、小刀とかを使うように、早くふろうと思うから、太刀の道すじを誤って、ふれなくなるのである。そのようなふり方は（実戦には役にたたないような）「小刀きざみ」といって、こんな太刀で人を斬ることはできないものである。太刀をうち下げれば、上げやすい方に上げ、横にふった時は横にもどしよい方へもどし、どのようにも大きくひじを伸ばし、強くふることが太刀をふる道である。

わが兵法の五つの基本型を、よく使いおぼえれば太刀をふる道がきまり、ふりやすくなるのである。よくよく鍛錬しなければならぬ。

〔参考〕

⑪一　太刀の道の事

太刀の道を能知らざれば、太刀心の儘に振りがたし。其上つよからず。太刀のむねひらを不レ弁、或は太刀を小刀に仕ひなし、或はそくひべらなどの様に仕付れば、かんじんの敵を切る時の心に出合がたし。常に太刀の道を弁へて、重き太刀の様に、太刀を静にして、敵に能あたる様に、鍛錬有べし。

一　五つのおもての次第、第一の事

第一の構、中段。太刀さきを敵の顔へ付けて、敵に行相ふ時、敵太刀打ちかくる時、右へ太刀をはづして乗り、又敵打ちかくる時、きつさきがへしにて打ち、うちおとしたる太刀、其儘置き、又敵の打ちかくる時、下より敵の手はる、是第一也。惣別、此五つのおもて、書付くるばかりにては、合点成りがたし。五つのおもてのぶんは、手にとつて、太刀の道稽古する所也。此五つの太刀筋にて、我太刀の道をもしり、いかやうにも敵の打つ太刀しるる所也。是二刀の太刀の構、五つより外にあらずとしらする所也。鍛練すべきなり。

〔訳文〕

五つの基本型について、その第一。第一のかまえは、中段をとり、太刀の先を敵の顔につける。敵に出くわし、敵が太刀を打ちかけてくる時、太刀を右にはずしておさえる。また敵が打ちかけた時、切先返しで打ち、打ちおろした太刀をそのままにしておき、敵がさらに打ってくれば、下から敵の手を打つ。これが第一の基本型である。

すべてこの五つの基本型を書いただけでは、それで合点できるものではない。五つの基本型については、手にとって太刀のやり方を稽古すべきところである。この五つの太刀筋によって、わが兵法の道を体得し、どのようにも敵の打ってくる太刀の道すじが分るようになる。従ってわが二刀の太刀のかまえには、五つよりほかにはないと教える所以である。よくよく鍛錬すべきである。

一　おもての第二の次第の事

第二の太刀、上段に構へ、敵打ちかくる所、一度に敵を打つ也。敵をうちはづしたる太刀、其儘おきて、又敵のうつ所を、下よりすくひ上げてうつ。今一つ打つも

同じ事也。此おもての内においては、様々の心持、色々の拍子、此おもてのうちをもつて、一流の鍛錬をすれば、五つの太刀の道こまやかにしつて、いかやうにも勝つ所あり。稽古すべき也。

〔訳文〕

第二の太刀のふり方は、上段に構え、敵が打ちかけてくるところを一気に打つのである。敵を打ちはずした時は太刀をそのままにし、敵がまた、打ちかけてきたところを下からすくい上げて打つ。もう一度打つ場合も同じことである。

この基本型においては、様々な心もちやいろいろの拍子があり、この基本型によって一流の鍛練をすれば、五つの太刀のふり方をくわしく知って、どのようにも勝つことができる。よく稽古しなければならぬ。

一　おもて第三の次第の事

第三の構、下段に持ち、ひつさげたる心にして、敵の打ちかくる所を、下より手をはる也。手をはる所を、亦敵はる太刀を打ちおとさんとする所を、こす拍子にて、

敵打ちたるあと、二のうでを横にきる心也。下段にて敵の打つ所を一度に打ちとむる事也。下段の構、道をはこぶに、はやき時も遅き時も、出合ふもの也。太刀をとつて鍛練あるべき也。

〔訳文〕

第三の太刀のふり方は、下段に構え、ひきさげたような気持で、敵が打ちかけてきたところを、下から手を打つのである。手を打つところを敵はまた打ってくる。わが太刀を打ち落そうとするところを、打たれたところはそのままにし、敵のより効果的な箇所を打ったあと、敵の二の腕を横に斬る気持である。下段で敵の打ってくるところを一気に打ちとめてしまうことである。

下段のかまえは、太刀すじを修練するのに初心のときにも、修練をつんだときにも、よく出合うものである。太刀をとって鍛錬すべきである。

一　おもて第四の次第の事

第四の構、左の脇に横にかまへて、敵の打ちかくる手を下よりはるべし。下より

はるを、敵打ちおとさんとするを、手をはる心にて、其儘太刀の道をうけ、我肩のうへへすぢかひにきるべし。是太刀の道也。又敵のうちかくる時も、太刀の道を受けて勝つ道也。能々吟味あるべし。

〔訳文〕

第四の構えは左のわきに太刀を横に構えて、敵が打ちかけてきた手を、下から打たねばならぬ。下から打つのを敵が打ちおとそうとするのを、敵の手を打つ気持で、そのまま敵の太刀すじを受け、自分の肩の上へとはすかいに斬る、これが太刀のふりようである。

また敵が打ちかけてきた時にも、太刀の道すじを受けて勝つことのできる方法である。十分に研究しなければならぬ。

一　おもて第五の次第の事

第五の次第、太刀の構、我右の脇に横にかまへて、敵打ちかくる所のくらゐをうけ、我太刀下のよこよりすぢかへて、上段にふりあげ、うへより直にきるべし。是も太刀の道、能くしらんため也。此おもてにてふりつけぬれば、おもき太刀自由に

ふらるゝ所也。此五つのおもてにおいて、こまかに書付くる事にあらず。我家の一通太刀の道をしり、亦大形拍子をも覚え、敵の太刀を見わくる事、先づ此五つにて、不断手をからす所也。敵とたゝかひのうちにも、此太刀筋をからして、敵の心を受け、色々の拍子にて、いかやうにも勝つ所也。能々分別すべし。

〔訳文〕

第五は、太刀のかまえは自分の右のわきに横にかまえて、敵が打ちかけてくるのに応じて、わが太刀を下の横からはすかいに、上段にふり上げ、上からまっすぐに斬るのである。

　このふり方も、太刀の道をよく知るためのものである。この基本で太刀をふりつけていれば、重い太刀も自由にふることができるようになる。

　この五つの基本型については、細かく書き記すことではない。わが流儀の太刀のふり方を一通り知り、だいたいその拍子をおぼえ、敵の太刀筋を見分けることができるように、まずこの五つの太刀筋を日頃から技を磨くことが肝要である。

　敵と闘う間にも、この太刀筋に熟練して、敵の心を見ぬいては、さまざまな拍子で、どのようにも勝つことができるようになろう。よくよく心得なければならぬ。

一　有構無構のをしへの事

有構無構といふは、太刀をかまゆるといふ事あるべき事にあらず。され共、五方に置く事あれば、かまへともなるべし。太刀は、敵の縁により、所により、けいきにしたがひ、何れの方に置きたりとも、其敵きりよきやうに持つ心也。上段も時に随ひ、少しさがる心なれば中段となり、中段を利により少しあぐれば上段となる。下段もをりにふれ、少しあぐれば中段となる。両脇の構も、くらゐにより少し中へ出せば、中段・下段共なる心也。然るによつて、構はありて構はなきといふ利也。先づ太刀をとつては、いづれにしてなりとも、敵をきるといふ心也。若し敵のきる太刀を受くる、はる、あたる、ねばる、さはるなどいふ事あれども、みな敵をきる縁なりと心得べし。うくると思ひ、はると思ひ、あたるとおもひ、ねばるとおもひ、さはるとおもふによつて、きる事不足なるべし。何事もきる縁と思ふ事肝要也。能々吟味すべし。兵法大きにして、人数だてといふも構也。みな合戦に勝つ縁なり。ゐつくといふ事悪しし。能々工夫すべし。

〔訳文〕

構えがあって、構えがないというのは、太刀を形にはまってかまえるということは、あるべきことではない。しかしながら、五つの方向（上、中、下、右、左のわき）に向けることは構えということもできよう。

太刀は、敵の出方をきっかけとして、その場所により、状況にしたがい、どのように持とうとも、敵を斬りやすいように持つことである。たとえば上段も、場合によって少しく下げる気になれば中段となり、中段を状況に応じてやや上げれば上段となり、下段も時によって少しく上げれば中段となる。また両脇のかまえも、位置によって、少し中の方へ出せば、中段または下段ともなるのである。このようなわけで、構えというものは、あってないという理になる。

ともかく、太刀をとっては、どんなことをしても敵を斬ることが重要である。もし敵が斬りかかってくる太刀を、うつ、あたる、ねばる、さわるなどということがあっても、それらはすべて敵を斬るきっかけであると心得よ。

受けること、うつこと、あたること、ねばること、さわることに思いをよせるならば、敵を斬ることはできなくなるであろう。何事も斬るためのきっかけであると思うことが大切で

ある。これをよくよく検討しなければならない。

大きな用兵の場合にあてはめて見れば、軍勢を配置することがかまえに当る。これもすべて合戦に勝つための手段である。

きまった形にとらわれることが悪いのである。よくよく工夫すべきことである。

〔参考〕

㉝一　うかうむかうと云事

有構無構と云は、太刀を取て身の間に有る事、いづれもかまへなれども、かまゆるこゝろ有るによりて、太刀も身も居付く者なり。所によりことにしたがひ、いづれに太刀は有とも、かまゆると思ふ心なく、敵に相応の太刀なれば、上段のうちにも三色あり。中段にも下段にも三ツの心有り。左右の脇までも同事なり。爰をもつてみれば、かまへはなき心也。能々吟味有べし。

〔付記〕

型にとらわれてはいけないことを見事に説いている。一定の型に従うことばかり考えると、

型にはまって動きがにぶくなる。しかも「構はありて構はなきといふ利也」というと、いかにも禅の表現のように見えるが、禅的な境地をのべているのではない。どこまでも刀法そのものからこのように言っているのである。太刀のふり方、持ち方を一寸かえるだけで、上段にも中段にも下段にもなる、ということを言ったのである。さらに、

先太刀をとつては、いづれにしてなりとも、敵をきるといふ心也。若し敵のきる太刀を受くる、はる、あたる、ねばる、さはるなどいふ事あれども、みな敵をきる縁なり。

ということを見れば、武蔵の徹底した実利主義の立場を知ることができる。

一　敵を打つに、一拍子の打の事

敵を打つ拍子に、一拍子といひて、敵我あたるほどのくらゐを得て、敵のわきまへぬうちを心に得て、我身もうごかさず、心も付けず、いかにもはやく、直に打つ拍子也。敵の太刀、ひかん、はづさん、うたんと思ふ心のなきうちを打つ拍子、是一拍子也。此拍子能くならひ得て、間の拍子をはやく打つ事鍛練すべし。

〔訳文〕

敵を打つ拍子に、一拍子の打ちといって、敵と我とが太刀の届くほどの位置をしめて、敵の心がまえができないまえに、自分の身も動かさず、どこにも心をつけず、すばやく一気に打つ拍子がある。敵が太刀を、引こう、はずそう、打とうなどと思う心がおこらぬうちに打つ拍子が、一拍子である。

この拍子をよく習得し、間合をきりつめ、すばやく打つことを鍛錬しなければならぬ。

〔参考〕

㉒一　拍子の間を知ると云事

拍子の間を知るは、敵により、はやきも在り、遅きもあり、敵にしたがふ拍子也。心おそき敵には、太刀あひに成と、我身を動さず、太刀のおこりを知らせず、はやく空にあたる、是一拍子也。

〔付記〕

沢庵の『不動智神妙録』に、「間、髪を容れず」とか、「石火の機」というのがある。石を

ハッシと打つや、瞬間、刹那に火がでる。間も隙もないことを「石火の機」というのである。

これは誤解してはならないのは、たんに速いということではない。心が一瞬間もとどまらないことである。合気道でいえば、一瞬間も気が停滞しないことをいうのである。たんに速く速くと焦るのではない。稽古のときに技を焦って速くかける必要はまったくない。気が停滞しなければよいのであり、心の動きがとどまらなければよいのである。速く速くと焦れば、そう思う心に気がとどまり、そこに隙が生じるからである。

石火の機とは、たとえば「太郎」と呼びかけると「ハイッ」と答えるはたらきをいう。その間には間、髪を容れることはできない。太郎が太郎と呼ばれ、これは自分のことを呼んでいるのだろうかと考え、そうだ、まちがいないと判断を下し、それから「ハイッ」と答えるであろうか。「太郎」と呼べば「ハイッ」とくるのが石火の機なのである。この「石火の機」は「石火の気」といってもよく、気の流れは一瞬もとどまってはならないのである。

機を見ることがどんなに大切なことであるかを、『活人剣』下の中で次のように説いている。

一刀とは、刀にあらず。敵の機を見るを、一刀と秘するなり。大事の一刀とは、敵のはたらきを見るが、無上極意の一刀なり。敵の機を見るを一刀と心得、はたらきに随て打

太刀と心得べし。

もっとも重要な第一刀というのは敵のはたらき、敵の機を見るのである。その敵の機を見た後に打つ太刀を第二刀というのである。第一刀の極意は刀ではない。それは敵の機を見るのである。敵の気が発する動きを見ることが兵法においてもっとも大切であるという。機を見ることが第一刀で、実際に刀で相手を斬るのは第二刀にすぎないのである。石火の機をつかむことが武道の極意であることが分る。

一　二のこしの拍子の事

二のこしの拍子、我打ちださんとする時、敵はやく引き、はやくはりのくるやうなる時は、我打つとみせて、敵のはりてたるむ所を打ち、引きてたるむ所を打つ、是二つのこしの打也。此書付斗にては、中々打得がたかるべし。をしへうけては、忽ち合点のゆく所也。

〔訳文〕

「二の腰の拍子」というのは、自分が打ち出そうとしたとき、敵がより早く退こうとしたとき、はやく打ってくるようなときは、まず打つとみせ、敵が緊張したあとのわずかな気のゆるみが出たところを、すかさず打ち、引いて気のゆるみがでたところを打つ、これが二の腰の打ちである。

この書物だけでは、なかなか打つことはできないであろうが、教えをうければ、たちまち合点のいくところである。

〔参考〕

㉒敵の気のはやきには、我身と心をうち、敵動きの迹を打事、是二のこしと云也。

一　無念無相の打といふ事

敵も打ちださんとし、我も打ちださんと思ふ時、身も打つ身になり、心もうつ心になつて、手はいつとなく空より後ばやにつよく打つ事、是無念無相とて、一大事の打也。此打たび〳〵出合ふ打也。能々ならひ得て鍛練あるべき儀也。

〔訳文〕

敵も打ちかかろうとし、我も打ち出そうと思う時に、体も打つ態勢となり、精神も打つ心になって、手は自然に、すばやく敵の気の間を、空よりつよく打つのである。これを無念無想の打ちといって、もっとも大切な打ちであり、しばしば出合う打ちである。

よくよく習得して鍛錬すべきである。

〔参考〕

㉒又無念無想と云は、身を打様になして、心と太刀は残し、敵の気の間を、空よりつようつ、是無念無想也。

一　流水の打といふ事

流水の打といひて、敵相になりてせりあふ時、敵はやくひかん、はやくはづさん、早く太刀をはりのけんとする時、我身も心も大きになつて、太刀を我身のあとより、いかほどもゆる〳〵と、よどみのあるやうに、大きにつよく打つ事也。此打、ならひ得ては、慥に打ちよきもの也。敵のくらゐを見わくる事肝要也。

〔訳文〕
「流水の打ち」とは、敵と互角(ごかく)にせり合うとき、敵が早く引こう、早くはずそう、早く太刀をはねのけようとするのを、こちらは身も心も大きくたもち、太刀は身体よりもおそく、いかにもゆっくりと、川の流れがよどんで一旦静止(せいし)するように、大きく強く打つのである。
この打ち方は習得すれば確かに打ちよいものである。このとき、敵の位置をよく見わけることが肝要である。

〔参考〕
㉒又おくれ拍子と云は、敵太刀にてはらんとし、受んとする時、いかにもおそく、中にてよどむ心にして、まを打事、おくれ拍子也。能々工夫あるべし。

一 縁(えん)のあたりといふ事
我打出(われうちだ)す時、敵打ちとめん、はりのけんとする時、我打(わがうち)一つにして、あたまをも打ち、手をも打ち、足をもうつ。太刀(たち)の道一つをもつて、いづれなりとも打つ所、

是縁の打也。此打、能々打ちならひ、何時も出合ふ打也。細々打ちあひて分別あるべき事也。

〔訳文〕

自分が打ち出すとき、敵が打ちとろう、はねのけようとするのを、自分は一打ちで、頭をも打ち、手をも打ち、足をも打つ。

太刀筋一つで、どこをも打つというのが「縁のあたり」である。この打ちは、よくよく習得すべきもので、いつも出合う打ち方である。しばしば打ち合うことにより、理解できるであろう。

〔参考〕

㉗一　縁の当りと云事

縁のあたりと云は、敵太刀切懸るあひ近き時は、我太刀にて張る事も在り、受る事も在り、あたる事も在り。受るもはるもあたるも、敵を打つ太刀の縁とおもふべし。乗るもはづすもつぐも、皆うたんためなれば、我身も心も太刀も、常に打たる心也。能々吟味すべし。

一　石火（せっか）のあたりといふ事

石火（せっか）のあたりは、敵の太刀（たち）と我（わが）太刀と付合（つけあ）ふほどにて、我太刀少しもあげずして、いかにもつよく打つ也。是（これ）は足もつよく、手もつよく、三所（みところ）をもつてはやく打つべき也。此打（このうち）、たび〳〵ならはずしては打ちがたし。よく鍛練（たんれん）すれば、つよくあたるもの也。

〔訳文〕

「石火のあたり」とは、敵の太刀と、わが太刀とが、ひっつき合う状態で、わが太刀を少しもあげることなく、はなはだ強く打つのである。

これには足もつよく、身もつよく、手もつよくして、その足と身と手との三所の力をもって、はやく打たねばならない。この打ち方は、しばしば習練しなければ打てないものである。よくよく鍛錬すれば強く打てるものである。

一　紅葉（もみじ）の打（うち）といふ事

紅葉の打、敵の太刀を打ちおとし、太刀取りなほす心也。敵前に太刀を構へ、うたん、はらん、うけんと思ふ時、我打つ心は、無念無相の打、又石火の打にても、敵の太刀を強く打ち、その儘あとをねばる心にて、きつさきさがりにうてば、敵の太刀必ずおつるもの也。此打鍛練すれば、打ちおとす事やすし。能々稽古あるべし。

〔訳文〕

「紅葉の打ち」とは、敵の太刀を打ちおとして、太刀をとりなおすことである。敵がわが前に太刀をかまえ、打とう、たたこう、受けようとしているとき、自分は、無念無想の打ち、あるいは石火の打ちなどで、敵の太刀をつよく打ち、そのまま、敵の太刀につけて容易にははなれないような気持で切先を押し下げつつ打つならば、必ず敵の太刀は落ちるものである。

この打ちは鍛練すれば、敵の太刀を打ちおとすことは容易である。よくよく稽古しなければならない。

一　太刀にかはる身といふ事

身にかはる太刀ともいふべし。惣而、敵を打つに、太刀も身も、一度にはうたざ

るもの也。敵の打つ縁により、身をばさきへうつ身になり、太刀は身にかまはず打つ所也。若しは、身はゆるがず、太刀にてうつ事はあれども、大形は身を先へ打ち、太刀をあとより打つもの也。能々吟味して打ちならふべき也。

〔訳文〕

「太刀にかわる身」ということは、「身にかわる太刀」といってもよい。すべて敵を打つ場合に、わが太刀も、わが身も一度に動かしては打たぬものである。打ちかかってくる敵の状態に応じて、まずわが身を打ちこむ態勢とし、太刀はそれにかまわずして敵を打ちこむのである。

もしくは、身はそのままの態勢で、まず太刀によって打つこともあるが、大抵の場合は身をまず打つ態勢とし、太刀はこれに従って打ってゆくものである。よくよく研究して、打つ習練をつまねばならぬ。

〔参考〕

⑮一　太刀に替る身の事

太刀にかはる身と云は、太刀を打出す時は、身はつれぬ物也。又身を打と見する時は、太刀は跡より打つ心也。是空の心也。太刀と身と心と一度に打事はなし。中に在る心、中に在る身、能々吟味すべし。

一　打つとあたるといふ事

打つといふ事、あたるといふ事、二つ也。打つといふ心は、いづれの打にても、思ひうけて慥に打つ也。あたるはゆきあたるほどの心にて、何と強くあたり、忽ち敵の死ぬるほどにても、是はあたる也。打つといふは、心得て打つ所也。吟味すべし。敵の手にても足にても、あたるといふは、先づあたる也。あたりて後を、つよくうたんためなり。あたるはさはるほどの心、能くならひ得ては、各別の事也。工夫すべし。

〔訳文〕

「打つということ」と「あたる」ということとは別なものである。「打つ」というのは、どのような打ち方でも、意識的に確実に打つことをいう。「あたる」というのは、進んでいったと

ころ、つきあたったという心持であり、非常につよくあたって、敵がたちまち死ぬほどであっても、これはあたりなのである。

打つというのは、意識的に打つことである。この点をよくよく調べてみなければならぬ。敵の手でも足でもあたるというのは、まずあたることである。それはあたってから強く打つためである。あたるとはさわるというほどのことである。よく習得するならば、これらは別々のことであることがわかる。工夫すべきである。

〔参考〕

⑫一　打と当ると云事

打とあたると云事、何れの太刀にてもあれ、うち所を慥(たしか)に覚え、ためし物など切る様に、おもふさま打つ事なり。又あたると云事は、慥なる打見えざる時、いづれなりともあたる事有り。あたるにも、つよきはあれど、うつにはあらず。敵の身にあたりても、太刀にあたりても、あたりはづしても不レ苦。真の打をせんとて、手足をおこしたつる心なり。能々工夫すべし。

〔付記〕

ここまでは太刀で敵を打つ技法が九項にわたって説かれており、それは武蔵の具体的な体験から説かれたものであって理論のための理論ではなく、まったく彼の体験から得られた技法であることを知るべきである。

とくに注目すべきは「敵の打つ縁により、身をばさきへうつ身になり、太刀は身にかまはず打つ所也」とあったりすることによって分かるように、捨て身の兵法が語られている。身体や腰は恐怖にかられて後ろにひくようになる。そうなると敵を斬ることはできないばかりか、自分が斬り殺されてしまう。

身を太刀よりも進めるつもりでやらなければ人は斬れない。合気道などでもまず敵の中に身体、とくに腰を十分に入れなければ技はかからないものである。

一　しうこうの身といふ事

秋猴の身とは、手を出さぬ心なり。敵へ入身に少しも手を出す心なく、敵打つ前、身をはやく入るる心也。手を出さんと思へば、必ず身の遠のくものなるによつて、惣身をはやくうつり入るる心なり。手にてうけ合はするほどの間には、身も入りや

すきもの也。能々吟味すべし。

〔訳文〕

秋猴（手の短い猿）の身とは、手を出さないという心持である。敵にわが身をよせていくとき、少しも手を出す心をもたず、敵が打つより早く、身をはやくよせていくことである。手を出そうと思えば、必ず身は遠のいてしまうものであるから、全身をすばやく敵によせてしまうことである。互に手がとどくほどの間合ならば、身をよせてしまうことも容易である。よくよく調べなければならぬ。

〔参考〕

㉙一　しうこうの身と云事

愁猴の身、敵に付く時、左右の手なき心にして、敵の身に付べし。悪敷すれば、身はのき、手を出す物也。手を出せば、身はのく者也。若左の肩かひな迄は、役に立べし。手先にあるべからず。敵に付く拍子は、前におなじ。

一　しつかうの身といふ事

漆膠とは、入身に能く付きてはなれぬ心也。敵の身に入る時、かしらをもつけ、身をもつけ、足をもつけ、つよくつく所也。人毎に顔足ははやくいれども、身のの くもの也。敵の身へ我身をよくつけ、少しも身のあひのなきやうにつくもの也。能々吟味有るべし。

〔訳文〕

漆膠の身とは、うるしとにかわでつけたように、敵の身にわが身を密着させて、離れぬことである。敵の身に近づくとき、頭も、身も、足も、すべてぴったりとよせつけるのである。たいていの人は、顔や足は早くよせつけても、とかく身だけは後に残るものである。敵の身にわが身をよくつけ、少しも身にすき間のないよう、つけるものである。よくよく検討すべきである。

〔参考〕

㉘一　しつかうのつきと云事

漆膠のつきとは、敵の身際へよりての事也。足腰顔迄も、透なく能つきて、漆膠にて物を付るにたとへたり。身につかぬ所あれば、敵色々わざをする事在り。敵に付く拍子、枕のおさへにして、静成る心なるべし。

一 たけくらべといふ事

たけくらべといふは、いづれにても敵へ入込む時、我身のちゞまざるやうにして、足をものべ、こしをものべ、くびをものべて、つよく入り、敵のかほとかほとならべ、身のたけをくらぶるに、くらべかつと思ふほど、たけ高くなつて、強く入る所、肝心也。能々工夫有るべし。

〔訳文〕

たけくらべというのは、どんな場合でも敵に身をよせるとき、わが身がちぢまないようにして、足も、腰も、くびも十分に伸ばし、敵の顔と自分の顔をならべ、背たけをくらべれば、自分の方が勝つと思うほどに、身を十分伸ばし、つよく寄ることが肝心である。よくよく工夫しなければならぬ。

〔参考〕

㉚一　たけくらべと云事

たけをくらぶると云事、敵のみぎはに付く時、敵とたけをくらぶる様にして、我身をのばして、敵のたけよりは、我たけ高く成る心、身ぎはへ付く拍子は、何も同意也。能々吟味有るべし。

〔訳文〕

一　ねばりをかくるといふ事

敵もうちかけ、我も太刀打ちかくるに、敵うくる時、我太刀敵の太刀に付けて、ねばる心にして入る也。ねばるは、太刀はなれがたき心、あまりつよくなき心に入るべし。敵の太刀につけて、ねばりをかけ入る時は、いか程も静かに入りてもくるしからず。ねばるといふ事と、もつるゝといふ事、ねばるはつよし、もつるゝはよわし。此事分別有るべし。

敵も打ちかけ、自分も打ちかけるときに、自分の太刀を敵が受けたとき、自分の太刀を敵の太刀につけて離れないような心もちで、身を入れていくことをいう。
ねばるとは、太刀が容易に離れぬようにする心もちであり、あまり強すぎない気持で入り込まねばならぬ。敵の太刀につけて、ねばりをかけて入りこむ時には、どれだけ静かに身を入れてもよい。ねばるということと、もつれるということとは違うことであり、ねばるのは強いが、もつれるのは弱い。このことを、よくわきまえよ。

一　身のあたりといふ事

身のあたりは、敵のきはへ入りこみて、身にて敵にあたる心也。少し我顔をそばめ、我左の肩を出し、敵のむねにあたる也。あたる事、我身をいかほどもつよくなりあたる事、いきあふ拍子にて、はずむ心に入るべし。此入る事、入りならひ得ては、敵二間も三間もはげのくほど、つよきもの也。敵死入るほどもあたる也。能々鍛練あるべし。

〔訳文〕

体あたりとは、敵のまぎわに入りこみ、身で敵にあたることである。自分の顔をややそむけ、自分の左の肩を出し、敵の胸にあたるのである。

あたるには、自分の身はできるだけ強くなってあたり、勢いをつけて、はずみ入るように、思い切って敵のふところに入ることである。こうして入ることに習練をつめば、敵を二間も三間もふっとばすほど強力となるものである。敵が死にそうになるまでにあたるものである。よくよく鍛錬せよ。

一　三つのうけの事

三つのうけといふは、敵へ入りこむ時、敵打出す太刀をうくるに、我太刀にて敵の目をつくやうにして、敵の太刀を我右のかたへ引きながしてうくる事、亦つきうけといひて、敵打つ太刀を、敵の右の目をつくやうにして、くびをはさむ心につきかけてうくる所、又敵の打つ時、短き太刀にて入るに、うくる太刀はさのみかまはず、我左の手にて、敵のつらをつくやうにして入りこむ、是三つのうけ也。左の手をにぎりて、こぶしにてつらをつくやうに思ふべし。能々鍛練有るべきもの也。

〔訳文〕

三つの受け方というのは、まず（第一には）敵に入っていく時、敵が打出す太刀を受けるのに自分の太刀で敵の目を突くようにし、敵の太刀を自分の右側にはずして受けるのである。（第二には）、突き受けといって、敵が打ってくる太刀を、敵の右の目をつくようにし、ちょうど敵の首をはさむような心もちで突きかけ、敵の太刀を受けるのである。（第三には）、敵が打ってくる時、短い太刀で入るときには、受ける太刀はそれほど気にせず、わが左の手で、敵の顔をつくようにして入りこむのである。

以上が三つの受け方であるが、いずれも左の手をにぎり、その拳で敵の顔をつくような気持でしなければならぬ。よくよく鍛錬せよ。

一　おもてをさすといふ事

面をさすといふは、敵太刀相になりて、敵の太刀の間、我太刀の間に、敵のかほを我太刀さきにてつく心に、常に思ふ所肝心也。敵の顔をつく心あれば、敵の顔、身も、のるもの也。敵をのらするやうにしては、色々勝つ所の利あり。能々工夫すべし。たゝかひの内に、敵の身のる心ありては、はや勝つ所也。それによつて、面

をさすといふ事、忘るべからず。兵法稽古の内に、此利、鍛練あるべきもの也。

〔訳文〕

顔を刺すというのは、敵味方の太刀が互角になったときに、たえず敵の顔を自分の刀の先で突く気持でいることが肝腎だというのである。敵の顔を突き刺そうという心があれば、敵は顔も体ものけぞるようになるものである。敵が顔や体をのけぞらせれば、いろいろと勝つ方策もある。よくよく工夫せよ。闘いの間に、敵が身をのけぞらすような状態になれば、もはや勝利である。従って顔を刺すということを忘れてはならない。兵法を稽古する間に、この有利なやり方をよく鍛練すべきである。

一　心をさすといふ事

心をさすといふは、戦のうちに、うへつまり、わきつまりたる所などにて、きる事いづれもなりがたき時、敵をつく事、敵のうつ太刀をはづす心は、我太刀のむねを直に敵に見せて、太刀さきゆがまざるやうに引きとりて、敵のむねをつく事也。

若し我くたびれたる時か、亦は刀のきれざる時などに、此儀専らもちゆる心なり。能々分別すべし。

〔訳文〕

心臓を刺すというのは、戦いのなかで、上がつかえ、わきもつかえているような所で、斬ることがどうしてもできないとき、敵をつくことである。

敵がうちかかってくる太刀をはずす呼吸は、わが太刀のみねを真直に敵に見せるように切先を下げ、太刀先がゆがまないよう引いておいて、敵の胸を突くことである。もし自分が疲れてきたとき、あるいは刀が切れないようなときには、この方法をもっぱら用いるようにする。よく分っていなければならぬ。

一　かつとつといふ事

喝咄といふは、いづれも、我打ちかけ、敵をおつこむ時、敵また打ちかへすやうなる所、したより敵をつくやうにあげて、かへしにて打つ事、いづれもはやき拍子を以て、喝咄と打ち、喝とつきあげ、咄とうつ心也。此拍子、何時も打あひの内に

は、専ら出合ふ事也。喝咄のしやう、きつさきあぐる心にして、敵をつくと思ひ、あぐると一度にうつ拍子、能く稽古して吟味あるべき事也。

〔訳文〕

「喝咄」とは、どれもこちらが打ちかかり、敵を押しこもうとするとき、敵が打ちかえしてくるところを、下から敵をつくように刀をあげ、かえす刀で打つことをいう。どちらも早い拍子で「喝咄」と打ち、「喝」と突きあげ、「咄」と打つ呼吸である。この拍子はいつも打合いの際には、よく出合うものである。

「喝咄」のやり方は、刀の切先をあげるようにして敵を突くと思い、刀をあげると同時に一気に打つ拍子である。よく稽古し、調べてみなければならないことである。

一　はりうけといふ事

はりうけといふは、敵と打合ふ時、とたん〱といふ拍子になるに、敵の打つ所を、我太刀にてはりあはせ打つ也。はり合はする心は、さのみきつくはるにあらず、亦うくるにあらず。敵の打つ太刀に応じて、打つ太刀をはりて、はるよりはやく敵

を打つ事なり。はるにて先をとり、打つにて先をとる所肝要也。はる拍子能くあへば、敵何とつよく打ちても、少しはる心あれば、太刀さきのおつる事にあらず。能く習ひ得て吟味有るべし。

〔訳文〕

はりうけとは、敵と打ちあうとき「どたどた」というように、拍子がかみあわなくなった状態になったならば、敵が打ってくるのを、わが太刀ではたいておいて、打つことである。はたくということは、さして強くはたくのでもなく、また受けるのでもない。敵が打ってくる太刀に応じて、太刀をはたき、はたくよりもはやく敵を打つことである。はたくことによって先手をとり、先手をとって打つことが肝腎である。はたく拍子が上手になると、敵がどんなに強く打っても、少しでもはたく気持ちさえあれば、こちらの太刀先がおちることはない。充分に習得して調べなければならぬ。

一　多敵のくらゐの事

多敵のくらゐといふは、一身にして大勢とたゝかふ時の事也。我刀わきざしをぬ

きて、左右へひろく、太刀を横にすてゝかまゆる也。敵は四方よりかゝるとも、一方へおひまはす心也。敵かゝるくらゐ、前後を見わけて、先へすゝむものに、はやくゆきあひ、大きに目をつけて、敵打出すくらゐを得て、右の太刀も左の太刀も、一度にふりちがへて、待つ事悪しし。はやく両脇のくらゐにかまへ、敵の出でたる所を、つよくきりこみ、おつくづして、其儘又敵の出でたる方へかゝり、ふりくづす心也。いかにもして、敵をひとへにうをつなぎにおひなす心にしかけて、敵のかさなると見えば、其儘間をすかさず、強くはらひこむべし。敵あひこむ所、ひたとおひまはしぬれば、はかのゆきがたし。又敵の出づるかた〳〵と思へば、待つ心ありて、はかゆきがたし。敵の敵の拍子をうけて、くづるゝ所をしり、勝つ事也。折々あひ手を余多よせ、おひこみつけて、其心を得れば、一人の敵も、十二十の敵も、心安き事也。能く稽古して吟味有るべき也。

〔訳文〕

多敵のくらいというのは、こちらは一人で大勢の敵とたたかうときのことである。わが太刀と脇差を抜いて、左右にひろげて持ち両脇に下げてかまえるのである。

敵が四方からかかってきても、一方へ追いまわす気持でたたかうのである。敵がかかってくるのを、どの敵が先に、どの敵が後にかかってくるか、その気配をよく見抜いて、先にかかってくるものとまずたたかい、全体の動きに目をくばり、敵が打ちかかってくる位置を心えて、左右の刀を一度にふりちがえるようにして斬るのである。太刀をふりちがえて、そのままに持つのはよくない。すばやく両脇の態勢にかまえ、敵が出てきたところを強く斬りこみ、おし崩して、そのまま敵が出てくるのに打ちかかり、おし崩していくことである。

何としても大切なことは、一方から魚群を追い込むような心持でかかり、敵の隊列がみだれて重なり合ったと見たら、そのまま、間をおかないで強く打ち込むのである。

敵がかたまっているところを真正面からまともに追いまわせば、はかがいかない。また、敵が出てきたところを打とうとすれば、こちらが後手になってはかがゆかない。敵の打ちかかる拍子を受けて、崩れるところを知り、勝利を得ることである。

折にふれて、相手を大勢よせあつめ、これを追いこむ方法に習熟して、その核心を得れば、一人の敵も、十人二十人の敵も、安心してたたかえるものである。よくよく稽古し、調べるべきである。

一　打あひの利の事

此うちあひの利といふ事にて、兵法、太刀にての勝利をわきまゆる所也。こまやかに書きしるすにあらず。能く稽古ありて、勝つ所をしるべきもの也。大形兵法の実の道を顕はす太刀也。口伝。

〔訳文〕

これは「打合いの利」ということで、太刀で勝ちをおさめる理を自得することである。細かには書き記せることではない。よくよく稽古して、勝利の道をしるべきものである。すべて兵法の真の道をあらわす太刀である。口伝である。

一　一つの打といふ事

此一つの打といふ心をもつて、慥に勝つ所を得る事也。兵法能くまなばざれば、心得がたし。此義能く鍛練すれば、兵法心の儘になって、思ふ儘に勝つ道也。能々稽古すべし。

〔訳文〕

この「一つの打ち」という心によって、確実に勝利を得ることである。しかし、これは兵法を十分に学ばなければ、その道を体得することはできない。このことを、よくよく鍛錬すれば兵法を心のままに行うことができるようになり、思うとおりに勝利を得ることができる。よくよく稽古すべきである。

一　直通(じきつう)のくらゐといふ事

直通(じきつう)の心、二刀一流の実(まこと)の道をうけて、伝ゆる所也。能々鍛練して、此兵法に身をなす事肝要(かんよう)也。口伝。

〔訳文〕

直通の心というのは、二刀一流の真実の極意(ごくい)をうけて伝えるものである。よくよく鍛錬して、この兵法の道を身につけることが肝要である。口伝である。

〔参考〕

㉟一　期をしる事

期をしると云事は、早き期を知り、遅き期を知り、のがるゝ期を知り、のがれざる期を知る。一流に直道と云極意の太刀あり。此事品々口伝なり。

右書付くる所、一流の剣術、大形此巻に記し置く事也。兵法、太刀を取りて、人に勝つ所を覚ゆるは、先づ五つのおもてを以て五法の構をしり、太刀の道を覚えて惣躰自由になり、心のきゝ出でて道の拍子をしり、おのれと太刀も手さえて、身も足も心の儘にほどけたる時に随ひ、一人にかち、二人にかち、兵法の善悪をしる程になり、此一書の内を、一ケ条〳〵と稽古して、敵とたゝかひ、次第〳〵に道の利を得て、不レ断心に懸け、いそぐ心なくして、折々手にふれては徳を覚え、いづれの人とも打合ひ、其心をしつて、千里の道もひと足宛はこぶなり。緩々と思ひ、此法をおこなふ事、武士のやくなりと心得て、けふはきのふの我にかち、あすは下手にかち、後は上手に勝つとおもひ、此書物のごとくにして、少しもわきの道へ心のゆかざるやうに思ふべし。縦ひ何程の敵に打ちかちても、ならひに背く事においては、実の道にあるべからず。此利心にうかべては、一身を以て数十人にも勝つ心のわき

まへあるべし。然る上は、剣術の智力にて、大分一分の兵法をも得道すべし。千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とす。能々吟味有るべきもの也。

正保二年五月十二日　　新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年

二月五日　　寺尾夢世勝延（花押）

山本源介殿

〔訳文〕

右に書き記したのは、二天一流の剣術の大体を、この巻にのべたものである。

兵法にあって、太刀をとり、相手に勝つ道を会得するには、まず、五つの基本型で五方のかまえを知り、太刀のつかい方をおぼえて、全身がやわらかになり、心のはたらきが機敏となり、兵法の拍子がわかるようになり、ひとりでに太刀の使い方も冴えて、身も足も、思うがままに円滑に働き、自由自在になる。それにしたがって、一人に勝ち、二人に勝ち、兵法における善悪がわかるようになり、この書物の内容を、一ヵ条、一ヵ条と稽古して、敵とた

たかい、次第次第に兵法の道理を会得するのである。このことを、いつも心がけながら、しかも急ぐ気持はなく、折にふれてたたかって見てはそのこつをおぼえ、どんな人とも打合って、相手の心を知っておくのである。

千里の道も一歩ずつ運ぶのである。ゆっくりと気長にとりくみ、この兵法の道を修行することは、武士のつとめであると心得て、今日は昨日の自分に勝ち、明日は自分より下手なものに勝ち、次には、自分より上手なものに勝つと思い、この書物のとおりに鍛錬をつみ、少しもわき道に心を動かされぬように考えよ。

たとえ、どんな敵に打ち勝っても、師の教えに反するような勝ち方では、それは本当の兵法ということはできない。この道理を会得することができるならば、一人で数十人の敵にも勝つ心得が分かるはずである。

そうなれば、あとは剣術の知識と実践によって、多人数のときも、一人どうしの闘いのことも、会得することができるであろう。千日の稽古を鍛といい、万日の稽古を錬というのである。よくよく調べるべきことである。

正保二年五月十二日　　　　　　　　新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年

二月五日

山本源介殿

寺尾夢世勝延（花押）

火之巻

火之巻

二刀一流の兵法、戦の事を、火におもひとつて、戦勝負の事を火の巻として、此巻に書顕はす也。先づ世間の人毎に、兵法の利をちひさく思ひなして、或はゆびさきにて、手くび五寸三寸の利をしり、或は扇をとつて、ひぢよりさきの先後のかちをわきまへ、又はしなひなどにて、わづかのはやき利を覚え、手をきかせならひ、足をきかせならひ、少しの利のはやき所を専とする事也。我兵法において、数度の勝負に一命をかけて打合ひ、生死二つの利をわけ、刀の道をおぼえ、敵の打つ太刀の強弱をしり、刀のはむねの道をわきまへ、敵を打果す所の鍛練を得るに、ちひさき事、よわき事、思ひよらざる所也。殊に六具かためてなどの利に、ちひさき事思ひ出づることにあらず。更には命をばかりの打あひにおいて、一人して五人十人ともたゝかひ、其勝つ道を慥に知る事、わが道の兵法也。然るによつて、一人して十人にかち、千人をもつて万人に勝つ道理、何の差別あらんや。能々吟味有るべし。さりながら、常々の稽古の時、千人万人を集め、此道しならふ事、成る事にあらず。

独り太刀をとつても、其敵々の智略をはかり、敵の強弱、手だてをしり、兵法の智徳を以て、万人に勝つ所を極め、此道の達者と成り、我兵法の直道、世界において誰か得ん、又いづれかきはめんと慥に思ひとつて、朝鍛夕練して、みがきおほせて後、独り自由を得、おのづからきどくを得、通力不思議有る所、是兵として法をおこなふ息也。

〔訳文〕

二刀一流の兵法において、戦いのことを火の勢いに見立てて、勝負に関することを火の巻として、この巻に書きあらわすものである。

世に兵法者といわれるものは、誰も彼も、兵法の用きを、末梢的な技巧にのみ走って、あるものは指先の用きで手くびの五寸、三寸ほどの用きを知り、あるものは扇をもって、ひじから先の前後の勝負を心得、または竹刀などでわずかに早い技をおぼえて、手や足のうごきを練習し、小手先の器用さだけを得ようとしている。

わが兵法にあっては、数度の勝負に命をかけて打合い、死ぬか生きるかの道理を知り、刀の道すじをおぼえ、敵の打つ太刀の強弱を知り、太刀すじをわきまえ、敵を打ち倒す鍛錬を

しようというのに、このような小手先だけの小さな弱々しい技では、とうてい問題にならないところである。とくに六具(甲冑に付属する六種の武具)に身を固めた実戦の場などでは、小さな小手先によることなどは考えることもできない。

さらに、命がけの戦いで、一人で五人、十人ともたたかい、確実に勝利する道を知ることが、わが兵法なのである。従って、一人で十人に勝つことも、千人で万人に勝つことも、何らのちがいはない道理である。よくよく調べなければならぬ。

しかしながら、ふだんの稽古のときに、千人も万人もあつめて、戦いの訓練をすることは、できるものではない。たとえ一人で太刀をとっても、そのとき、そのときの敵の計略(けいりゃく)を見ぬき、敵の強弱や手段を知り、兵法の知恵の力をもって、万人に勝つところをきわめ、この道の達人となることができるのである。

わが二天一流の兵法の正しい道をこの世において誰が得られようか。自分はいずれもきわめようと確信して、朝に夕に鍛錬をつみ、技をみがきつくして後に、ひとり思うままとなり、自然に奇特な力を得て、自由自在の神妙な力をもつことができるようになるのである。これが武士として兵法を修行する心意気である。

一　場の次第といふ事

場のくらゐを見わくる所、場において日をおふといふ事有り、日をうしろになしてかまゆる也。若し所により、日をうしろにする事ならざる時は、右のわきへ日をなすやうにすべし。座敷にても、あかりをうしろ、右脇となす事同前也。うしろの場つまらざるやうに、左の場をくつろげ、右のわきの場をつめてかまへたき事也。夜るにても敵のみゆる所にては、火をうしろにおひ、あかりを右脇にする事、同前と心得てかまゆべきもの也。敵をみおろすといひて、少しも高き所にかまゆるやうに心得べし。座敷にては上座を高き所とおもふべし。扨戦になりて、敵を追廻す事、我左の方へ追ひまはす心、難所を敵のうしろにさせ、いづれにても難所へ追掛くる事肝要也。難所にて、敵に場を見せずといひて、敵に顔をふらせず、油断なくせりつむる心也。座敷にても、敷居・鴨居・戸障子・縁など、亦柱などの方へ追ひつむるにも、場をみせずといふ事同前也。いづれも敵を追懸くる方、足場のわるき所、亦は脇にかまひの有る所、いづれも場の徳を用ゐて、場のかちを得るといふ心専にして、能々吟味し鍛練有るべきもの也。

〔訳文〕

場とりの良否を見わけることが大切である。位置をしめるのに、太陽を背にするということがある。太陽をうしろにおいてかまえるのである。もし、その場所によって、太陽をうしろにすることができないようなときは、太陽を右のわきにおくようにせよ。

座敷のなかでも、あかりをうしろ、または右わきにすることは、これと同様である。また、自分のうしろがつかえてしまわぬように、左側をひろくゆとりのあるようにし、右のわきをつめてかまえたいものである。夜でも敵が見えるところならば、火をうしろに背負い、あかりを右わきにすること、同様に心得てかまえるべきである。

敵を見下すといって、少しでも高いところでかまえるように心得よ。座敷においては上座を高いところと思わなければならない。さて、戦いとなり、敵を追いまわす場合には、敵を自分の左の方へと追いまわす気持で、難所が敵のうしろにくるように、どうしても難所の方へと追いかけることが肝要である。敵が難所において、場の位置を見る余裕を与えず、敵がまわりを見まわすことのできないように、油断なく追いつめていくのである。座敷においても、敷居、鴨居、戸障子、縁、あるいは柱などの方に追いつめるのに、敵にまわりを見させないということでは同様である。

どのようなときにも、敵を追いかけるのに、足場のわるいところ、あるいはそばに障害物のあるところなど、すべてその位置の優位さを生かして、場所の上で勝利を得るということが大切なのである。よくよく調べ鍛錬しなければならない。

一　三つの先といふ事

三つの先、一つは我方より敵へかゝるせん、けんの先といふ也。亦一つは敵より我方へかゝる時の先、是はたいの先といふ也。又一つは我もかゝり、敵もかゝりあふ時の先、躰〳〵の先といふ。是三つの先也。いづれの戦初めにも、此三つの先より外はなし。先の次第を以て、はや勝つ事を得る物なれば、先といふ事、兵法の第一也。此先の子細様々ありといへども、其時の理を先とし、敵の心を見、我兵法の智恵を以て勝つ事なれば、こまやかに書きわくる事にあらず。第一、懸の先、我かゝらんとおもふとき、静かにして居り、俄にはやくかゝる先、うへをつよくはやくし、底を残す心の先、又我心をいかにもつよくして、足は常の足に少しはやく、敵のきはへよるとはやくもみたつる先、亦心をはなつて、初中後、同じ事に敵をひしぐ心にて、底迄つよき心に勝つ、是いづれも懸の先也。第三、待の先、敵我方へかゝり

くる時、少しもかまはず、よわきやうに見せて、敵ちかくなつて、ずんとつよくはなれて、飛付くやうに見せて、敵のたるみを見て、直につよく勝つ事、是一つの先、又敵かゝりくる時、我も猶つよくなつて出る時、敵のかゝる拍子のかはる間をうけ、其儘勝を得る事、是待の先の理也。第三、躰〳〵の先、敵はやくかゝるには、我静かにつよくかゝり、敵近くなつて、づんと思ひきる身にして、敵のゆとりのみゆる時、直につよく勝つ、又敵静かにかゝる時、我身うきやかに、少しはやくかゝりて、敵ちかくなりて、ひともみもみ、敵の色に随ひ、つよく勝つ事、是躰〳〵の先也。此儀濃やかに書分けがたし。此書付をもつて、大形工夫有るべし。此三つの先、時にしたがひ理に随ひ、いつにても、我方よりかゝる事にはあらざるものなれども、同じくは我方よりかゝりて、敵をまはし度き事也。いづれも先の事、兵法の智力を以て、必ず勝つ事を得る心、能々鍛練あるべし。

〔訳文〕

先手をとるのに三つの場合がある。

一つは、わが方から敵にかかっていく場合の先手のとり方、これを「けんの先」しかける

先手という。
一つは敵がかかってきた場合の先手のとり方、これを「たいの先」待ってとる先手という。
一つはわが方からもかかり、敵からもかかってくる場合の先手のとり方、これを「躰々の先」という。
これが三つの場合であって、どの戦いでもその最初は、この三つの先手よりほかはない。「先」のとり方によって、はやくも勝利を収めたと同然であるから、この「先」ということが兵法の第一に大切なことである。この「先」の内容にはさまざまあるが、どの先をとるかは、その時々の理に適っているものを第一とし、敵の意図を見ぬき、わが兵法の智恵によって勝つのであるから、細かに書きわけることはできない。
第一、懸の先。自分からかかっていこうと思うとき、静かなままでいて、にわかにすばやくかかっていく手がある。また、身の動きを強く、早くしながらも、心に余裕をのこす先手がある。また、自分の心をたいへん強くし、足は、常の足よりやや早い程度で、敵に近づくや否や、一気にはげしく攻めたてる手がある。また、心の乱れを払って、最初から最後まで、一貫して敵をひしぐ意気ごみで、あくまで強い心で勝つ手がある。これらはいずれも「懸の先」である。

第二に「待の先」。敵がこちらへかかってくるとき、少しもかまわず、弱いように見せかけ、敵が近づいてきたならば、ぐんと大きく離れて、とびのくように見せて、敵がたるむのを見て、一気につよく出て勝つこと、これが一つ。また敵がかかってくるとき、自分もさらに強く出て、敵がかかってくる拍子がかわったところにつけこみ、そのまま勝をしめること、これが「待の先」の道理である。

第三に「躰々の先」。敵がすばやくかかってくるときには、こちらは静かに、つよくかかり、敵が近づいたところで、ひょいと思いきった態勢になり敵のたるみが見えるとき、一気に強くせめ、勝をしめるのである。また、敵が静かにかかってくるときには、わが身を浮かして、やや早くかかり、敵が近くなったところで一もみもみ、敵のようすにしたがって、つよくかかり、勝をしめること、これが躰々の先(せん)である。

これらのことは、くわしく書きわけることができないので、この書物にのべたところで、十分に工夫してもらいたい。これら三つの先については、そのときの事情や、利を得ることから判断するので、いつでも自分からかかっていくというものではないが、できることなら、自分からかかり、敵をひきまわして、あしらって勝ちたいものである。

先手というのは、どのような場合であろうと、兵法の智力によって、必ず勝を得るという

ことであるから、よくよく鍛錬しなければならぬ。

〔参考〕

⑬一　三ツの先と云事

三ツの先と云は、一ツには、我敵の方へかゝりての先也。二ツには、敵我方へかかる時の先也。又三ツには、我も懸り、敵も懸る時の先也。是三ツの先なり。我かゝる時の先は、身は懸る身にして、足と心を中に残し、たるまず、はらず、敵の心を動かす。是懸の先也。又敵懸り来る時の先は、我身に心なくして、程近き時、心をはなし、敵の動きに随ひ、其儘先に成べし。又互に懸り合ふ時、我身をつよく、ろくにして、太刀にてなり共、身にて成共、足にて成共、心にて成共、先になるべし。先を取る事肝要也。

一　枕をおさゆるといふ事

枕をおさゆるとは、かしらをあげさせずといふ心也。兵法勝負の道にかぎつて、人に我身をまはされてあとにつく事悪しし。いかにもして敵を自由にまはし度き事なり。然るによつて、敵もさやうに思ひ、我も其心あれども、人のする事をうけが

はずしては叶ひがたし。兵法に、敵の打つ所をとめ、つく所をおさへ、くむ所をもぎはなしなどする事也。枕をおさゆるといふは、我実の道を得て敵にかゝりあふ時、敵何ごとにてもおもふ気ざしを、敵のせぬ内に見知りて、敵のうつといふうつのうの字のかしらをおさへて、跡をさせざる心、是枕をおさゆる心也。たとへば、敵のかゝるといふかの字をおさへ、とぶといふとの字のかしらをおさへ、きるといふきの字のかしらをおさゆる、みなもつておなじ心なり。敵我にわざをなす事につけて、役にたゝざる事をば敵にまかせ、役に立つほどの事をばおさへて、敵にさせぬやうにする所、兵法の専也。是も敵のする事を、おさへん〱とする心、後手也。先づ我は何事にても道にまかせてわざをなすうちに、敵もわざをせんとおもふかしらをおさへて、何事も役にたゝせず、敵をこなす所、是兵法の達者、鍛練の故也。枕をおさゆる事、能々吟味有るべき也。

〔訳文〕

「枕をおさえる」とは、「頭を上げさせない」ということである。兵法、勝負の道においては、相手に自分をひきまわされ、後手にまわることはよくない。何としても敵を思いのままにひ

きまわしたいものである。

　したがって相手もそのように思い、自分もその気があるわけであるが、相手の出方を察知することができなくては、先手をとることはできない。

　兵法において、敵が打つのを止め、突くのをおさえ、組み付いてくるところをもぐようにひきはなしなどすることである。枕をおさえるというのは、自分が兵法の要諦を心得て敵に向いあうとき、敵がどんなことでも思う意図を、事前に見破って、敵が打とうとするならば、「うつ」の「う」という字の最初でくいとめ出鼻をくじき、その後をさせないという意味であり、それが「枕をおさゆる」ということである。たとえば敵がかかろうとすれば、「か」の字でくいとめ、とぼうとすれば「と」の字でくいとめ、きろうとすれば「き」の字の最初でおさえていくことで、皆な同じことである。敵が自分にわざをしかけてきたとき、役に立たないことは敵のなすままにまかせ、肝腎のことをおさえて、敵にさせないようにするのが、兵法においてとくに重要である。

　これも、敵のすることを、おさえよう、おさえようと思うのは後手である。まず、こちらはどんなことでも兵法の道にまかせて技を行いながら、敵もわざをなそうとする、その出鼻をおさえ、敵のどんな企図も一切役にたたないようにし、敵を自由に引き廻すことこそ、真

の兵法の達人であるということができる。これはただ鍛錬の結果なのである。枕をおさえるということを、よくよく調べなければならぬ。

〔参考〕

㉓一　枕の押へと云事

枕のおさへとは、敵太刀打出さんとする気ざしをうけ、うたんとおもふ、うの字のかしらを、空よりおさゆる也。おさへやう、心にてもおさへ、身にてもおさへ、太刀にてもおさゆる物也。此気ざしを知れば、敵を打に吉、入るに吉、はづすに吉、先を懸るによし。いづれにも出合ふ心在り。鍛錬肝要也。

〔付記〕

何ごとも先手を打つということが大切である。後手に廻ったならばおくれをとることは人生の勝負においてもしばしば見られることである。「機先を制す」という言葉があるが、兵法だけでなくどんな仕事をする場合にも先手に廻ることは必要なのである。

禅宗の問答などにもこれと似たような例はいくつもある。たとえば『臨済録』には、つぎ

のようなやりとりがある。

　上堂。云く、赤肉団上に一無位の真人有り。常に汝等諸人の面門より出入す。未だ証拠せざる者は看よ看よ。時に、僧有り、出でて問ふ、如何なるか是れ無位の真人。師、禅牀を下つて把住して云く、道へ道へ。其の僧擬議す。師托開して云く、無位の真人是れ什麼の乾屎橛ぞ、といつて便ち方丈に帰る。

　この内容はどういうことかというと、上堂して臨済が言った。「この赤肉団上に一無位の真人がいて、常にお前たちの面門を出たり入ったりしている。まだこの真人を見届けていない者は、さあ看よ！　さあ看よ！」と。

　その時、ひとりの僧が進み出て問うた。「その無位の真人とは、いったい何者ですか」と。臨済はいきなり席を下りて、僧の胸倉をつかまえ、「さあ言え！　さあ言え！」とやった。その僧は擬議した。臨済は僧を突き放して「これでは無位の真人もかわいた糞同然ではないか」と言って、そのまま居間に帰ってしまった。このやりとりには一瞬の停滞なく、臨済はまさしく先手、先手をとったのである。

一　とをこすといふ事

渡を越すといふは、縦へば、海を渡るに瀬戸といふ所もあり、亦は、四十里五十里とも長き海を越す所を渡といふ也。人間の世を渡るにも、一代の内には、とをこすといふ所多かるべし。舟路にして、其との所を知り、舟の位を知り、日なみを能知りて、友舟は出さず共、其時の位を受け、或はひらきの風にたより、或は追風をも受け、若しかぜ替りても、二里三里はろかずをもつても、湊に着くと心得て、舟を乗りとり、渡を越す所也。其心を得て、人の世を渡るにも、一大事にかけて渡をこすと思ふ心有るべし。兵法、戦の内にも、とをこす事肝要なり。敵の位を受け、我身の達者を覚え、其理を以てとをこす事、よき船頭の海路を越すと同じ。渡を越しては亦心安き所也。渡をこすといふ事、敵によわみをつけ、我身も先になりて、大形はや勝つ所也。大小の兵法のうへにも、とをこすといふ心肝要なり。能々吟味あるべし。

〔訳文〕

「渡」を越すというのは、たとえば海をわたるのに、瀬戸（幅の狭い海峡で航行の難所）と

いうところもあり、また四十里、五十里の長い海上をわたるのをも「渡」というように、難所（危機）を乗りきるというほどの意味である。人が世の中をわたるにしても、一生のうちには、危機をこえるという場合も多いであろう。

舟路にあっては、その「渡」のところを知り、舟の位置を知り、日のよしあしをよく知って、伴舟は出さなくともひとりで出航し、その時々の状況に応じて、あるいは横風にたより、あるいは追風を受け、もし風向きがかわっても、二里や三里は風に頼らず櫓をこいでも港に着く気で舟を乗りこなし、「渡」をこすのである。

世の中を渡るにもこのような心がけによって、全力をつくして危機を乗りこえるということがなければならぬ。

兵法、戦いのときにも、「渡」をこす気持ちが大切である。敵の程度を知り、自分の能力を正しく判断して、兵法の道理によって、危機を乗りきるということは、すぐれた船頭が海を渡るのと同様である。

危機を乗りきれば、そのあとは心配ないものである。渡を越したことによって、敵に弱味を生じさせ、わが身は優位にたつことができ、たいていの場合、はやばやと勝を得ることができる。多人数の戦いのうえでも、一対一の勝負のうえでも「渡」をこすというのは大切な

ことである。よくよく調べなければならぬ。

〔参考〕

⑭一　渡を越すと云事

敵も我も互にあたる程の時、我太刀を打懸て、との内こされんとおもはゞ、身も足もつれて、身際へ付べき也。とをこして、気遣はなき物也。此類、跡先の書付にて、能々分別有るべし。

一　けいきを知るといふ事

景気を見るといふは、大分の兵法にしては、敵のさかえおとろへを知り、相手の人数の心を知り、其場の位を受け、敵のけいきを能く見うけ、我人数何としかけ、此兵法の理にて慥に勝つといふ所をのみこみて、先の位をしつてたゝかふ所也。又一分の兵法も、敵のながれをわきまへ、相手の人柄を見うけ、人のつよきよわき所を見つけ、敵の気色にちがふ事をしかけ、敵のめりかりを知り、其間の拍子をよくしりて、先をしかくる所肝要也。物毎の景気といふ事は、我智力つよければ、必ず

みゆる所也。兵法自由の身になりては、敵の心をよく計りて勝つ道多かるべき事也。工夫有るべし。

〔訳文〕

「景気を見る」というのは、大勢の戦いにあっては、敵の意気がさかんか、あるいは衰えているかを知り、相手の人数のことを知り、その場の状況に応じて、敵の状態をよく見て、こちらの人数をどう動かし、この兵法を使うことによって、確実に勝てるというところを呑みこみ、先の状況を見とおして戦うことをいうのである。

　また一対一の戦いにあっても、敵の流派をわきまえ、相手の性質をよく見て、その人の長所短所を見わけて、敵の意表をつき、まったく拍子のちがうように仕掛け、敵の調子の上下を知り、間の拍子をよく知って、先手をとってゆくことが重要である。

　物ごとの「景気」ということは、自分の智力さえすぐれていれば、必ず見えるものである。兵法を自由にこなせれば、敵の心のうちをよく推しはかって、勝をしめる手段を多く見出すことができるはずである。十分に工夫すべきである。

〔参考〕

㉔一　景気を知ると云事

景気を知ると云は、其場の景気、其敵の景気、浮沈、浅深、強弱の景気、能々見知べき者也。いとかねと云は、常々の儀、景気は即座の事なり。時の景気に見受ては、前向てもかち、後向てもかつ。能々吟味有べし。

一　けんをふむといふ事

剣をふむといふ心は、兵法に専ら用ゐる儀なり。先づ大きなる兵法にしては、弓・鉄炮においても、敵我方へうちかけ、何事にてもしかくる時、敵の弓・鉄炮にてもはなしかけて、其あとにかゝるによつて、又弓をつがひ、亦鉄炮にくすりこみて、かゝりこむ時、こみ入りがたし。弓・鉄炮にても、敵のはなつ内に、はやかゝる心也。はやくかゝれば、矢もつがひがたし。鉄炮もうち得ざる心也。物毎を敵のしかくると、其儘其理を受けて、敵のする事を踏みつけて勝つ心なり。亦一分の兵法も、敵の打出す太刀のあとへうてば、とたん〳〵となりて、はかゆかざる所也。敵の打出す太刀は、足にてふみ付くる心にして、打出す所をかち、二度めを敵の打得ざる

やうにすべし。踏むといふは、足には限るべからず、身にてもふみ、心にても踏み、勿論太刀にてもふみ付けて、二のめを敵によくさせざるやうに心得べし。是則ち物毎の先の心也。敵と一度にといひて、ゆきあたる心にてはなし、其儘あとに付く心なり。能々吟味有るべし。

〔訳文〕

剣をふむということは、もっぱら兵法において用いるものである。

まず大勢の戦いでは、敵が弓、鉄砲を用いて、こちらへうちかけ、どんなことでもしかけてくるときには、敵はまず弓、鉄砲をうちかけて、そのあとから攻めかかるのであるから、こちらもまた弓をつがえ、鉄砲に火薬をつめていては、敵にかかっていくとき、敵陣に押し入ることができない。

このような場合、敵が弓、鉄砲などを放つうちに、いち早く攻め入るように心掛けよ。早くかかれば、敵は弓の弦に矢をあてがうことも、鉄砲をうつこともできない道理である。物ごとを敵が仕掛けてくるところを、そのまま自然に受けとめ、敵の攻撃をふみつけて勝つことである。

一対一の戦いでも、敵がうち出す太刀のあとを打てば「とたん、とたん」という拍子になって、進度がおそくなる。敵が打ちかけてくる太刀を、足でふみつける気持で、打ちかけるところを打ち、二度目を打ちかけることができないようにせよ。

踏むというのは、足でふむだけではない。体でもふみ、心でもふみ、もちろん太刀によってもふみつけて、二度目を敵にさせないように心がけよ。これがすなわち、物ごとの先をとるということである。敵の仕掛けるのと同時に、ぶつかるということではなく、そのまま、あとにとり付くことである。よくよく調べるべきである。

〔参考〕

⑰一　剣を踏むと云事

太刀の先を足にてふまゆると云心也。敵の打懸る太刀の落つく処を、我左の足にてふまゆる心也。ふまゆる時、太刀にても、身にても、心にても、先を懸れば、いかやうにも勝つ位なり。此心なければ、とたんとたんとなりて、悪敷事也。足はくつろぐる事もあり。剣をふむ事度々にはあらず。能々吟味在るべし。

〔付記〕

このなかで「踏むといふは、足には限るべからず、身にてもふみ、心にても踏み、勿論太刀にてもふみ付けて、二のめを敵によくさせざるやうに心得べし。是則ち物毎の先の心也」と言っているのは重要である。敵の身に踏みこむ場合、足と身体と心と太刀を一丸として踏みこまねばならない。太刀だけでふみこんでも人を斬ることはできない。太刀を生かすのは足であり、身体であり、心なのである。禅では身心一如ということをいうが、まさしくこの身心一如でなければ人は斬れないのである。

一　くづれを知るといふ事

崩といふ事は、物毎ある物也。其家のくづるゝ、身のくづるゝ、敵のくづるゝ事も、時のあたりて、拍子ちがひになりてくづるゝ所也。大分の兵法にしても、敵のくづるゝ拍子を得て、其間をぬかさぬやうに追ひたつる事肝要也。くづるゝ所のいきをぬかしては、たてかへす所有るべし。又一分の兵法にも、戦ふ内に、敵の拍子ちがひてくづれめのつくもの也。其ほどを油断すれば、又たちかへり、新敷なりて、はかゆかざる所也。其くづれめにつき、敵のかほたてなほさざるやうに、慥に追ひ

かくる所肝要也。追懸くるは直につよき心也。敵たてかへさゞるやうに打ちはなすもの也。打ちはなすといふ事、能々分別有るべし。はなれざればしだるき心有り。工夫すべきもの也。

〔訳文〕

崩れということは、何ごとについてもあるものである。家が崩れるのも、身が崩れるのも、敵が崩れることも、みなその時にあたって、拍子が狂ってしまって崩れるのである。

多人数の戦いにおいても、敵が崩れる拍子をつかまえて、その間を取り逃さないように追い立てることが肝腎である。崩れる間をはずしてしまえば、もり返す場合もあろう。

また一対一の兵法においても、戦っているうちに、敵の拍子が狂って崩れ目が出てくるものである。そのとき、油断すれば、敵はまた立ちなおり、新しい態勢となって、どうにもゆかなくなるものである。

敵の崩れ目をつき、立ちなおることができないように、確実に追いうちをかけることが大切である。追いうちをかけるとは、一気に強くうつことである。敵が立ちなおれないように打ちはなすものである。この打ちはなすということを、よくよく理解しなければならない。

打ちはなさなければ、ぐずぐずしがちになる。工夫すべきである。

一　敵になるといふ事

敵になるといふは、我身を敵になり替へて思ふべきといふ所也。世中をみるに、ぬすみなどして家の内へ取籠るやうなるものをも、敵をつよく思ひなすもの也。敵になりておもへば、世中の人を皆相手とし、にげこみて、せんかたなき心なり。取籠るものは雉子也、打果しに入る人は鷹也。能々工夫あるべし。大きなる兵法にしても、敵をいへば、つよく思ひて、大事にかくるもの也。よき人数を持ち、兵法の道理を能く知り、敵に勝つといふ所をよくうけては、気遣すべき道にあらず。一分の兵法も、敵になりておもふべし。兵法よく心得て、道理つよく、其道達者なるものにあひては、必ずまくると思ふ所也。能々吟味すべし。

〔訳文〕

「敵になる」というのは、わが身を敵の身になりかわって、考えることをいうのである。

世の中を見ると、たとえば盗人などが家の中に立てこもったのを、非常に強い敵のように

考えがちである。敵の身になって見れば、世の中の人をみな相手とし、逃げこんで、自分ではどうにもならない、進退きわまった気持になっているのである。

たてこもっているものは雉子であり、打ちとりに入りこんでいくものは鷹である。このことをよく工夫すべきである。

多人数の戦いにおいても、敵は強いものと思いこんで、大事をとって消極的になるものである。しかし、よい人数をもち、兵法の道理をよく知り、敵にうち勝つところをよく心得ていれば、心配すべきことではない。

一対一の兵法においても、敵の身になって思うて見よ。兵法をよく心得て、剣理にも明るく、武道にすぐれているものにあっては、必ず負けると思うものである。よくよく工夫すべきである。

〔参考〕

㉕一　敵に成ると云事

我身、敵にしておもふべし。或は一人取籠るか、又は大敵か、其道達者なる者に会ふか、敵の心の難レ堪をおもひ取べし。敵の心の迷ふをば知らず、弱きをも強とおもひ、道不達

者なる者も達者に見なし、小敵も大敵と見ゆる、敵は利なきに利を取付る事在り。敵に成て能く分別すべき事也。

一　四手をはなすといふ事

四手をはなすとは、敵も我も同じ心に、はりやふ心になつては、戦のはかゆかざるもの也。はりやふ心になるとおもはゞ、其儘心をすてゝ、別の利にて勝つ事をしる也。大分の兵法にしても、四手の心にあれば、果敢ゆかず、人のそんずる事也。はやく心をすてゝ、敵のおもはざる利にて勝つ事専也。亦一分の兵法にても、四手になるとおもはゞ、其まゝ心をかへて、敵の位を得て、各別替りたる利を以て、かちをわきまゆる事肝要也。能々分別すべし。

〔訳文〕

「四つ手をはなす」というのは、敵もわれも同じ気持ちとなり、互に張り合う状態になっては、戦いははかどらなくなるので、張り合うようになったと思えば、そのままの状態を捨てて、別の方法で勝つことを知れ、というのである。

多人数の戦いにあっても、四つに張り合う状況になっては、決着がつかず、味方の人員を多く失うものである。こういう場合には、早く転心して、敵の意表をつくような方法で勝つことが最も大切である。

また、一対一の兵法にあっても、四つ手になったと思ったら、そのまま、状況をかえて、敵の様子を見て、いろいろと変った手段で勝利を得ることが肝腎である。よくよく考えなさい。

〔参考〕

⑳一　弦をはづすと云事

弦をはづすとは、敵も我も心ひつぱる事有り。身にても、太刀にても、足にても、心にても、はやくはづす物也。敵おもひよらざる処にて、能々はづるゝ物也。工夫在るべし。

一　かげをうごかすといふ事

陰をうごかすといふは、敵の心の見えわかぬ時の事也。大分の兵法にしても、何とも敵の位の見わけざる時は、我かたよりつよくしかくるやうに見せて、敵の手だ

てをみるもの也。手だてをみては、各別の利にて勝つ事やすき所也。亦一分の兵法にしても、敵うしろに太刀を構へ、わきにかまへたるやうなる時は、ふつとうたんとすれば、敵思ふ心を太刀に顕はす物也。あらはれしるゝにおいては、其儘利を受けて、慥にかちしるべきもの也。ゆだんすれば、拍子ぬくるもの也。能々吟味あるべし。

〔訳文〕

「かげを動かす」というのは、敵の心中の動きが見分けられない場合の方法である。

多人数の戦いにあっても、何としても敵の状況が分からないときには、こちらから強くしかけるように見せて、敵の手段を見分けるものである。手段がわかれば、いろいろな方法で勝つことはたやすいことである。

また、一対一の戦いにおいても、敵がうしろに太刀をかまえたり、わきにかまえたりしたとき、不意に打とうとすれば、敵はその意図を太刀にあらわすものである。敵の意図があらわれ、知れたときには、こちらはそれに応じた方法をとって確かに勝利をしめることができる。こちらが油断すれば拍子をはずしてしまうものである。よく調べなければならぬ。

〔参考〕

⑲一　影を動かすと云事

影は陽のかげ也。敵太刀をひかへ、身を出して構ふ時、心は敵の太刀をおさへ、身を空にして、敵の出たる処を、太刀にてうてば、かならず敵の身動出すなり。動出れば、勝つ事やすし。昔はなき事也。今は居付心を嫌て、出たる所を打也。能々工夫有るべし。

一　かげをおさゆるといふ事

影をおさゆるといふは、敵のかたよりしかくる心のみえたる時の事なり。大分の兵法にしては、敵のわざをせんとする所を、おさゆるといひて、わが方より其利をおさゆる所を、敵につよく見すれば、つよきにおされて、敵の心かはる事也。我も心をちがへて、空なる心より先をしかけて勝つ所也。一分の兵法にしても、敵のおこるつよき気指を、利の拍子を以てやめさせ、やみたる拍子に我勝利をうけて、先をしかくるもの也。能々工夫有るべし。

〔訳文〕

「かげをおさえる」というのは、敵の方からかかってくる意図が見えたときの方法である。

多人数の戦いにあっては、敵が戦法をしかけてこようとするところを、こちらから、その戦法をおさえる調子を強く見せれば、敵は強い態度に押されて、やり方をかえるものである。こちらも戦法をかえて、虚心(きょしん)に敵の先手をとり、勝をえるのである。

一対一の戦いにおいても、敵から生じる強い気を、わが拍子によっておさえ、くじけた拍子にこちらは勝利を見出し、先手をとっていくのである。よくよく工夫しなければならぬ。

〔参考〕

⑱一　陰を押ゆると云事

陰(いん)のかげをおさゆると云事、敵の身の内を見るに、心の余りたる処もあり、不足の処も在り。我太刀も、心の余る処へ、気を付る様にして、たらぬ所のかげに、其儘(そのまま)つけば、敵拍子まがひて、勝能き物也。されども、我心を残し、打処を不レ忘所肝要なり。工夫あるべし。

一　うつらかすといふ事

移らかすといふは、物毎にあるもの也。或はねむりなどもうつり、或はあくびなどのうつるもあり。時のうつるもあり。大分の兵法にして、敵うはきにして、ことをいそぐ心のみゆる時は、少しもそれにかまはざるやうにして、いかにもゆるりとなりてみすれば、敵も我事に受けて、気ざしたるむ物なり。其うつりたるとおもふ時、我方より空の心にして、はやくつよくしかけて、かつ利を得るもの也。一分の兵法にしても、我身も心もゆるりとして、敵のたるみの間をうけて、つよくはやく先にしかけて勝つ所専也。亦よわするといひて、是に似たる事あり。一つはたいくつの心、一つはうかつく心、一つはよわく成る心、能々工夫有るべし。

〔訳文〕

物ごとには、移らせる、ということがある。たとえば眠りなどもうつり、あるいは、あくびなども人に移るものである。時がうつるということもある。

多人数の戦いにおいて、敵が落着きがなく、ことを急ごうとする気分が見えたときは、こちらは少しもそれにかまわぬようにして、いかにもゆったりとなって見せると、敵もこちら

に釣りこまれて、気迫がたるむものである。そのような気分が敵に移ったと思ったとき、こちらは心を空にして、早く、強く、打ちかかることによって、勝利をうることができる。

個人の戦いにおいても、わが身も心もゆったりとし、敵がたるむ間をとらえて、強く早く、先手をうって勝つことが重要である。

また、酔わせるといって、これに似たことがある。一つは心にいや気がさすこと、一つは心に落着きがなくなること、一つは心が弱くなることであり、こちらの心に相手を引きこむのである。よくよく工夫せよ。

一　むかつかするといふ事

むかつかするといふは、物毎にあり。一つにはきはどき心、二つにはむりなる心、三つには思はざる心、能く吟味有るべし。大分の兵法にして、むかつかする事肝要也。敵の思はざる所へ、いきどほしくしかけて、敵の心のきはまらざる内に、我利を以て先をしかけて勝つ事肝要也。亦一分の兵法にしても、初めゆるりと見せて、俄につよくかゝり、敵の心のめりかり、働に随ひ、いきをぬかさず、其儘利を受けて、かちをわきまゆる事肝要也。克々可レ有ニ吟味一也。

〔訳文〕

心を動揺（どうよう）させるということは、いろんな場合にある。一つは危険な場合、二つは無理な場合、三つは予測しないことがおきた場合である。これをよく研究すべきである。

多人数の戦いでも、相手方の心を動揺させることが肝腎（かんじん）である。敵の予測しないところを、はげしい勢いでしかけて、敵の心が定まらないうちに、こちらの有利なように先手をかけて勝つことが大切である。

また、一対一の戦いでも、はじめはゆっくりしたようすで、急に強くかかり、敵の心の動揺に応じて、息をぬかず、こちらの有利なままに、勝を得ることが肝腎である。よくよく味わうべきである。

一　おびやかすといふ事

おびゆるといふ事、物毎（ものごと）に有る事也。思ひもよらぬことにおびゆる心なり。大分の兵法（へいほう）にしても、敵をおびやかす事、眼前（がんぜん）の事にあらず。或（あるい）は物の声にてもおびやかし、或は小を大にしておびやかし、亦（また）かたわきより不斗（ふと）おびやかす事、是（これ）おびゆ

る所也。其(その)おびゆる拍子を得て、其利を以て勝つべし。一分の兵法にしても、身を以ておびやかし、太刀を以ておびやかし、声を以ておびやかし、敵の心になき事、与風(ふと)しかけて、おびゆる所の利を受けて、其儘(そのまま)かちを得る事肝要(かんよう)也。能々吟味(よくよくぎんみ)あるべし。

〔訳文〕

おびえるというのは、物ごとによくあることで、思いもよらぬことにおびえることである。

多人数の戦いにあって、敵をおびやかすこととは、目に見えることだけではない。あるいはものの声でおびやかし、あるいは小さな兵力を大きく見せておびやかし、または横から不意におびやかすなど、すべておびやかすことである。そして敵がおびえた拍子をとらえて、有利に勝たねばならぬ。

一対一の戦いにおいても、身をもっておびやかし、太刀をもっておびやかし、声をもっておびやかし、敵が思いもかけぬことを不意にしかけて、敵がおびえたところにつけいり、そのまま勝利を得ることが肝要である。よくよく味わうべきである。

一　まぶるゝといふ事

まぶるゝといふは、敵我(てきわれ)手近くなつて、互(たがい)に強くはりあひて、はかゆかざると見れば、其儘(そのまま)敵とひとつにまぶれあひて、まぶれあひたる其うちに、利を以て勝つ事肝要なり。大分小分(だいぶんしょうぶん)の兵法にも、敵我かたわけては、互に心はりあひて、かちのつかざる時は、其儘(そのまま)敵にまぶれて、互にわけなくなるやうにして、其うちの徳(とく)を得、其内の勝(かち)をしりて、つよく勝つ事専(せん)也。克々吟味(よくよくぎんみ)あるべし。

〔訳文〕

「まぶるる」というのは、敵と自分とが接近して、互につよく張合って、思うようにならないと見れば、そのまま敵と一つにまざり合って、まざり合ううちに有利に勝つことが大切である。

多人数の戦いでも、小人数の戦いでも、敵と味方が分かれて向きあっていては、互に張り合って、勝敗がきまらないときには、そのまま敵とからみ合い、互に敵味方の区別がわからなくなるようにして、そのなかで有利な方法をつかみ、勝をうる道を見出し、絶対に勝つことが大切である。よくよく調べなさい。

一　かどにさはるといふ事

角にさはるといふは、物毎つよき物をおすに、其儘直にはおしこみがたきもの也。大分の兵法にしても、敵の人数を見て、はり出つよき所のかどにあたりて、其利を得べし。かどのめるに随ひ、惣もみなめる心あり。其める内にも、かど〳〵に心得て、勝利を受くる事肝要也。一分の兵法にしても、敵の躰のかどにいたみをつけ、其躰少しもよわくなり、くづるゝ躰になりては、勝つ事やすきもの也。此事能々吟味して、勝つ所をわきまゆる事専也。

〔訳文〕

「角にさわる」というのは、どんな物でも強いものを押すのに、そのまま、まっすぐに押しこむのは容易でないことである。

多人数の戦いにあっては、敵の人数をよく見て、つよく突出した所の角を攻めて、優位に立つことができる。突出した角が減ると、全体も勢いがなくなる。その勢いのなくなるなかでも、出ている所、出ている所を攻めて、勝利を得ることが大切である。

一対一の戦いでも、敵の体の角に損傷を与えれば、体全体が次第に弱まり、崩れた身体になっては、容易に勝を得ることができる。この道理を、よくよく検討して、勝をえることをわきまえることが大切である。

一　うろめかすといふ事

うろめかすといふは、敵に慥なる心をもたせざるやうにする所也。大分の兵法にしても、戦の場において、敵の心を計り、我兵法の智力を以て、敵の心をそこ爰となし、とのかうのと思はせ、おそしはやしと思はせ、敵うろめく心になる拍子を得て、慥に勝つ所を弁ゆる事也。亦一分の兵法にして、我時にあたりて、色々のわざをしかけ、或は打つと見せ、或はつくとみせ、又は入りこむと思はせ、敵のうろめく気ざしを得て、自由に勝つ所、是たゝかひの専也。能々吟味あるべし。

〔訳文〕

「うろたえさせる」というのは、敵にしっかりとした心を持たせないようにすることである。

多人数の戦いにあっては、戦場において敵の意図を見ぬき、わが兵法の智力によって、敵

の心を、そこか、ここか、あれや、これやと迷わせたり、おそいか、早いかと迷わせて、敵がうろたえた心になる拍子をつかまえて、確実に勝利をえる方法をわきまえることである。
また一対一の戦いにおいても、自分は時機をとらえて、いろいろなわざをしかけ、あるいは打つと見せ、あるいは突くと見せ、または入りこむと思わせ、敵のうろたえた様子につけこみ、思いのままに勝つところ、これが戦闘の要訣である。よくよく検討せよ。

一　三つの声といふ事

三つのこゑとは、初中後の声といひて、三つにかけ分くる事也。所により、こゑをかくるといふ事専也。声はいきほひなるによつて、火事などにもかけ、風波にもかけ、声は勢力を見する也。大分の兵法にしても、戦より初めにかくる声は、いかほどもかさをかけて声をかけ、亦戦ふ間の声は、調子をひきく、底より出る声にてかゝり、かちて後、跡に大きにつよくかくる声、是三つの声也。又一分の兵法にしても、敵をうごかさん為、打つと見せて、かしらよりえいと声をかけ、声の跡より太刀を打出すもの也。又敵を打ちてあとに声をかくる事、勝をしらする声也。是を先後の声といふ。太刀と一度に、大きに声をかくる事なし。若し戦の内にかくる

は、拍子（ひょうし）にのるこゑ、ひきくかくる也。能々吟味あるべし。

〔訳文〕

三つの声とは、初、中、後の声といって、三つにわけることをいう。時と場所により、声をかけるということが大切である。声は、勢いをつけるものであるから、火事や、風や波に向ってもかけるのである。声は勢いを示すものである。

多人数の戦いにあっては、戦いの最初にかける声は、相手を威圧（いあつ）するように大きくかける。また戦いの間の声は、調子を低くし、底から出るような声をかける。戦いに勝った後には、大きく強く声をかける。これが三つの声である。

一対一の戦いにおいても、敵を動かそうとするためには、打つと見せて、初めにえいと声をかけ、声の後から太刀を打出すものである。また敵を打ち破った後に声をかけるのは、勝を知らせる声である。これを「先後の声」という。

太刀を打つと同時に大きく声をかけることはない。もし、戦いの最中にかけるのは、拍子に乗るための声で、低くかけるのである。よくよく調べてみよ。

一　まぎるゝといふ事

まぎるゝといふは、大分の戦にしては、人数を互にたて合ひ、敵のつよき時、まぎるゝといひて、敵の一方へかゝり、敵くづるゝと見ば、すてゝ、又つよき方々へかゝる、大形つゞらをりにかゝる心也。一分の兵法にして、敵を大勢よするも、此心専也。方々をかたず、方々にげば、亦つよき方へかゝり、敵の拍子を得て、よき拍子に左みぎと、つゞらをりの心におもひて、敵の色を見合ひてかゝるもの也。其敵の位を得、打ちとほるにおいては、少しも引く心なく、つよくかつ利也。一分入身の時も、敵のつよきには、其心あり。まぎるゝといふ事、一足も引く事をしらず、まぎれゆくといふ心、能々分別すべし。

〔訳文〕

「まぎれる」というのは、多人数の戦いの場合に人数が対峙し合って、敵が強いと見たときは、まぎれるといって、敵の一方にかかり、敵が崩れたと見たならば、直ちにうちすてて、また他の強いところにかかるのをいう。いわば、つづらおり（いくども曲りくねった坂道、九十九折）のようにかかることである。

一人で多勢を敵にまわして、戦うときにも、この心がけが大切である。一方ばかりを勝ち抜くのではなく、方々に逃げ出させれば、こんどは別の強い方へかかり、敵の拍子をとってよい拍子にのり、あるいは左、あるいは右と、つづらおりの心もちで、敵の調子を見はからって、かかっていくのである。敵の力の程度を見きわめ、打ちこんでいく場合には、一歩も引かぬ気持ちで、強くうちこみ、勝利を得るのである。

一人のときも、敵の手もとに身をよせて入りこんでいく際、敵が強いときには、やはりこの心得が必要である。まぎれるというのは、一歩も引くことを知らず、まぎれこんでいくことである。よくよく理解せよ。

一　ひしぐといふ事

ひしぐといふは、縦へば敵よわく見なして、我つよめになつて、ひしぐといふ心専也。大分の兵法にしても、敵小人数のくらゐを見こなし、又は大勢也とも、敵うろめきてよわみつく所なれば、ひしぐといひて、かしらよりかさをかけて、おつぴしぐ心なり。ひしぐ事よわければ、もてかへす事あり。手の内ににぎってひしぐ心、能々分別すべし。亦一分の兵法の時も、我手に不足のもの、又は敵の拍子ちがひ、

すさりめになる時、少しもいきをくれず、目を見合はせざるやうになし、真直にひしぎつくる事肝要也。少しもおきたてさせぬ所、第一也。能々吟味有るべし。

〔訳文〕

「ひしぐ」というのは、たとえば敵を弱く見なし、自分は強い気で、一気におしつぶすことをいう。

多人数の戦いにあっては、敵が小人数であることを見ぬいたとき、または、たとえ多人数ではあっても、敵がうろたえて弱味が見えれば、はじめから優勢に乗じて、完膚なきまでにうちのめすのである。もし、一気におしつぶすことが弱いと、盛り返されることがある。手の内に握って、おしつぶすということをよく理解せよ。

また、一対一の戦いのときにも、自分よりも未熟なもの、または敵の拍子が狂ったとき、退り目になったときには、少しも息をつかせず、目を見合わせないようにして、一気にうちのめすことが肝腎である。少しも立ちなおることができないことが第一である。よくよく吟味せよ。

一　さんかいのかはりといふ事

山海の心といふは、敵我たゝかひのうちに、同じ事を度々する事悪しき所也。同じ事二度は是非に及ばず、三度するにあらず。敵にわざをしかくるに、一度にてもちひずば、今一つもせきかけて、其利に及ばず、各別替りたる事を、ほつとしかけ、それにもはかゆかずば、亦各別の事をしかくべし。然るによつて、敵山と思はゞ海としかけ、海と思はゞ山としかくる心、兵法の道也。能々吟味有るべき事也。

〔訳文〕

「山海の心」というのは、敵とわれとがたたかう間に、同じことを度々くり返すことは悪いというのである。

同じことを二度くり返すのは仕方がないが、三度してはならない。敵にわざをしかけるのに、一度で成功しないときには、もう一度攻めたてても、その効果はなくなる。まったく違ったやり方を敵の意表をついてしかけ、それでも上手くゆかなければ、さらに又別の方法をしかけよ。

このように、敵が山と思えば海、海と思えば山と、意表をついてしかけるのが兵法の道で

ある。よくよく吟味すべきことである。

一　そこをぬくといふ事

底を抜くといふは、敵とたゝかふに、其道の利を以て、上は勝つと見ゆれ共、心をたえさゞるによつて、上にてはまけ、下の心はまけぬ事あり。其義においては、我俄に替りたる心になつて、敵の心をたやし、底よりまくる心に敵のなる所、見る事専也。此底をぬく事、太刀にてもぬき、又身にてもぬき、心にてもぬく所有り、一道にはわきまへべからず。底よりくづれたるは、我心残すに及ばず。さなき時は、のこす心なり。残す心あれば、敵くづれがたき事也。大分小分の兵法にしても、底をぬく所、能々鍛練あるべし。

〔訳文〕

「底を抜く」というのは、敵とたたかううちに、兵法のわざをもって形の上では敵に勝つように見えても、敵が敵愾心を持ちつづけているので、表面では負けていても心底では負けていないことがある。そのようなときには、こちらはす早くかわった心持で、敵の気力をくじ

き、敵を心底から負けた状態にしてしまうことを見届けることが肝要である。こうして「底をぬく」ことは、太刀によっても、体によっても、また心によっても、ぬく場合があり、一概にわきまえることはできない。

敵が心底から崩れてしまった場合には、こちらも心を残しておく必要はないが、そうでないときには心を残しておかねばならぬ。敵も心を残していれば、なかなか崩れないものである。

多人数の戦いにも、一人一人の戦いにも、この底をぬくということを、よくよく鍛錬しなければならぬ。

一　あらたになるといふ事

新に成るとは、敵我たゝかふ時、もつるゝ心になつて、はかゆかざる時、わが気を振捨てて、物毎をあたらしくはじむる心に思ひて、其拍子を受けて勝をわきまゆる所也。あらたに成る事は、何時も敵と我きしむ心になると思はゞ、其儘心を替へて、各別の利を以て勝つべき也。大分の兵法においても、あらたに成るといふ所、わきまゆる事肝要也。兵法の智力にては、忽ち見ゆる所也。能々吟味あるべし。

〔訳文〕

新に成るというのは、敵が自分と戦うときに、もつれる状況になって、上手くゆかなくなったとき、自分の意図をふりすてて、新しく物ごとをはじめる気持ちで、その拍子に乗り、勝ちを見出すことである。

新に成るのは、何時も敵と自分とがぎしぎしするような状況になったと思えば、そのままこちらの意志をかえて、まったく違った方法で勝をしめるのである。

多人数の戦いにあっても、新に成るということをわきまえることが肝腎である。兵法に達したものの智力をもってすれば、容易に見えるものである。よくよく吟味せよ。

一　そとうごしゅといふ事

鼠頭午首といふは、敵と戦のうちに、互にこまかなる所を思ひ合はせて、もつるゝ心になる時、兵法の道をつねに鼠頭午首そとうごしゅとおもひて、いかにもこまかなるうちに、俄に大きなる心にして、大小にかはる事、兵法一つの心だて也。平生人の心も、そとうごしゅと思ふべき所、武士の肝心也。兵法大分小分にしても、

此心(このこころ)をはなるべからず。此事能々可レ有ニ吟味一者也(このことよくよくぎんみあるべきものなり)。

〔訳文〕

「鼠(ねずみ)の頭、牛の首」というのは、敵とたたかううちに、互に細かいところばかりに気をとられてもつれあうような状況になったとき、兵法の道をねずみの頭から、牛の首を思うように、細かな心遣いから、たちまち大きな心にかわって、局面の転換をはかることは、兵法の一つの心がけである。

武士たるものは、平生、人の心も「鼠の頭、牛の首」のようにかわるものであると思うことが肝心である。多人数の戦い、個人の戦いにしても、この心がけを忘れてはならぬ。よくよく吟味すべきである。

〔付記〕

武士たるものが鼠(ねずみ)の持つ細心(さいしん)さと、牛の持つ大胆(だいたん)さを兼ね備えよということは大切なことである。細心さと大胆さがなければ戦いに勝つことはできない。細心さだけでは臆病(おくびょう)になり、大胆さだけでは無鉄砲(むてっぽう)になる。両者を備えてこそ兵法者として一人前になる。

この細心さと大胆さを兼ねそなえるということは、兵法ばかりでなく、人生を生きぬく上にも必要なことである。

一　しやうそつをしるといふ事

将卒(しょうそつ)を知るとは、いづれも戦(たたかい)に及ぶ時、わが思ふ道に至りては、たえず此法(このほう)をおこなひ、兵法の智力を得て、我敵(わがてき)たるものをば、皆我卒成(わがそつな)りとおもひとつて、なしたきやうになすべしと心得、敵を自由にまはさんと思ふ所、我は将(しょう)也、敵は卒(そつ)なり。工夫あるべし。

〔訳文〕

将、卒を知るというのは、どんな戦いのときにも、自分の思うままになったら、たえずこの「将は卒を知る」という方法をおこない、兵法の智力を得て、自分の敵となるものを、すべてわが兵卒と考えて、自分の指図のままに従わせることができるものと心得て、敵を自由にひきまわすことをいう。

このようになれば、自分は将、敵は兵卒となる。よく工夫せよ。

〔参考〕

㉜一　将卒のをしへの事

将卒(しょうそつ)と云は、兵法の利を身に請(こい)ては、敵を卒に見なし、我身を将に成して、敵にすこしも自由をさせず、太刀をふらせんも、すくませんも、皆我心の下知につけて、敵の心にたくみをさせざる様にあるべし。此事肝要なり。

一　つかをはなすといふ事

束(つか)をはなすといふに、色々(いろいろ)心ある事也。無刀(むとう)にて勝つ心あり、又太刀(たち)にてかたざる心あり。さま〴〵心のゆく所、書付くるにあらず。能々鍛練(よくよくたんれん)すべし。

〔訳文〕

柄(つか)をはなすというのには、いろいろな意味がある。刀を持たないでも勝つ道もあり、また太刀をもっても勝たないこともある。さまざまな意味があるので、いちいち書き記すことはできない。よくよく鍛錬せよ。

一　いはほのみといふ事

岩尾の身といふ事、兵法を得道して、忽ち岩尾のごとくに成りて、万事あたらざる所、うごかざる所、口伝。

〔訳文〕　岩尾（巌）の身というのは、兵法の道を得ることにより、たちまちにして巌のように堅固となり、どんなことがあっても斬られることなく、動かされぬようになることである。口伝である。

〔参考〕

㉞一　いはほの身と云事

岩尾の身と云は、うごく事なくして、つよく大なる心なり。身におのづから万理を得て、つきせぬ処なれば、生有る者は、皆よくる心有る也。無心の草木迄も、根ざしがたし。ふる雨、吹く颪もおなじこゝろなれば、此身能々吟味あるべし。

〔付記〕

心技体が一致した不動の体であり、口伝によってのみ伝えられる秘法である。沢庵（たくあん）は『不動智神妙録』の中で、

身を動転（どうてん）せぬことにて候。動転せぬとは、物毎に留らぬ事にて候。物一目見て、其心を止めぬを不動と申し候。

と説明している。不動とは身体を動転しないことである。「物事に留らぬ事にて候」とあるように、どんな相手の動作、相手の技に対しても心をそこにとどめてはならぬ。
「不動」というのは、石や木がまったく動かないという意味ではない。心は前後左右、いかなる方向へも自由に動きながら、少しも対象にとらわれず、少しもとどまらない心を不動の知恵というのである。
「兵法三十五箇条」では、「岩尾の身と云は、うごく事なくして、つよく大なる心なり」と説明しているが不動の心をいうのである。高野茁正の『一刀流聞書』にもつぎのような表現が見られる。

一、真の本勝は我が本心の所にて、我が心は日輪の如くにて、傍よりどのやうな事有りとも本心は凜として少しも動かず、勝を握り居り候処なり。釈迦仏仰せられ候通り、天上天下唯我独尊と心の尊きを仰せられ候所なり。

このなかで「傍よりどのやうな事有りとも本心は凜として少しも動かず、勝を握り居り候処なり」とあるのは味うべき言葉である。

右書付くる所、一流剣術の場にして、不レ絶思ひよる事而已云顕はし置く物也。今初而此利を書記す物なれば、あと先とかきまぎるゝ心ありて、こまやかにいひわけがたし。乍レ去、此道をまなぶべき人の為には、心しるしに成るべきもの也。我若年より以来、兵法の道に心をかけて、剣術一通りの事にも手をからし、身をからし、色々様々の心に成り、他の流々をも尋ね見るに、或は口にていひかこつけ、或は手にてこまかなるわざをし、人目に能きやうに見するといひても、一つも実の心にあるべからず。勿論かやうの事しならひても、身をきかせならひ、心をきかせつくる事と思へども、皆是道のやまひとなりて、後々迄もうせがたくして、兵法の直道世

にくちて、道のすたるもとゐ也。剣術実の道になつて、敵とたゝかひ勝つ事、此法聊か替る事有るべからず。我兵法の智力を得て、直なる所をおこなふにおいては、勝つ事うたがひ有るべからざるもの也。

正保二年五月十二日　　　新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年

二月五日　　　寺尾夢世勝延（花押）

山本源介殿

〔訳文〕

右に書き記したところは、二天一流の剣術の場合に、たえず思いあたることだけを、言いあらわしておくものである。今、初めて兵法に勝つ道を書いたものであるから、前後の文章が混乱して、こまかく表現することができない。しかしながら、この道を学ぼうとする人のためには、道しるべとなることができるものである。

自分は若年のときから兵法の道に心を傾け、剣術の一とおりのことは、手をならし、身を

きたえて鍛錬し、さまざまな修行を積みかさねて、他の流派を見てみると、あるいは口先だけでうまい講釈をしたり、あるいは手先で細かい技巧をこらし、他人の目にはよいように見えるが、一つも真実の内容のあるものはない。

もちろん、こうしたことをいつもしていても、身体の鍛錬をかさね、心の修業をつんでいるとは思うが、こうした華やかな剣術は、兵法の道の病弊となって後世までもその悪い影響が消えず、兵法の正しい道が世に朽ちて、兵法のすたる原因となるであろう。

剣術の正しい道というものは、敵と闘って勝つことであり、これこそ絶対にかわらないことである。わが兵法の智力を得て、正しい兵法の道を実践してゆけば、勝を得ることは絶対に疑いないものである。

正保二年五月十二日　　新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年

二月五日　　寺尾夢世勝延（花押）

山本源介殿

風之巻

風之巻

兵法、他流の道を知る事。他の兵法の流々を書付け、風之巻として、此巻に顕はす所也。他流の道をしらずしては、我一流の道慥にわきまへがたし。他の兵法を尋ね見るに、大きなる太刀をとつて、つよき事を専にして、其わざをなすながれあり。或は小太刀といひて、短き太刀を以て道を勤むるながれもあり。或は太刀かず多くたくみ、太刀の構をもつて、おもてといひ、奥として、道をつたゆる流もあり。是皆、実の道にあらざる事、此巻の奥に、慥に書顕はし、善悪理非をしらする也。我一流の道理、各別の義也。他の流々、芸にわたつて、身すぎの為にして、色をかざり花をさかせ、うり物にこしらへたるによつて、実の道にあらざる事か。亦世の中の兵法、剣術ばかりにちひさく見たて丶、太刀を振習ひ、身をきかせて、手のかる丶所を以て、かつ事をわきまへたるものか。いづれも慥なる道にあらず。他流の不足成る所、一々此書に書顕はす也。能々吟味して、二刀一流の利をわきまゆべきもの也。

〔訳文〕

兵法の道では、他流の道を知ることが大切と考え、他流のさまざまな兵法をここに書きつけ、風の巻として、この巻を著わした。

他流の道を知らなくては、二天一流(にてんいちりゅう)の道を適確に知ることはできない。

他流の兵法を調べて見ると、大きな太刀(たち)をつかい、力がつよいことだけを取りえとして技をなす流派がある。或はまた小太刀といって、短い太刀をつかって兵法に専念する流れもある。或は多くの太刀数を工夫して、太刀のかまえをおもてだ、奥だと称して、兵法を伝える流派もある。

これらがすべて正しい道ではないことを、この巻の中にはっきりと書きあらわし、兵法の善悪、正否を明らかにしたい。わが一流の兵法は、彼らとは全く異ったものである。

他の流派の人々は、武芸の道を生計の手段として、花やかな技巧をかざることによって売りものに仕立てようとするのであって、まったく兵法の正しい道からはずれたものである。また世間の兵法にあっては、剣術だけに小さく限定してしまって、太刀をふる訓練をし、身のこなしをおぼえ、技巧を上達させることによって、勝をうる方法を見出そうとしているが、

いずれも正しい道ではない。

ここに他の流派の欠点を、いちいち書き記しておくのである。よくよく吟味して、わが二刀一流の道理を学んでもらいたいものである。

一　他流に、大きなる太刀を持つ事

他に大きなる太刀をこのむ流あり。我兵法よりして、是をよわき流と見たつる也。其故は、他の兵法、いかさまにも人に勝つといふ理をば知らずして、太刀の長きを徳として、敵相遠き所よりかちたきと思ふによつて、長き太刀このむ心あるべし。世中にいふ、「一寸手まさり」とて、兵法しらぬものの沙汰也。然るによつて、兵法の利なくして、長きを以て遠くかたんとする、それは心のよわき故なるによつて、よわき兵法と見たつる也。若し敵相近く組みあふほどの時は、太刀長き程打つ事もきかず、太刀のもとをりすくなく、太刀を荷にして、小脇差手振の人におとるもの也。長き太刀好む身にしては、其云わけはあるものなれども、それは其身ひとりの理也。世中の実の道より見る時は、道理なき事也。長き太刀もたずして、短き太刀にては必ずまくべき事か。或は其場により、上したわきなどのつまりたる所、或は

脇差ばかりの座にても、長きをこのむ心、兵法のうたがひとて、あしき心也。人により少力なるものもあり。むかしより、「大は小をかなへる」といへば、むさと長きをきらふにはあらず、長きとかたよる心をきらふ儀也。大分の兵法にして、長太刀は大人数也、短きは小人数也。小人数と大人数にて合戦はなるまじきものか。少人数にて大人数にかちたる例多し。わが一流において、さやうにかたづきせばき心、きらふ事也。能々吟味有るべし。

〔訳文〕

他流に大きな太刀を好む流派がある。わが一流の兵法からみれば、この流儀を弱者の兵法と見たてるのである。

その理由は、他の流儀では、いかなる場合にも敵に勝つという道理を知らないで、太刀の長さを長所として、敵の太刀の届かぬ所から、勝を得ようとするので、長い太刀を好むからである。

世間で「一寸手まさり」（一寸でも手が長ければ長いだけ有利であること）といっているのは、兵法を知らないものの言い分にすぎない。そうであるから、兵法の道理を会得していな

くて、太刀の長さによって、遠いところから勝を得ようとするのは、心の弱さのためであって、これを弱者の兵法と見たてるのである。もし敵と近づいて、互に組み合うほどのときは、太刀が長いほど打つことができず、太刀を自由に振り廻すこともできず、太刀が荷厄介(にやっかい)となって、短い脇差(わきざし)をふるう人よりおとるものである。

長い太刀を好むものには、その言い分はあろうが、それは、ひとりよがりの屁理屈(へりくつ)にすぎない。世の中の正しい道より見れば、道理のないことである。もし、長い太刀を持たないで、短い太刀をつかう時には、必ず負けざるをえないではないか。

また、戦いの場所により、上下左右などにあきがないところや、または脇差だけが使える場合においても、長い太刀を好む気持があれば、それは兵法に対する不信感であり、よくないことである。また人によっては力がよわく、長い太刀を使えぬものもある。昔から「大は小を兼ねる」といわれており、むやみに、長い太刀をきらうのではない。ただ長い太刀にばかり執着(しゅうじゃく)する心をきらうのである。

多人数の戦いにあてはめて考えるならば、長い太刀は多くの人数に相当し、短い太刀は少人数にあたる。少人数と、多人数と戦うことはできないであろうか。いや少人数で多人数に勝った例はいくらもあるではないか。

わが流儀においては、偏頗でせまい考えを嫌うのである。よくよく吟味しなければならぬ。

一　他流において、つよみの太刀といふ事

太刀につよき太刀、よわき太刀といふ事は、あるべからず。つよき心にてふる太刀は、あらき物也。あらきばかりにてはかちがたし。又つよき太刀といひて、人をきる時にして、むりにつよくきらんとすれば、きれざる心也。ためしものなどにきる心にも、つよくきらんとする事悪しし。誰においても、かたきときりやふに、よわくきらん、つよくきらんと思ふものなし。唯人をきりころさんとおもふ時は、つよき心もあらず、勿論よわき心にもあらず、敵のしぬるほどと思ふ義也。若しは、つよみの太刀にて、人の太刀つよくはれれば、はりあまりて、必ずあしき心なり。人の太刀に強くあたれば、わが太刀もをれくだくる所也。然るによつて、つよみの太刀などといふ事、なき事也。大分の兵法にしても、つよき人数を持ち、合戦においてつよくかたんと思へば、敵も強き人を持ち、戦もつよくせんとおもふ、それはいづれも同じ事也。物毎に勝つといふ事、道理なくしては勝つ事あたはず、わが道においては、少しもむりなる事を思はず、兵法の智力をもつて、いかやうにも勝つ所

を得る心也。能々工夫有るべし。

〔訳文〕

太刀に強い太刀、弱い太刀などということは、あるはずがない。強い気持でふる太刀は粗雑なものとなる。粗雑な太刀だけでは勝を得るのは難かしいことである。また、強い太刀だといって、人を斬るとき、無理に強く斬ろうとすれば、かえって斬れないものである。試し斬りの場合にも、強く斬ろうとするのはよくない。

誰でも敵と斬合うとき、弱く斬ろうとか、強く斬ろうとか考えるものではない。ただ敵を斬り殺そうと思うときは、強く斬ろうとも思わず、もちろん弱く斬ろうとも思わない。どうしたら敵を殺せるかと思うだけである。

また、強い力をこめた太刀で、相手の太刀を強くうてば、張り余って体勢が崩れ、悪い結果が生じるものである。人の太刀に強くあたれば、わが太刀もそのために折れてしまうものである。そういうわけであるから、強い力を用いてふるう太刀ということはあり得ないのである。

多人数の戦いにあてはめて見れば、強力な軍勢を持ち、戦いにおいて強引に勝を得ようと

すれば、敵も当然、強力な兵卒をそろえて、はげしい戦いをしようとするであろう。これはどちらも同じである。

戦いに勝つことは、正しい道理なしには勝つことはできない。わが一流の兵法の道においては、無理なことは少しも思わず、兵法の智力によって、どのようにも勝を得るということである。よくよく工夫せよ。

一　他流に、短き太刀を用ゐる事

短き太刀斗にてかたんと思ふ所、実の道にあらず。昔より太刀かたなといひて、長きと短きといふ事を顕はし置く也。世の中に強力なるものは、大きなる太刀をもかろく振るなれば、むりに短きを好む所にあらず。其故は、長きを用ゐて、鑓・長太刀をも持つ物也。短き太刀を以て、人の振る太刀の透間をきらん、飛びいらん、つかまんなどと思ふ心、かたづきて悪しし。又すきまをねらふ所、万事後手に見え、もつるゝといふ心有りて、きらふ事也。若しは、みじかき物にて、敵へ入りくまん、とらんとする事、大敵の中にて役に立たざる心なり。短きにてし得たるものは、大勢をもきりはらはん、自由に飛ばん、くるはんと思ふとも、皆うけ太刀といふ物に

なりて、とりまぎるゝ心有りて、慥成る道にてはなき事也。同じくは、我身はつよく直にして、人を追廻し、人に飛びはねさせ、人のうろめくやうにしかけて、慥に勝つ所を専とする道也。大分の兵法においても、其理あり。同じくは、人数かさをもつて、敵を矢場にしほし、即時にせめつぶす心、兵法の専也。世中、人の物をしならふ事、へいぜいも、うけつ、かはいつ、ぬけつ、くゞつつ、しならへば、心道にひかされて、人にまはさるゝ心あり。兵法の道直に糺しき所なれば、正理を以て人をおひまはし、人をしたがゆる心肝要也。能々吟味有るべし。

〔訳文〕

短い太刀だけを用いて勝とうとするのは正しい道ではない。昔から太刀、刀とわけて、長い短いをいいあらわしている。一般に力の強いものは、大きな太刀も軽くふるうことができるので、わざわざ短い太刀を用いる必要はないのである。そのわけは、長さの利点を活用して槍や長太刀を使うものだからである。

短い太刀をとくに愛用するものは、敵がふるう太刀の間をぬって、飛びこもう、つけ入ろうと思うのであり、このように心が偏ったのはよくない。

また、敵の隙をねらってばかりいると、すべてが後手となり、敵ともつれあうことになって、よくない。さらにまた、短い太刀によって、敵の中へ入りこもう、一本とろうとするやり方では、大敵の中では通用しないものである。

短い太刀ばかりを用いた者は、多くの敵に対しても、斬り払おう、自由に跳ぼう、まわろうと思っても、すべてが受け太刀となり、敵とからみ合ってしまって、確実な兵法の正しい道であるべきではない。

同じことならば、わが身は強く、まっすぐな状態にあって、敵を追いまわし、飛びのかせ、うろたえるようにしかけて、確実に勝利を得ることだけが肝要である。

多人数の戦いにあっても同じ道理である。同じことならば大軍勢でいきなり敵に攻めこみ、即座に攻め滅すことが兵法の肝心である。

世間の人々が、兵法を習うのに、日常、受ける、交す、ぬける、潜るなどのことばかり習っていると、こんな末技に心をひきずられて後手にまわり、敵に追いまわされてしまうものである。兵法の道は、正しく、まっすぐなものであるから、正しい道理をもって敵を追いまわし、相手を従えていくことが大切である。よくよく吟味せよ。

一　他流に、太刀かず多き事

太刀のかず余多にして、人に伝ゆる事、道をうり物にしたてゝ、太刀数おほくしりたると、初心のものに深く思はせん為成るべし。兵法にきらふ心也。其故は、人をきる事、色々あるとおもふ所、まよふ心也。世の中において、人をきる事、替る道なし。しるものも、しらざるものも、女童子も、打ちたゝききるといふ道は、多くなき所也。若しかはりては、つくぞ、なぐぞといふ外はなし。先づきる所の道なれば、数の多かるべき子細にあらず。され共、場により、事に随ひ、上わきなどのつまりたる所などにては、太刀のつかへざるやうに持つ道なれば、五方とて五つの数は有るべきもの也。それより外にとりつけて、手をねぢ、身をひねりて、飛び、ひらき、人をきる事、実の道にあらず。人をきるに、ねぢてきられず、ひねりてきられず、飛んできれず、ひらいてきれず、かつて役に立たざる事也。我兵法においては、身なりも心も直にして、敵をひずませ、ゆがませて、敵の心のねぢひねる所を勝つ事肝心也。能々吟味あるべし。

〔訳文〕

他流において、数多くの太刀のつかい方を人に伝えていることは、兵法を売りものにしたてて、太刀の使い方をいろいろ知っていることを初心者に感心させるためであろう。これは兵法で最も嫌うべきことである。

その理由は、人を斬るのにいろいろな方法があると考えるのが、誤りであるからである。人を斬るということにかわりはない。兵法を知るものも、知らないものも、女子供であっても、打ち、たたき、斬るということに、多くのやり方があるわけはない。叩き、斬るという事以外には、突くこと、薙ぐことがあるだけである。とにかく敵を斬ることが兵法の道であれば、その方法に多くの使い方があるべきはずがない。

しかしながら、その場所や事情によって、たとえば上や脇がつまっているところでは、太刀がつかえないように持つから、太刀の持ち方には、五方といって五種類はあるはずである。それ以外に、つけ加えて、手をねじるとか、身をひねるとか、跳びひらくとかして敵を斬ることは、正しい兵法の道ではない。人を斬るのに、ねじったり、ひねったり、飛んだり、開いたりして斬れるものではない。まったく役に立たないことである。

わが兵法にあっては、身も心もまっすぐにして、敵を曲げさせ、ゆがませて、相手の心が

ねじれまがって、平静さを失ったところに乗じて、打って勝を得ることが肝心なのである。よくよく吟味せよ。

一　他に、太刀の構を用ゐる事

太刀のかまへを専にする所、ひがごとなり。世の中にかまへのあらん事は、敵のなき時の事なるべし。其子細は、昔よりの例、今の世の法などとして、法例をたつる事は、勝負の道には有るべからず。其あひてのあしきやうにたくむ事なり。物毎に構といふ事は、ゆるがぬ所を用ゐる心なり。或は城をかまゆる、或は陣をかまゆるなどは、人にしかけられても、つよくうごかぬ心、是常の儀也。兵法勝負の道においては、何事も先手〳〵と心懸くる事也。かまゆるといふ心は、先手を待つ心也。能々工夫有るべし。兵法勝負の道、人の構をうごかせ、敵の心になき事をしかけ、或は敵をうろめかせ、或はむかつかせ、又はおびやかし、敵のまぎるゝ所の拍子の理を受けて、勝つ事なれば、構といひ、後手の心を嫌ふ也。然る故に、我道に有構無構といひて、かまへはありてかまへはなきといふ所也。大分の兵法にも、敵の人数の多少を覚え、其戦場の所を受け、我人数のくらゐをしり、其徳を得て、人数を

たて、たゝかひをはじむる事、それ合戦の専也。人に先をしかけられたる時と、我人にしかくる時は、一倍もかはる心也。太刀を能くかまへ、敵の太刀を能くうけ、よくはるとおぼゆるは、鑓・長太刀を持ちて、さくにふりたると同じ。敵を打つ時は、又さく木をぬきて、鑓・長太刀につかふほどの心也。能々可レ有二吟味一事也。

〔訳文〕

太刀のかまえ方に重点をおくのは、あやまった考え方である。世間一般には、構えをするということは、敵がいない場合のことであろう。そのわけは、昔からの先例や、今の時代の法だなどと、定った型をつくることは勝負の道にはありえない。相手にとって具合が悪いように仕組むことなのである。

物ごとの構えというのは、物ごとに動かされない、確固とした態勢をとるための用心なのである。城をかまえたり、陣をかまえたりすることは、人にしかけられても、少しも動かぬ状態をいいあらわしているが、これは常のことである。ところが兵法勝負の道では、何ごとも先手先手と心がけることである。これに反して構えるということは、先手を待っている状態である。よくよく工夫せよ。

兵法勝負の道にあっては、相手の構えを動揺させ、敵の思いもよらぬことをしかけ、敵をうろたえさせ、むかつかせ、おびやかして、敵が混乱して拍子が狂ったところに乗じて勝を得るのであるから、構えなどという後手の態度をきらうのである。したがって、わが兵法においては有構無構、すなわち、構えがあって構えがない、というのである。

多人数の戦いの場合にも、敵の兵数の多少を知り、戦場の状態を見きわめて、わが人数の程度が分かり、その長所を生かして人数をきめ、闘いをはじめることが、合戦にもっとも重要なことである。

人に先手をしかけられたときと、自分からしかけたときには、戦いの利不利は倍もちがうものである。太刀をよくかまえ、敵の太刀をよく受け、よくはじいたと思っても、所詮、受け身というものは、槍や長太刀のような長いものを持っても、防御にこしらえた柵木越しに振っているのと同じことで、本当に敵を打つことはできない。逆に、敵を攻めるときは、柵木のようなものでも、槍や長太刀を使うほどの役目を果たすであろう。よくよく吟味すべきである。

一　他流に、目付といふ事

目付といひて、其流により、敵の太刀に目を付くるもあり、亦は手に目を付くる流もあり。或は顔に目を付け、或は足などに目を付くるもあり。其ごとく、とりわけて目をつけむとしては、まぎるゝ心ありて、兵法のやまひといふ物になるなり。其子細は、鞠をける人は、まりによく目を付けねども、びんすりをけ、おひまりをしながらしてもけ、まはりてもける事、物になるゝといふ所あれば、慥に目に見るに及ばず。又はうかなどするもののわざにも、其道になれては、戸びらを鼻にたて、刀をいく腰もたまなどにとる事、是皆慥に目付くるとはなけれども、不断手になれぬれば、おのづから見ゆる所也。兵法の道においても、其敵〳〵となれ、人の心の軽重を覚え、道をおこなひ得ては、太刀の遠近・遅速迄も、みな見ゆる儀也。兵法の目付は、大形其人の心に付きたる眼也。大分の兵法に至りても、其敵の人数の位に付きたる眼也。観見二つの見やう、観の目つよくして敵の心を見、其場の位を見、大きに目を付けて、其戦のけいきを見、其をりふしの強弱を見て、まさしく勝つ事を得る事専也。大小兵法において、ちひさく目を付くる事なし。前にもしるすごとく、濃かにちひさく目を付くるによつて、大きなる事をとりわすれ、まよふ

心出できて、慥なる勝をぬかすもの也。此利、能々吟味して鍛練有るべき也。

〔訳文〕

他流では目付といって、それぞれの流儀により、敵の太刀に目をつけるもの、手に目をつけるもの、または顔に目をつけるもの、足などに目をつけるものがある。このように、特別に目をつけようとすれば、それに迷わされて、兵法のさまたげとなるものである。

そのわけは、たとえば、鞠をける人は、鞠に目をつけていないのに、難かしい蹴鞠の曲足を、たくみに蹴ることができる。ものに習熟するということによって、確かに目で一つを見る必要はない。また曲芸などをする者の技にも、その道になれれば、扉を鼻の上にたてたり、刀を幾振も手玉にとることとは、これも皆、確実に目をつけているのではないが、いつも手慣れているから、自然によく見えるようになるのである。

兵法の道においても、その時々の敵との闘いになれ、人の心の軽重をさとり、兵法の道を体得できれば、太刀の遠近、遅速までも、すべて見えるものである。兵法の目のつけどころは、相手の心に目をつけ、心眼を働かせなければならないのである。

多人数の戦いにあっても、その敵軍の形勢にこそ目をつけるのである。観と見の二つの見

方のうち、観の目を強くして、敵の心の動きを見ぬき、その場所の状況を見て、大局に目をつけてその戦いの形勢を見て、そのときどきの強弱を見て、確実に勝を得ることが必要なのである。

多人数の戦いでも、個人の勝負でも、細かい部分に目を奪われてはならない。前にものべたように、細かなところに目をつけることによって、大局を見忘れ、心に迷いが生じて、確実に勝利を見失うものである。この道理をよくよく吟味して、鍛錬すべきである。

一 他流に、足つかひ有る事

足のふみやうに、浮足、飛足、はぬる足、ふみつむるあし、からす足などといひて、色々さつそくをふむ事あり。是皆、我兵法より見ては、不足におもふ所也。浮足をきらふ事、其故は、たゝかひになりては、必ず足のうきたがるものなれば、いかにも慥にふむ道也。又飛足をこのまざる事、飛あしはとぶおこりありて、とびてゐつく心あり。いくとびも飛ぶといふ理のなきによつて、とびあし悪しし。亦はぬる足、はぬるといふ心にて、はかの行きかぬるもの也。踏みつむる足、待のあしとて、殊にきらふ事也。其外、からす足、色々のさつそくなどあり。或は、沼・ふけ、

或は、山川・石原・細道にても、敵ときり合ふものなれば、所により飛びはぬる事もならず、さつそくのふまれざる所有るもの也。我兵法において、足に替る事なし、常の道をあゆむがごとし。敵の拍子に随ひ、いそぐ時、静かなる時の、身の位を得て、たらず、あまらず、足のしどろになきやうにあるべき也。大分の兵法にしても、足をはこぶ事肝要也。其故は、敵の心をしらず、むさとはやくかゝれば、拍子ちがひ、勝ちがたきもの也。又足ぶみ静かにては、敵うろめきありてくづるゝといふ所を見つけずして、勝つ事をぬかして、はやく勝負つけ得ざるもの也。うろめきくづるゝ場を見わけて、少しも敵をくつろがせざるやうに勝つ事肝要也。能々鍛練有るべし。

〔訳文〕

足のふみ方に、浮足、飛足、はね足、踏みつける足、からす足などといって、いろいろと足を早くつかう方法がある。これらはわが兵法から見るならば、すべて不十分と思われる。

浮足をきらう理由は、戦いとなれば、必ず足はうくようになるので、しっかりと確実に足をふむことが大切であるからである。

また、飛足がよくないのは、飛足は飛びあがると、それにとらわれ、つぎの動作の自由を失うからである。いく度も飛ぶ必要はないのだから、飛足はよくないのである。
また、はね足は、はねるという気持があっては、上手くゆかないものである。
踏みつける足は、待の足といって、敵に先手をとられる足であって、とくにきらうのである。
そのほか、からす足など、いろいろな早い足づかいがある。ときには沼地、湿地、谷川、石原、細道などでも、敵と斬り合うことはあるから、その場所によっては、飛びはねることができず、早い足づかいができないこともあるのである。
わが兵法においては、闘いのときも、足づかいは平常と、かわることはない。平生、道を歩むように、敵の拍子に応じ、急ぐとき、静かなときと、身の状態にあわせて、足らず、余らず、足どりの乱れのないようにすべきである。
多人数の戦いにあっても、足のはこびが肝要である。そのわけは、敵の意図を知らずに、やたらに早くかかれば、拍子が狂って勝を得られなくなるものである。また、出足がおくれれば、敵がうろたえて崩れるところが見つからず、勝機をとり逃して、早く勝負をつけることができなくなるのである。敵がうろたえ崩れる状況をよく見て、少しも敵に余裕を与えぬ

ようにして勝つことが肝心である。よくよく鍛錬せよ。

一　他の兵法に、はやきを用ゐる事

兵法のはやきといふ所、実の道にあらず。はやきといふ事は、物毎に拍子の間にあはざるによつて、はやきおそきといふ心也。其道上手になりては、はやく見えざる物也。縦へば、人にはや道といひて、四十里五十里行くものもあり。是も朝より晩まではやくはしるにてはなし。道のふかんなるものは、一日はしるやうなれども、はかゆかざるもの也。乱舞の道に、上手のうたふ謡に、下手のつけてうたへば、おくるゝ心ありていそがしきもの也。又、鼓・太鼓に老松をうつに、静かなる位なれ共、下手は是にもおくれさきだつ心あり。高砂はきふなるくらゐなれども、はやきといふ事悪しし。はやきはこけるといひて、間にあはず、勿論おそきも悪しし。是も上手のする事は緩々と見えて、間のぬけざる所也。諸事しつけたるもののする事は、いそがしく見えざる物也。此たとへをもつて、道の理をしるべし。殊に兵法の道において、はやきといふ事悪しし。其子細は、是も所によりて、沼・ふけなどにて、身足ともにはやくゆきがたし。太刀はいよ〳〵はやくきる事なし。はやくきら

んとすれば、扇・小刀のやうにはあらで、ちやくときれば、少しもきれざるもの也。能々分別すべし。大分の兵法にしても、はやくいそぐ心わろし。枕をおさゆるといふ心にては、少しもおそき事はなき事也。亦人のむさとはやき事などには、そむくといひて、静かになり、人につかざる所肝要也。此心の工夫・鍛練有るべき事也。

〔訳文〕

兵法にあって、剣さばきの速いことを尊ぶのは正しい道ではない。速いというのは、拍子に合っていたり、合っていなかったりすることによって、剣さばきの速い遅いということがあるのである。

どんな道にでも、上達すれば決して速いとは見えないものである。たとえば早道といって、一日に四十里・五十里も行く人があるが、これも朝から晩まで早く走るわけではない。未熟なものは、一日走っていても、その成果は上らぬものである。舞をまうのに、上手な人がうたう謡に、下手な人がついてうたえば、遅れそうになり、せわしい気持ちとなるものである。また能の老松を鼓・太鼓でうつのに、静かな曲であるが、下手なものがうてば、それにおくれてしまうような気分となる。高砂は急な曲であるが、早く打てばよいのではない。

早く走ろうとすれば、転倒することが多いように、拍子の間にはずれてしまうものである。もちろん、おそいこともよくない。上手な人のすることは、いかにもゆっくりと見えて、しかも間がぬけていないものである。諸事に熟練した人のすることは、こせこせしたようには見えないものである。このたとえによって、この道理を知ることができよう。

ことに兵法の道においては、早いということはよくない。そのわけは、場所によって、沼地、湿地などでは、身も足も、早く行くことはできない。太刀は、なおさら早く斬ることができない。もし早く斬ろうとすれば扇や小刀を使うようにはいかないから、小手先だけで斬れば、少しも斬れないであろう。よくよく考えてみよ。

多人数の戦いにおいても、早く早くと急ぐ心はよくない。枕をおさえるというくらいの気持ちで、少しもおそいことはないのである。

また相手がわけもなく急いでいるときには、これに背くといって、静かになり、相手にひきずられないことが肝心である。このことを工夫鍛錬すべきである。

一　他流に、奥表といふ事

兵法のことにおいて、いづれを表といひ、何れを奥といはん。芸により、ことに

ふれて、極意・秘伝などといひて、奥口あれども、敵と打合ふ時の理においては、表にてたゝかひ、奥をもつてきるといふ事にあらず。我兵法のをしへやうは、初而道を学ぶ人には、其わざのなりよき所をさせならはせ、合点のはやくゆく理を先にをしへ、心の及びがたき事をば、其人の心をほどくる所を見わけて、次第〳〵に深き所の理を後にをしゆる心也。され共、大形は其ことに対したる事などを、覚えさするによつて、奥口といふ所なき事也。されば世の中に、山のおくを尋ぬるに、猶奥へゆかんとおもへば、又口へ出づるもの也。何事の道においても、奥の出合ふ所もあり、口を出してよき事もあり。此戦の理において、何をかかくし、何をか顕はさん。然るによつて、我道を伝ふるに、誓紙・罰文などといふ事を好まず、此道を学ぶ人の智力をうかゞひ、直なる道ををしへ、兵法の五道・六道のあしき所をすてさせ、おのづから武士の法の実の道に入り、うたがひなき心になす事、我兵法のをしへの道也。能々鍛練有るべし。

〔訳文〕

兵法にあって、何を表、何を奥ということができようか。芸によっては、ときおり、極意、

秘伝などといって、奥儀に通ずる入口があるけれども、いざ敵と打合うときになれば、表で闘い、奥で斬るなどというものではない。

わが兵法を人に教える場合には、はじめて兵法を学ぶ人には、その人の技倆に応じて、早くできそうなところからまず習わせ、早く理解できるような道理を先に教え、理解しがたい道理については、その人の理解力の進んできたころあいにしたがって、次第に深い道理を後に教えていくよう心がけている。しかしながら、大抵は、実際に敵と打ち合うときの道理を通して、理解させているのであるから、奥儀に通じる入口ということはないのである。たとえば世間一般に山の奥へ行こうとして、もっと奥へ行こうと思えば、かえって入口へ出てしまうものである。何ごとの道であっても、奥儀が役に立つこともあり、また表を使って有効なこともある。

この兵法の道にあっては、何をかくし、何をおおやけにすることなどあるであろうか。したがって、わが流儀を伝えるには、誓紙や罰文などというものは用いない。この兵法を学ぶ人の智力を見て、正しい道を教え、兵法を学ぶうちに身につくさまざまな欠点を除き、自然に武士の道の正しいあり方を悟らせて、ゆれ動かない心にすることが、わが兵法を人に教える道である。よくよく鍛錬しなければならぬ。

右他流の兵法を九ケ条として、風の巻に有増書付くる所、一々流々、口より奥に至る迄、さだかに書顕はすべき事なれども、わざと何流の何の大事とも名を書きしるさず。其故は、一流々の見たて、其道〳〵のいひわけ、人により、心にまかせて、それ〴〵の存分あるものなれば、同じ流にも少々心の替るものなれば、後々迄の為に、ながれ筋共書きのせず、他流の大躰九つにいひわけて、世の中の道、人の直なる道理より見せば、長きにかたづき、短きを理にし、つよき・よわきとかたづき、あらき・こまかなるといふ事も、みなへんなる道なれば、他流の口奥と顕はさずとも、皆人の知るべき儀也。我一流において、太刀に奥口なし、構に極りなし。唯心をもつて其徳をわきまゆる事、是兵法の肝心也。

正保二年五月十二日　新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年　寺尾夢世勝延（花押）

二月五日

山本源介殿

〔訳文〕

右は他流の兵法を九ヵ条として、風の巻としてあらまし書き記した。一流一流について、入口より奥儀までを、くわしく書きあらわさなければならないが、わざと、何何流の何の極意といった名を記すことはしなかった。

そのわけは、それぞれの流派による見方、各〻の流派による理論は、その人々の気持によって各自の考えがあるから、同じ流儀の中でも、多少は見解の相違があるものであるから、後のちまでのために、どの流れ、どの太刀筋ということは書かなかったのである。そこで他流の大体を、九つにわけて見たのである。世間の正しい道理からすれば、長い太刀に偏り、あるいは短い太刀をよいとし、強弱のみにこだわり、大まかなこと、または細かなことも、すべて偏った道であることが、他流の入口や奥儀のことを書かなくとも、すべて知るはずであろう。

わが一流の兵法にあっては、太刀の使い方に初心も奥儀もない。極意の構えなどということもない。ただ心の正しい動きによって、兵法の徳をわきまえることが、最も肝心なのである。

正保二年五月十二日　　新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年

二月五日　　寺尾夢世勝延（花押）

山本源介殿

空之巻

空之巻

二刀一流の兵法の道、空の巻として書顕はす事、空といふ心は、物毎のなき所、しれざる事を空と見たつる也。勿論空はなきなり。ある所をしりてなき所をしる、是則ち空也。世の中において、あしく見れば、物をわきまへざる所を空と見る所、実の空にはあらず、皆まよふ心なり。此兵法の道においても、武士として道をおこなふに、士の法をしらざる所、空にはあらずして、色々まよひありて、せんかたなき所を、空といふなれども、是実の空にはあらざる也。武士は兵法の道を慥に覚え、其外武芸を能くつとめ、武士のおこなふ道、少しもくらからず、心のまよふ所なく、朝々時々におこたらず、心意二つの心をみがき、観見二つの眼をとぎ、少しもくもりなく、まよひの雲の晴れたる所こそ、実の空としるべき也。実の道をしらざる間は、仏法によらず、世法によらず、おのれ〳〵は慥なる道とおもひ、よき事とおもへども、心の直道よりして、世の大かねにあはせて見る時は、其身〳〵の心のひいき、其目〳〵のひづみによつて、実の道にはそむく物也。其心をしつて、直なる

所を本とし、実の心を道として、兵法を広くおこなひ、たゞしく明らかに、大きなる所をおもひとつて、空を道とし、道を空と見る所也。

空は有レ善無レ悪、智は有也、利は有也、道は有也、心は空也。

正保二年五月十二日　新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年

二月五日　寺尾夢世勝延（花押）

山本源介殿

〔訳文〕

二刀一流の兵法の道を、空の巻として書きあらわした。空とはきまった形がないということ、形を知ることができないものを空と見るのである。もちろん空とは何もないことである。ものがあるところを知って、はじめて、ないところを知ることできる。これがすなわち空である。

世間一般の卑俗な見方では、ものごとの道理を弁別しないところを空だとしているが、こ

れは正しい空ではない。それはすべて迷いの心にほかならない。
この兵法の道においても、武士として道を行うのに、武士のあり方を心得ぬ者が、空になりきれずに、いろいろと迷い、なすべき方法のないところを空と称しているが、これは正しい意味の空ではない。
武士は、兵法の道を確実に会得し、そのほかいろいろな武芸を身につけ、武士として行なわねばならない道についても心得ぬところがなく、心に迷いがなく、日々刻々に怠ることなく、心と意の二つの心をみがき、観と見の二つの眼をとぎすませ、少しもくもりなく、一切の迷いの雲が晴れわたった状態こそ、正しい空であるということができる。
正しい道を悟らぬうちは、仏法によることなく、世間の法にもよることなく、自分だけで、正しい道だと思いこみ、よいことだと思っているが、正しい道から世間の規準に照らして見るときには、人それぞれのひいき目の気持ちや、それぞれ違った見方によって、正しい道からはずれているのである。
この道理をよくわきまえて、まっすぐなところに則り、正しい心を道として、兵法の道を世にひろめ、正しく、明らかに、大局をよくつかんで、一切の迷いがなくなった空こそが兵法の究極であり、兵法の道を朝鍛夕錬することによって空の境地に到達できるのである。

空というものには善のみがあって悪はない。兵法の智恵、兵法の道理、兵法の道がすべて備わることにより、はじめて一切の妄念を滅し去った空の境地に到達することができるのである。

正保二年五月十二日　新免武蔵

寺尾孫丞殿

寛文七年

二月五日　寺尾夢世勝延（花押）

山本源介殿

〔参考〕

㊱一　万理一空の事

万理一空の所、書あらはしがたく候へば、自身御工夫なさるべきものなり。

⑧一　心持の事

心の持様は、めらず、からず、たくまず、おそれず、直に広くして、意のこゝろかろく、

心のこゝろおもく、心を水にして、折にふれ、事に応ずる心也。水にへきたんの色あり。一滴もあり、滄海も在り。能々吟味あるべし。

〔付記〕

万理一空については、冒頭の「五輪書を読むにあたって」の「武蔵の禅―万理一空とは」を参考とせよ。

兵法三十五箇条

兵法二刀の一流、数年鍛錬(たんれん)仕処、今初て筆紙にのせ申事、前後不足の言のみ難二申分一候へ共、常々仕覚候兵法の太刀筋心得(たちすじのこころえ)以下、任二存出一、大形書顕候者也。

①一　此道二刀と名付事

此道二刀として太刀を二ツ持儀、左の手にさして心なし。太刀を片手にて取ならはせん為なり。片手にて持得(もっとく)、軍陣、馬上、川沿、細道、石原、人籠(ひとごみ)、かけはしり。若(もし)左に武道具持たる時、不如意(ふにょい)に候へば、片手にて取なり。太刀を取候事、初はおもく覚れ共、後は自由に成候也。たとへば、弓を射ならひては其力つよく、馬に乗得ては其力有。凡下のわざ、水主はろかひを取て其力有、土民はすきくはを取て其力強し。太刀も取習へば、力出来る物也。但強弱、人々の身に応じたる太刀を持べき物也。

②一　兵法の道見立処の事

此道、大分の兵法、一身の兵法に至迄、皆以て同意なるべし。今書付る一身の兵法、たとへば心を大将とし、手足を臣下郎等と思ひ、胴体を歩卒土民となし、国を治め身を修る事、大小共に、兵法の道におなじ。兵法の仕立様、惣体一同にして、余る所なく不足なる処なく、不レ強不レ弱、頭より足のうら迄、ひとしく心をくばり、片つりなき様に仕立る事也。

③一　太刀取様の事

太刀の取様は、大指人さし指を浮て、たけたか中くすしゆびと小指をしめて持候也。太刀にも手にも、生死と云事有り。構る時、受る時、留る時などに、切る心をわすれて居付く手、是れ死ぬると云也。生ると云は、いつとなく、太刀も手も出合やすく、かたまらずして、切り能き様にやすらかなるを、是れ生る手と云也。手くびはからむ事なく、ひぢはのびすぎず、かゞみすぎず、うでの上筋弱く、下すぢ強く持也。能々吟味あるべし。

④一　身のかゝりの事

身のなり、顔はうつむかず、余りあふのかず、肩はさゝず、ひづまず、胸を出さずして、腹を出し、こしをかゞめず、ひざをかためず、身を真向にして、はたばり広く見する物也。

常住兵法の身、兵法常の身と云事、能々吟味在るべし。

⑤一　足ぶみの事

足づかひ、時々により、大小遅速は有れ共、常にあゆむがごとし。足に嫌ふ事、飛足、うき足、ふみすゆる足、ぬく足、おくれ先立つ足、是皆嫌ふ足也。足場いか成る難所なりとも、構ひなき様に慥にふむべし。猶奥の書付にて能くしるべき也。

⑥一　目付の事

目を付ると云所、昔は色々在ることなれ共、今伝る処の目付は、大体顔に付るなり。目のおさめ様は、常の目よりもすこし細き様にして、うらやかに見る也。目の玉を不レ動、敵合近く共、いか程も、遠く見る目也。其目にて見れば、敵のわざは不レ及レ申、左右両脇迄も見ゆる也。観見二ツの見様、観の目つよく、見の目よわく見るべし。若又敵に知らすると云ふ目在り。意は目に付、心は不レ付レ物也。能々吟味有べし。

⑦一　間積りの事

間を積る様、他には色々在れ共、兵法に居付く心在るによつて、今伝る処、別の心あるべからず。何れの道なりとも、其事になるれば、能知る物なり。大形は我太刀、人にあたる程の時は、人の太刀も我にあたらんと思ふべし。人を打んとすれば、我身を忘るゝ物也。能々工夫あるべし。

⑧一　心持の事

心の持様は、めらず、からず、たくまず、おそれず、直に広くして、意のこゝろかろく、心のこゝろおもく、心を水にして、折にふれ、事に応ずる心也。水にへきたんの色あり。一滴もあり、滄海も在り。能々吟味あるべし。

⑨一　兵法上中下の位を知る事

兵法に身構有り。太刀にも色々構を見せ、強く見え、はやく見ゆる兵法、是下段と知るべし。又兵法こまかに見え、術をてらひ、拍子能様に見え、其品きら在て、見事に見ゆる兵法、是中段の位也。上段の位の兵法は、不レ強不レ弱、角らしからず、はやからず、見事にもなく、悪敷も見えず、大に直にして、静に見ゆる兵法、是上段也。能々吟味有べし。

⑩一　いとかねと云事
常に糸かねを心に持べし。相手の心に、いとを付て見れば、強き処、弱き処、直き所、ゆがむ所、はる所、たるむ所、我心をかねにして、すぐにして、いとを引あて見れば、人の心能しるゝ物也。其かねにて、円きにも、角なるにも、長きをも、短きをも、ゆがみたるをも、直なるをも、能知るべき也。工夫すべし。

⑪一　太刀の道の事
太刀の道を能知らざれば、太刀心の儘に振りがたし。其上つよからず。太刀のむねひらを不レ弁、或は太刀を小刀に仕ひなし、或はそくひべらなどの様に仕付れば、かんじんの敵を切る時の心に出合がたし。常に太刀の道を弁へて、重き太刀の様に、太刀を静にして、敵に能あたる様に、鍛錬有べし。

⑫一　打と当ると云事
打とあたると云事、何れの太刀にてもあれ、うち所を慥に覚え、ためし物など切る様に、

おもふさま打つ事なり。又あたると云事は、慥なる打見えざる時、いづれなりともあたる事有り。あたるにも、つよきはあれども、うつにはあらず。敵の身にあたりても、太刀にあたりても、あたりはづしても不レ苦。真の打をせんとて、手足をおこしたつる心なり。能々工夫すべし。

⑬一　三ツの先と云事

三ツの先と云は、一ツには、我敵の方へかゝりての先也。二ツには、敵我方へかかる時の先也。又三ツには、我も懸り、敵も懸る時の先也。是三ツの先なり。我かゝる時の先は、身は懸る身にして、足と心を中に残し、たるまず、はらず、敵の心を動かす、是懸の先也。又敵懸り来る時の先は、我身に心なくして、程近き時、心をはなし、敵の動きに随ひ、其儘先に成べし。又互に懸り合ふ時、我身をつよく、ろくにして、太刀にてなり共、身にて成共、足にて成共、心にて成共、先になるべし。先を取る事肝要也。

⑭一　渡を越すと云事

敵も我も互にあたる程の時、我太刀を打懸て、との内こされんとおもはゞ、身も足もつれ

て、身際へ付べき也。とをこして、気遣はなき物也。此類、跡先の書付にて、能々分別有るべし。

⑮一　太刀に替る身の事

太刀にかはる身と云は、太刀を打出す時は、身はつれぬ物也。又身を打と見する時は、太刀は迹より打つ心也。是空の心也。太刀と身と心と一度に打事はなし。中に在る心、中に在る身、能々吟味すべし。

⑯一　二ツの足と云事

二ツの足とは、太刀一ツ打つ内に、足は二ツはこぶ物也。太刀に乗り、はづし、つぐもひくも、足は二ツの物也。足をつぐと云心、是なり。太刀一ツに足一ツづゝふむは、居付はまる物也。二ツと思へば、常にあゆむ足也。能々工夫あるべし。

⑰一　剣を踏むと云事

太刀の先を足にてふまゆると云心也。敵の打懸る太刀の落つく処を、我左の足にてふまゆ

る心也。ふまゆる時、太刀にても、身にても、心にても、先を懸れば、いかやうにも勝つ位なり。此心なければ、とたんとたんとなりて、悪敷事也。足はくつろぐる事もあり。剣をふむ事度々にはあらず。能々吟味在るべし。

⑱一　陰を押ゆると云事

陰のかげをおさゆると云事、敵の身の内を見るに、心の余りたる処もあり、不足の処も在り。我太刀も、心の余る処へ、気を付る様にして、たらぬ所のかげに、其儘つけば、敵拍子まがひて、勝能き物也。されども、我心を残し、打処を不忘所肝要なり。工夫あるべし。

⑲一　影を動かすと云事

影は陽のかげ也。敵太刀をひかへ、身を出して構ふ時、心は敵の太刀をおさへ、身を空にして、敵の出たる処を、太刀にてうてば、かならず敵の身動出すなり。動出れば、勝つ事やすし。昔はなき事也。今は居付心を嫌て、出たる所を打也。能々工夫有るべし。

⑳一　弦をはづすと云事

弦をはづすとは、敵も我も心ひつぱる事有り。身にても、太刀にても、足にても、心にても、はやくはづす物也。敵おもひよらざる処にて、能々はづるゝ物也。工夫在るべし。

㉑一　小櫛のおしへの事

おぐしの心は、むすぼふれるを解くと云儀也。我心に櫛を持て、敵のむすぼふらかす処を、それ〴〵にしたがひ、とく心也。むすぼふると、ひきはると、似たる事なれども、引はるは強き心、むすぼふるは弱き心、能々吟味有べし。

㉒一　拍子の間を知ると云事

拍子の間を知るは、敵により、はやきも在り、遅きもあり、敵にしたがふ拍子也。心おそき敵には、太刀あひに成と、我身を動さず、太刀のおこりを知らせず、はやく空にあたる、是一拍子也。敵の気のはやきには、我身と心をうち、敵動きの跡を打事、是二のこしと云也。又無念無想と云は、身を打様になして、心と太刀は残し、敵の気の間を、空よりつよくうつ、是無念無想也。又おくれ拍子と云は、敵太刀にてはらんとし、受んとする時、いかにもおそく、中にてよどむ心にして、まを打事、おくれ拍子也。能々工夫あるべし。

㉓一　枕の押へと云事

枕のおさへとは、敵太刀打出さんとする気ざしをうけ、うたんとおもふ、うの字のかしらを、空よりおさゆる也。おさへやう、心にてもおさへ、身にてもおさへ、太刀にてもおさゆる物也。此気ざしを知れば、敵を打に吉(よし)、入るに吉、はづすに吉、先を懸るによし。いづれにも出合う心在り。鍛錬肝要也。

㉔一　景気を知ると云事

景気を知ると云は、其場の景気、其敵の景気、浮沈、浅深、強弱の景気、能々見知べき者也。いとかねと云は、常々の儀、景気は即座の事なり。時の景気に見受ては、前向てもかち、後向てもかつ。能々吟味有べし。

㉕一　敵に成ると云事

我身、敵にしておもふべし。或は一人取籠(とりこも)るか、又は大敵か、其道達者なる者に会ふか、敵の心の難堪をおもひ取べし。敵の心の迷ふをば知らず、弱きをも強とおもひ、道不達者

なる者も達者に見なし、小敵も大敵と見ゆる、敵は利なきに利を取付る事在り。敵に成て能く分別すべき事也。

㉖一　残心・放心の事

残心・放心は、事により時にしたがふ物也。我太刀を取て、常は意のこゝろをはなち、心のこゝろをのこす物也。又敵を慥に打時は、心のこゝろをはなち、意のこゝろを残す。残心・放心の見立、色々在る物也。能々吟味すべし。

㉗一　縁の当りと云事

縁のあたりと云は、敵太刀切懸るあひ近き時は、我太刀にて張る事も在り、受る事も在り、あたる事も在り。受るもはるもあたるも、敵を打つ太刀の縁とおもふべし。乗るもはづすもつぐも、皆うたんためなれば、我身も心も太刀も、常に打たる心也。能々吟味すべし。

㉘一　しつかうのつきと云事

漆膠のつきとは、敵の身際へよりての事也。足腰顔迄も、透なく能つきて、漆膠にて物を

付るにたとへたり。身につかぬ所あれば、敵色々わざをする事在り。敵に付く拍子、枕のおさへにして、静成る心なるべし。

㉙一　しうこうの身と云事

愁猴(しゅうこう)の身、敵に付く時、左右の手なき心にして、敵の身に付べし。悪敷(あしく)すれば、身はのき、手を出す物也。手を出せば、身はのく者也。若(もし)左の肩かひな迄は、役に立べし。手先にあるべからず。敵に付く拍子は、前におなじ。

㉚一　たけくらべと云事

たけをくらぶると云事、敵のみぎはに付く時、敵とたけをくらぶる様にして、我身をのばして、敵のたけよりは、我たけ高く成る心、身ぎはへ付く拍子は、何(いずれ)も同意也。能々吟味有るべし。

㉛一　扉(とぼそ)のおしへと云事

とぼその身と云は、敵の身に付く時、我身のはゞを広く直(すぐ)にして、敵の太刀も身も、たち

かくすやうに成て、敵と我身の間の透のなき様に付べし。又身をそばめる時は、いかにもうすく、すぐに成て、敵の胸へ、我肩をつよくあつべし。敵を突たほす身也。工夫有べし。

㉜一　将卒のをしへの事

将卒と云は、兵法の利を身に請ては、敵を卒に見なし、我身を将に成して、敵にすこしも自由をさせず、太刀をふらせんも、すくませんも、皆我心の下知につけて、敵の心にたくみをさせざる様にあるべし。此事肝要なり。

㉝一　うかうむかうと云事

有構無構と云は、太刀を取て身の間に有る事、いづれもかまへなけれども、かまゆるこゝろ有るによりて、太刀も身も居付く者なり。所によりことにしたがひ、いづれに太刀は有とも、かまゆると思ふ心なく、敵に相応の太刀なれば、上段のうちにも三色あり。中段にも下段にも三ツの心有り。左右の脇までも同事なり。爰をもつてみれば、かまへはなき心也。能々吟味有べし。

㉞一　いはほの身と云事
岩尾の身と云は、うごく事なくして、つよく大なる心なり。身におのづから万理を得て、つきせぬ処なれば、生有る者は、皆よくる心有る也。無心の草木迄も、根ざしがたし。ふる雨、吹く風もおなじこゝろなれば、此身能々吟味あるべし。

㉟一　期をしる事
期をしると云事は、早き期を知り、遅き期を知り、のがるゝ期を知り、のがれざる期を知る。一流に直道と云極意の太刀あり。此事品々口伝なり。

㊱一　万理一空の事
万理一空の所、書あらはしがたく候へば、自身御工夫なさるべきものなり。

右三十五箇条は、兵法の見立、心持に至るまで大概書記申候。若端々申残す処も、皆前に似たる事どもなり。又一流に一身仕得候太刀筋のしな〴〵口伝等は、書付におよばず。猶御不審の処は、口上にて申あぐべき也。

寛永十八年二月吉日

新免武蔵

玄信

独行道

一、世々の道をそむく事なし。

一、身にたのしみをたくまず。

一、よろづに依怙の心なし。

一、身をあさく思、世をふかく思ふ。

一、一生の間よくしん（欲心）思はず。

一、我事において後悔をせず。

一、善悪に他をねたむ心なし。

一、いづれの道にも、わかれをかなしまず。

一、自他共にうらみかこつ心なし。

一、れんぼ（恋慕）の道思ひよるこゝろなし。

一、物毎にすき（数奇）このむ事なし。

一、私宅においてのぞむ心なし。

一、身ひとつに美食をこのまず。
一、末々代物なる古き道具所持せず。
一、わが身にいたり物いみする事なし。
一、兵具は各（格）別、よ（余）の道具たしなまず。
一、道においては、死をいとはず思ふ。
一、老身に財宝所領もちゆる心なし。
一、仏神は貴し、仏神をたのまず。
一、身を捨ても名利はすてず。
一、常に兵法の道をはなれず。

正保弐年
　五月十二日　　　新免武蔵
　　　　　　　　　　玄信（在判）

（なお、右二十一箇条のうち、『二天記』および宮本武蔵遺蹟顕彰会本では、「身をあさく思、世をふかく思ふ」「身を捨ても名利はすてず」の二条を削除して十九箇条としている。）